

少将滋幹の母（谷崎潤一郎）

その一

此の物語はあの名高い色好みの平中のことから始まる。

源氏物語未摘花の巻の終りの方に、「いといとほしと思はせて御硯の瓶の水に陸奥紙をぬらしてのごひ給へば、平中がやうに色どり添へ給ふな、赤からんはあへなんと戯れ給ふ云々」とある。これは源氏がわざと自分の鼻のあたまで紅を塗って、いくら拭いても取れないふりをして見せるので、当時十一歳の紫の上が氣を揉んで、紙を濡らして手ずから源氏の鼻のあたまで拭いてやろうとする時に、「平中のように墨を塗られたら困りますよ、赤いのはまだ我慢しますが」と、源氏が冗談を云うのである。源氏物語の古い注釈書の一つである河海抄に、昔、平中が或る女のもとへ行つて泣く真似をしたが、巧い工合に涙が出ないので、あり合う硯の水指をそつとふところに入れて眼のふちを濡らしたので、女が心づいて、水指の中へ墨を磨り入れておいた、平中はそうとは知らず、その墨の水で眼を濡らしたので、女が平中に鏡を示して、「われにこそつらはは君が見すれども人にすみつく顔のけしきよ」と詠んだ故事があつて、源氏の言葉はそれにもとづく由が記してある。河海抄は此の故事を今昔物語から引用し、「大和物語にも此事あり」と云っているけれども、現存の今昔や大和物語には載っていない。が、源氏にこんな冗談を云わせているのを見ると、此の平中の墨塗りの話は好色漢の失敗談として、既に紫式部の時代に一般に

流布していたのであろう。

平中は古今集その他の勅撰集に多くの和歌を遺しているし、系図も一往明かであるし、その頃のいろ／＼の物語に現れて来るので、実在した人物であることは紛れもないが、死んだのは延長元年とも六年とも云つて確かでなく、生れた年は何の書にも記してない。今昔物語には、「兵衛佐平定文と云ふ人ありけり、字をば平中とぞ云ひける、御子の孫にて賤しからぬ人なり、そのころの色好みにて人の妻、娘、宮仕人、見ぬは少くなんありける」と云い、又別の所で、「品も賤しからず、形有様も美しかりけり、けはひなんども物云ひもをかしかりければ、そのころ此の平中に勝れたる者世になかりけり、かゝる者なれば、人の妻、娘、いかに況んや宮仕人は此の平中に物云はれぬはなくぞありける」とも云つてあるが、こゝに記す通りその本名は平定文（或は貞文）で、桓武天皇の孫の茂世王の孫に当り、右近中将従四位上平好風の男である。平中と云うのは、三人兄弟の中の二番目の子息であるからとも云い、字を仲と云つたからとも云う説があつて、平仲と書いてある例も多い。（弄花抄に依ればヘイチユウのチュウは濁りて読むべしとある）蓋し平中とは、なお在原業平のことを在五中将と呼んだ如きであらうか。

そう云えば業平と平中とは、共に皇族の出である点、平安朝初期の生れである点、美男子で好色家であつた点、歌が上手で、前者が三十六歌仙の一人、後者が後六々選の一人である点、前者に伊勢物語があるように、後者にも平中物語とか平中日記とか云うものがある点等でよく似ている。たゞ平中は業平よりも時代がやゝ下っており、今の墨塗りの話や、本院の侍従に翻弄された話などから想像すると、業平と違つていくらか三枚目的なところがあつたような

気がする。平中日記を見ても、その内容は必ずしも花々しい恋愛談ではなく、相手に逃げられたり、体よく捌かれたり、とゞのつまりは「物も云はでやみにけり」とか、「煩はしとて男やみにけり」とか云う風な終りを告げている挿話が随分ある。又七条の後の宮の女房武蔵との関係のように、たま／＼望みが叶ったかと思えば、その翌日から公用で四五日京都を離れるようなことになり、而も不覚にも女に事情を知らしてやるのを怠ったので、女はたよりのないのを歎いて厄になつてしまつたと云うような、そ／＼かしい話などもある。

ところで、平中が数ある女たちの中で、一番うつゝを抜かして恋いこがれ、おまけに散々な目に遭わされて、最後には命までも落すようなことになつた相手は、侍従の君、——世に謂う本院の侍従であつた。

此の婦人は、左大臣藤原時平の邸に宮仕えしていた女房であるが、時平のことを本院の左大臣と呼ぶところから、此の女のことを本院の侍従と呼ぶ。その頃平中の官はわずかに兵衛佐であつた。彼は血統や家柄はよかつたけれども、官職は低かつたのであつた。それに何分なまけ者で、「宮仕へをば苦しき事にして、たゞ逍遙をのみして」と日記にあるから、要するに役所勤めなんか嫌いで、のらりくらりしていたのであらう。帝はそれをお憎みになつて、懲らしめのために一時免官せしめられたことなどもあつた。尤も一説に、彼が免官になつたのは、彼よりも官職の上の或る男が彼と女を争つたところ、女がその男を嫌つて平中の方へ靡いたので、恋の競争に破れた男が平中を恨み、彼のことを何や彼やと朝廷に讒言したからであるとも云う。古今集卷十八雑の下所載「憂き世にはかどさせりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする」と云う歌は、

「つかさの解けて侍りける時よめる」と云う詞書の通り、その折彼が出家遁世の念を起して詠んだのであるが、帝の御母后のものにも馴染の女房があつたので、「なり果てむ身をまつ山の時鳥いまは限りとなき隠れなむ」と云う歌をその女の所へ送つて、一方では御母后に運動をし、一方では父の好風が帝に哀訴したので、間もなく再び官を賜つたのであつた。

勤めぎらいの平中は、宮中への出仕は怠りがちであつたらしいが、本院の左大臣のもとへは始終御機嫌伺いに行つた。本院と云うのは、中御門の北、堀川の東一丁の所にあつた時平の居館の名で、當時時平は故関白太政大臣基経、——昭宣公の嫡男として、時の帝醍醐帝の皇后穩子の兄として、権威並びない地位にあつた。時平（これはトキヒラが本当であらうが、古くからの云い習わしに従つて矢張シヘイと呼ぶことにしよう）が左大臣になつたのは昌泰二年、二十九歳の時であつて、初めの二三年の間は右大臣に菅原道真が控えていた、ために多少牽制もされたけれども、昌泰四年の正月にその政敵を陥れることに成功してからは、名実共に天下の一人であつた。そして此の物語の時代にも、まだ三十を三つか四つ越したぐらいに過ぎなかつた。今昔物語には、此の大臣もまた「形美麗に有様いみじきこと限りなし」「大臣のおん形音気はひ薫の香よりはじめて世に似ずいみじきを云々」と記している。それで、われ／＼は富貴と権勢と美貌と若さとに恵まれた驕慢な貴公子を、直ちに眼前に描くことが出来る。従来藤原時平と云うと、あの車曳の舞台に出る公卿悪の標本のような青隈の顔を想い浮かべがちで、何となく奸佞邪智な人物のように考えられて来たけれども、それは世人が道真に同情する餘りそうだったので、多分實際はそれ程の悪党ではなかつたであらう。嘗て高山樗牛は菅公論

を著わして、道真が彼を登用して藤原氏の専横を抑えようとし給うた宇多上皇の優渥な寄託に背いたのを批難し、菅公の如きは意気地なしの泣きみぞ詩人で、政治家でも何でもないと言ったことがあるが、そう云う点では時平の方が却って政治的実行力に富んでいたかも知れない。大鏡は時平を悪くばかりは云わず、愛すべき点があったことをも伝えている中に、可笑しいことがあると直ぐ笑い出して笑いが止まらない癖があったと云うが如きは、無邪気で明朗潤達な一面があったことを證するに足りるのであるが、その一例として滑稽な逸話がある。まだ道真が朝にあって、時平と二人で政務を見ていた頃のこと、いつも時平がひとりで非道に事を処理して、道真に「嘴」を入れさせないので、某と云う記録係の属官が一計を案じ、或る日文案を文挟みに挟んで左大臣の前に捧げて行き、それを時平に渡そうとするはずみにわざと音高く放屁をした。時平は途端に噴き出してわッはく腹を抱え始めたが、いつ迄たつても笑いやまず、体がふるえてその文案を受取ることが出来ないで、その間に道真が悠々と事務を執り、思いのまゝに裁断を下した、と云うのである。

時平は又なかく勇氣があつた。道真の死後、その霊が化して雷神となつて朝臣に讐をすると信ぜられていた時分、或る日清凉殿に落雷して満廷の公卿たちが顔色を失つた折に、時平は凜然と太刀を引き抜いて大空を睨み、「あなたは生きておられた時にも私の次の位だったではないか、たとい神になられても、此の世へ来られたら私を尊敬なさるのが当然ですぞ」と叱咤したので、その威勢を恐れたかのように、雷鳴が一時静かになった。されば大鏡の作者も、いろいろ悪いことをした大臣ではあつたけれども「大和魂などはいみじくおはしましたるものを」と云っている。こう云うと、時平

はたゞ向う見ずの、お坊ちゃん育ちの餓鬼大将のようにも取れるが、案外そうでない一面もあつて、醍醐帝と此の大臣とが密かに謀つて世間の奢りを戒めたと云う話なども伝わっている。それは或る時、時平が帝の定め給うた制を破つた華美な装束をして参内したのを、帝が小部の隙間から御覧になつて急に機嫌を損ぜられ、職事を召されて、「近頃過差の取締がきびしいのに、左大臣たる者がいかに一人の人であるとは云え、殊のほかきらびやかな装いをして参るとは怪しからぬ、早々退出するように申し付けよ」と仰せられたので、職事はどうなることやらと案じながら、こわく仰せの趣を伝えると、時平は恐懼措く所を知らず、従者共に先を追わせることも禁じ、慌てふためいて退出して、以後一箇月ばかりは堅く居館の門を閉じて引籠つていた。たまく人が訪ねて来ても、「お上の御勘当が重いので」と云つて面接せず、御簾の外にも出なかつたので、漸く此の事が評判になり、世人が奢りを慎むようになったが、これは豫め時平が帝としめし合わせてしたことなのであつた。

平中が此の時平のところへしばく伺候したのは、権門に媚びて出世の緒を掴もうと云う世間並な下心もないことはなかつたであらうが、一つには此の大臣と兵衛佐とは話の馬が合うせいでもあつた。二人は官職や位階から云えば大きい隔りがあるけれども、系図や家柄を論ずれば平中も遜色はないのだし、趣味や教養も同等であるし、どちらも女好きな貴族の美男子なのである。従つて、二人が常にどんなことを面白がつてしゃべり合つていたか、大凡そ見当がつくのであるが、でも平中は、左大臣のお相手をするのが唯一の目的で此の邸へ来るのではなかつた。いつでも彼は夜が更けるまで御前で話し込んでから、頃あいを測つて暇を告げるので

あるが、そのまゝ真つ直ぐ自分の館へ帰ることなどはめつたになつた。大臣の前は帰つた体^{てい}にしておいて、実はそうつと女房たちの局^{つぼ}の方へ忍んで行き、侍従の君のいるあたりをうろくするのが例になつていて、ほんとうは此の方が目的なのであつた。

しかし甚だ笑止なことに、平中は去年以来此の忍び歩きを繰返して、或る時はこゝぞと思う遣戸^{やりと}の外で息を凝らしてみたり、勾欄^{こうらん}のほとりにゐんでみたり、根気よく機会をうかがっているのであるが、いつもの彼にも似ず、今度ばかりは運が悪くて、未だにその人の心を動かすことが出来ないのみか、世に稀な美女であると噂^{うわさ}の高いその容姿を、垣間^{かいま}見たことすらないのであつた。これは一つには、運が悪いだけではなく、何故か相手の人が故意に平中に出ることを避けているらしいからなので、そのために平中は一層懊^あれていた。こう云う場合、召使^{めい}われている女童^{わらわ}などを手馴^{てな}ずけて文の取次^{とりぎ}をして貰^{もら}うのが常套^{じょうたう}手段で、もちろんその辺にぬかりがあるのではなかつたが、それも、今日までに二三度持たせて遣つたのに、全然手答えがないのであつた。いつも平中は女童を掴まえて、「たしかに渡してくれたかね」と、しつこく念を押すのであるが、「えゝ、お渡ししたことはしたんですけれど、………」と、女童は口^{くち}こもりながら気の毒そうに平中の顔を見るのである。「お受け取りにはなつたんだね」「えゝ、たしかにお取りになりましたわ」「是非御返事を戴^{いた}きたいと、云つてくれたるうね」「それも、そう申上げたんですけれど………」
「そうしたら?」「何とも仰^おっしゃらないんですの」「でも、お読みにはなつたのだろうか」

「えゝ、多分ね、………」
と、平中が問い詰めれば問い詰めるほど、女童はいよく当惑するのである。

一度などはこんなことがあつた。

例に依つてこまぐと思ひのたけを書き綴^{つづ}つたあとに、せめて私はあなたが此の文を御覧下すつたかどうか、それだけでも知りたいのです、決してねんごろな御言葉をとほし申しません、御覧になつたのなら、見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越^{よこ}しになつて下さい、と、泣かんばかりの口調でした。めたのを持たせてやると、女童はついぞないことにニコくしながら戻つて来て、

「今日は御返事がありましたのよ」

と、一通の文を渡した。平中が胸をときめかしつゝ押し戴いて受け取つたことは云う迄もないが、急いで封を開いて見ると、小さな紙きれが一つ這入^{はい}っているだけであつた。なおよく見ると、「見たと云う二文字だけの御返事でもお寄越しになつて下さい」と書いてやつた、さっきの彼の文の中の「見た」と云う二字のところを破いて入れてあるのであつた。

これにはさしもの平中も開いた口^{くち}が塞^{ふさ}がらなかつた。彼も今まで数々の女に恋をしかけたが、こんな意地の悪い、皮肉な相手に懸^かつたことはなかつた。かりにも此方^{こちら}は美男の聞えの隠れもない平中である。大概な女は彼だと分れば訳もなく靡^{なび}いてしまふのが常^{つね}で、今度のように手きびしい扱いをした者は一人もなかつた。で、いきなりピシヤリと横面^{よこつら}を張られたような気がして、さすがにそのあと暫^{しばらく}くは寄り着^よこうともしなかつた。

それから二三箇月の間と云うものは、女の所に用がないとなると、現金なもので、左大臣への御機嫌伺いも自然怠りがちにしていた。

たまには伺候することもあったが、帰りにいつもの局へは間違つても足を向けず、そつちは鬼門だと、自分で自分に云い聞かして、すつと出て来るようにしていた。と、その後又幾月か過ぎて、或る五月雨の降る晩であった。久振に御前で夜を更かしてから出て来ると、宵のうちは入梅らしくしょぼく降っていた雨が、俄かに大降りに降り出したので、此の雨を衝いて自分の家まで帰るのはえらく煩わしい気がしたが、その時ふつと、こう云う晩にかの人のもとを訪れてみたら、と、急に平中はそう思いついた。それと云うのが、考えれば忌ま／＼しいけれども、いったいかの人の此の間のようなやり方は、悪ふざけにしても少しく念が入り過ぎてゐる。凡そ相手が左様に手の込んだ懊らし方をすると言うのは、彼を嫌っているのではなくて、彼に興味を抱いている證據ではないのか。あたしはそこらの人たちのように、あなたの名を聞いて直ぐ嬉しがるような女ではない、と云うところを見せたいのであろうが、一往その意地を通しさえすればよいのではないか。——平中の腹の底には矢張そう云う風な己惚れがあるので、あれ程にされてもなお懲りず、まだほんとうには諦めていなかったのであつた。それに、こう云う真つ暗な土砂降りの晩に訪れたら、いかに鬼のような心を持った女でも、哀れを催さない筈はあるまい。そう思うと彼はひとりでにそわ／＼して来て、ふら／＼と鬼門の方角へ出かけて行つた。

「まあ、誰方かと存じましたら、——」

呼び出された女童は、雨の降り込む簀子の板敷にしょんぼり立っている男の姿を闇に透かしながら、さも驚いたらしく云つた。

「暫くでございましたわね、おあきらめになったのかと存じておりましたのよ」

「いや、あきらめてよいものかね。男はあゝ云う目に遭わされると、猶更恋しさが募るものだ。あれからお伺いしなかったのは、そう／＼さく付き纏うのも失礼だと思つたからだよ」

平中は、餘り醜態にならないように冷静を装つたつもりであつたが、生憎自分でも可笑しいくらい声がふるえているのであつた。

「御無沙汰はしていたけれども、一日だつて忘れたことなんぞありはしない。一途に思いつづけていたのだ」

「お文をお持ちになりましたの」

女童は長たらしい泣きごとには取り合わないで、手紙があるなら取次だけはして上げようと云う調子であつた。

「文なんか持つて来なかつたよ。どうせ御返事が戴けないのに、書いたつて無駄ではないか。——ねえ、君、お願いだ、それよりほんの束の間でもよい、一と目でも、いや、物越しにでも、お逢い申してお声を聞かして戴きたいのだ。そう思い立つたら慄えきれなくなつて、此の雨の中を飛んで来た私を、少しは憐れんで下さらないだろうか」

「でもまだお側の人たちが起きていらつしやるので、今は工合が悪いんですけど、……」

「待つよ、いくらでも。お側の人が寝てしまふまで。——今夜はお逢い出来るまで此処を動かないつもりなんだ」

平中は一生懸命にそう云つて、

「ねえ、君、お願いだ、ねえ」

と、だ／＼兎のように繰り返しつゝ手を取つて放さないで、女童は半ば、呆れ、半ば、怯えたような眼つきで、気がいじみた男の顔をしげ／＼と視つめていたが、

「では、ほんとうにお待ちになるの?」

と、しよことなしに云った。

「お待ちになるなら、お側に人がいなくなつてから、申上げてだけは見すけれど」

「有難う、是非頼むよ」

「でもまだなか／＼ですよ」

「そんなことは覚悟の上だよ」

「ほんとうにお取次をするだけよ。あとのことはお請け合い出来ませんわ」

それなら彼処の遣戸の前で、なるべく人目に付かないようにして待つていらつしやい、と、そう云つて女童が引込んでしまつてから、平中は凡そどのくらいの間立ちつゞけていたことか。だん／＼夜も更けて来て、人々の寝支度をする物音が聞え、やがてひっそりと局の中が寝静まつた様子であつたが、その時不意に、平中の凭りかゝつてゐる戸の内側に人のけはいがして、カタリと懸金を外す音がした。

はてな、と思つて試しに遣戸に手をかけて見ると、訳なくする／＼と開いてしまつた。あゝ、さては今夜はかの人も心を動かして願いを聴き届けてくれたのかと、平中は夢のような氣がして、嬉しさにわな／＼きながら恐る／＼忍び入り、戸の懸金を内側から掛けた。中は真つ暗で、たつた今人の足音がしたように思えたのに、その辺には誰もゐるらしくもなく、たゞ夥しい空薫の香が局のうちに一杯に満ちていた。平中は闇の中を手さぐりで一步步進みながら、かの人の閨とおぼしいあたりへ漸く這い寄ることが出来たが、こゝらであらうと見当を付けてまさぐると、衣を引き被いで横に長く臥している姿が手に触つた。ほっそりした肩つき、可愛らしい頭の恰好、まさしくかの人に相違ない。髪を撫でゝみると、しなや

かな毛の房々としたのが氷のように冷めたく触る。

「とう／＼逢つて下さいましたね。……」

こう云う場合にふさわしい台詞のいくつかは、常に用意している筈の彼であるのに、今夜はあまりに思い設けぬことだったので、咄嗟に兎角の文句も浮かばず、不覚にもわな／＼するばかりで、辛うじてこんな風に云つたあとは、熱い溜息をつゞけざまに吹きかけたゞけであつた。彼はひたすら髪の上から両手で女の顔を押さえ、それを自分の顔の方へまともに向けて、美しいと云われる目鼻だちを見きわめようとしたが、顔と顔をそんなに寄せつけても二人の間には濃い闇があつて、何も見透せないのであつた。でもそう云う風にして暫く一心に視つめてみると、何となくぼう／＼と、ほのぼろいものが幻のように見えて来る氣がした。女はその間一言も云わず、黙つて平中のするなりにされてゐた。平中は女の顔じやうを撫で廻して、その輪廓を触覚に依つて想像しようとするのであつたが、そうされても猶柔軟な胸をしなくさせつゝ、全く男のするなりにされているのは、無言のうちに何も彼も打ち任せているのだと思へなかつた。が、女は男の身じろぎを感じると、急に何と思つたか、

「待つて、……」

と云いながら体を引いた。

「……彼処の障子の懸金を掛けて来るのを忘れしたわ。ちよつと掛けて参りますわね」

「直ぐお戻りになるのでしやうね」

「えゝ直ぐ、……」

女が障子と云つたのは、今の世の襖のことで、隣の局との間仕切に締めてあるのを云うのであつた。いかさまその懸金が外れてい

ては、人が這入って来る懸念があるので、男が仕方なく手を放すと、女は起きて、上に纏まとっていた衣を脱ぎ、単衣ひとえと袴はかまとを着たなりで出て行った。その間に平中は装束を解いて臥ねて待っていたが、たしかに力タリと懸金を掛ける音がしたのに、どう云う訳か女はなか／＼戻って来ない。間仕切と云つてもついそこであるのに、一体何をしているのか。……そう云えば、今懸金の音がしたあとで、女の足音がだん／＼奥へ遠のいて行くように聞えたが、それきりぱったりと此の室内に人のけはいがしなくなった。何だか様子がおかしいので、

「どうかなされたのですか、……もし、……」

と、小声で云つてみたけれども、答がない。

「もし、……」

と云いながら、彼も起き上つて、襖きつの際へ行つてみると、怪けしからぬことには此方側の懸金は外れていて、向う側の懸金の下りているのである。女は隣の部屋へ逃げて、向うから締めりをして、何処どこかへ行ってしまったのであった。

又背負い投げを食わしたのか。……平中はそのまゝ襖に寄り添うて茫然ぼうぜんと闇の中に立ちつくした。それにしてもこれはどう云う意味であろう。こんな夜更けにわざ／＼人を自分の闇やみまで誘い入れて置きながら、いざと云う時に姿を晦くらましてしまうとは。今迄にしても念が入り過ぎていたけれども、今日のは餘程不思議である。折角こゝまで事が運んで、今日と云う今日は日頃の恋が成就じゆうじゆしうであつたのに、——現に今しがた、あのひや／＼かな髪を撫で、あの柔かな頬をさすった感触が、まだ手のひらに残っているのに、——今一步のところで取り逃がすとは。——一旦はたしかに握たまった珠が指の間からズリ落ちたとは。——そう思うと平中は口惜くし涙さ

え溢あふれて来た。今考えれば、さつき女が立つて行った時に、自分も附いて行くべきであつた。もう大丈夫と気を許したのが悪かつたのだ。大方おおかた女は、男にどれほどの熱意があるかを試してみようとしたのであろう。男が心しんから今夜の逢あう瀬せに感激しているなら、片時も女の側を離れまいとするのが当り前である。それなのに女をひとり行かして、自分は寝て待っているなんて、その料簡りょうけんが気に入らない。此方が少し情を示すと、直ぐそんな風に附あけ上るのでは、まだ／＼懲こらしめてやらねばならない。憚はやりながらあたし程のものを恋人に持とうと云うのには、もつと／＼忍耐が必要ですよ、と、女はそう云っているのかも知れない。……

並々ならずひねくれている女の性質から推して、とても戻つて来る筈はずがないことは分つていながら、なお平中は未練がましく襖の際に耳を澄まして隣室のけはいを窺うかがつたりした。そしてとう／＼寢床のところへ引返して来たが、脱ぎ捨て、ある自分の装束を直ぐには取つて着ようとせず、愚かなことであると知りながら、女の衣と枕とが置いてあるのを抱いてみたり、撫で、みたりして、やがてその枕に我が顔を載せ、その衣を我が身に纏まとうて、長い間打ち伏ふしていた。……まゝよ、夜が明けたつて構かまうものか、いつ迄もこうしていてやれ、人に見られたら見られた時のことだ。……こうして強情きやうじやうに頑張こつつていてやったら、かの人も我を折がつて戻つて来ずにはいないであらう。……そんなことを思い／＼、女の匂がまだこまやかに立ち籠こめている暗がりの中に佯やびしい雨の音を聞きながら、彼は夜もすがらまんじりともせずにはいたが、次第に明け方が近くなつて来、彼方あちら此方こちらでガ／＼人声がし始めると、矢張やはきまりが悪くなつてコン／＼逃げ出してしまったのであった。

こんなことがあつてから、平中の侍従の君に寄せる思いはいよく

真剣になったのであった。それ迄は幾分遊戲気分で追い廻していたものが、それから傍目もふらずに恋いこがれて、是非とも望みを叶えずには措けないようになった。そう云う意慾に燃えることは、見す／＼かの人のしかけた罠に陥ることであつたけれども、一歩々々思う壺へ誘い込まれて行きつゝ、どうにも制しようのない氣持であつた。そして結局、又あの女童を呼び出しに行つては文をことづけるより外に、此れと云う智慧も浮かばないのであつたが、でもその文の書き方には心を砕いて、此の間の夜の己れの越度を詫びる言葉を、さまざまな表現で繰り返し／＼綴るようにした。

——あなたが私を試そうとしていらつしやることは感づいていたのですが、それでいながらうっかりして、あの晩のような失錯をしてしまつたくやしき。それと云うのもあなたを思ふ熱情が足りない證據だと仰せになるかも知れませんが、去年以来どんなにあなたに嘲弄されてもお懲りずまに通つて来る私と云うものに、少しでも憚をかけて下さるのであつたら、せめてもう一度だけ、此の間の晩のような機会を恵んで下さらないであらうか。——と、要旨はそれに盡きるのであるが、それをいろ／＼な殺し文句で書くのであつた。

その二

そうこうするうち、その年の夏も過ぎ、秋も暮れて、平中の家の籬に咲いた菊の花も色香がうつろう季節になった。

此の古今に名を馳せた色好みの男は、人間の花を愛したばかりでなく、植物の花をもいつくしむ心を持つていて、わけても菊を栽培することが相当上手であつたらしい。「又此の男の家には、前栽好みて造りければ、面白き菊などいとあまたぞ植ゑたりける」とある平中日記の一段には、或る月の美しい夜に、平中の留守をうかゞつて女たちがひそかに菊の花を見物に来、丈の高い花の茎に歌を結びつけて帰ることなどが記されているが、大和物語にも、仁和寺の宇多上皇——亭子院の帝が平中をお召しになつて、「御前に菊を植えたいと思うので、よい菊を献上するように」と云う仰せがあつたことを記している。その時院は、平中が畏まって退出するのを呼び止めなされて、「その献上の菊の花には歌を添えて参れ。そうでなければ受け取らないぞ」と仰せになったので、平中はひとしお畏まって退き下り、我が家の庭に咲き誇っている菊の中から優れた数株を選び取つて、それに歌を添えて差上げた。古今集巻五秋歌の下に、「仁和寺に菊の花めしける時に、歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける」と云う詞書の附いているのが即ちそれである。——

秋をおきて時こそありけれ菊の花

うつろふからに色のまされば

さて彼が丹精して作ったそれらの菊の花ども、すっかり色香が褪せてしまつたその年の冬の、或る晩のことであつた。平中はその夜も本院の大臣の許に伺候して四方山の世間話のお相手をしていたが、彼の外にも五六人の公卿たちが侍っていて、初めのうちは御前が賑かだつたのが、追いく一人減り二人減りして、いつの間にか大臣と彼と二人きりになつた。帰り途に目あてのある平中は、自分も好い加減に退り出たいのであつたが、時平は彼と差向いになると女の噂を持ち出すのがおきまりで、何か最近に収穫はなかつたか、己の前で隠すには及ばぬぞ、と云うような風に切り出すので、彼も心ではそわ／＼しながら、ちよつと座を立つしおを失つて、それから又ひとしきり、親しい友達同士でなければ交せないような秘話がはずんだ。尤も平中は、近頃侍従の君の一件が大臣の耳に這入つてはいはないか、今にそのことを持ち出してチクリとやられるのではあるまいか、と云う不安があるところから、その晩はどうも調子が乗らず、内々警戒していたのであつたが、時平は何と思つたか、

「時に、折入つてあなたに聞きたいことがあるんだが、……」

と、俄に上座から席を移して、平中の前へ膝をすり寄せた。

来たな、と思つて平中が胸をどきつかせていると、時平はニヤ／＼薄笑いを浮かべて、

「いや、突然つかぬことをお聞きするようだけれど、あの、帥の大納言の北の方なう……」

「はあ、はあ」

平中はそう云つて、まだ薄笑いの消えやらぬ時平の顔を不思議そうに視つめた。

「あの北の方を、あなたは知つておられるであらうな」

「あの北の方……でございませうか」

「そんなにお恍けなさらずと、知つておられるなら知っていると、正直に云つて下さるがよい」

平中がどきまぎしている様子を見て、時平は一層膝をすゝめた。

「不意にこんなことを云い出して、変にお思ひかも知れないが、あの北の方は世に稀な美人だと云う噂があるが本当かな？……なあ、これ、お恍けなさるなと云うのに。……」

「いえ、恍けてなんぞおりは致しません」

懸念していた侍従の君のことではなくて、思ひも寄らぬ人のことが問題になつているのだと分ると、平中は先ずほつとした。

「これ、知つておられるのであらうな」

「いえ、……どう致しまして」

「いかん、いかん、隠してもちゃんと種が上つています」

二人の間にこんな工合な問答が交されるのはそう珍しいことではなかつた。いつも時平が冷やかしかゝると、最初のうちは存じませんの一点張りで、しらを切る平中なのであるが、だん／＼深く問い詰めると、結局「知らないでもない」と云うような所へ落ちる。それから又問い詰めて行くと、「文の遣り取りだけはした」となり、「一度逢つたことがある」となり、「実は五六度、……」となり、しまいには何も彼も白状する。そして時平が驚くことは、当時世間に評判されている女たちの中で、平中が一往渡りをつけていない者は殆ど一人もないのであつた。で、今夜も時平に詰め寄られると、次第に云うことがしどろもどろに、口の先では否定しながら顔つきでは肯定し始めたのであつたが、時平が猶も追究すると、

「実は何でございませう、あの北の方に仕えておりました女房に、少々ばかり昵懇の者がございましてな」

と、おもむろに口を割り出した。

「ふん、ふん」

「その者から聞いたのでございますが、あの北の方は並びない器量のお人で、年はようよう二十歳ばかりでいらっしやる。……」

「ふん、ふん、それくらいは私も聞いていますよ」

「ところが、何分大納言殿はあの通りの老人であられますのな。

……あの方のお歳はいくつになられますか、まあお見受けしたところ、もう七十をずうと越しておられるように存ぜられますが、……」

「左様、七十七か八、くらいになられはしないかな」

「そう致しますと、北の方とは五十以上も違っておいでになると云う訳で、それではあまりあの北の方がおいとおしい。世に珍しい美女にお生れになりながら、選りに選って祖父か曾祖父のような夫をお持ちなされたのでは、嘸御不満なことがおありであろう。御自身でもそれをお歎きになって、あたしのような不運なものがあるだろうか、お側の者にお洩らしなされて、人知れず泣いておいでになることがある、など、その女房が申したり致しましてな。……」

「ふん、ふん、それで？」

「それで、と申す訳でもございませんけれども、そんなことから、ついその、何でございます、……」

「あは、……」

「どうぞ宜しく御推察を、……」

「大方そんなことだろうと睨んでいたんですが、やっぱりそうだったんですね」

「恐れ入ります」

「で、何度ぐらい逢っておられる？」

「何度と申して、そうたび／＼はございませなんだ。ほんのちよつと、一度か二度、……」

「嘘を云われな」

「いえ、ほんとうで。……その女房に媒を頼みまして、一度か二度はそう云うこともございましたが知れませんが、格別打ち解ける、と云うところまでは参りませなんだ」

「ま、そんなことはどうでもよろしい。それより私が聞きたいのは、世評通りの美人に違いないかどうか、と云うことなんです」

「左様でございます、それはまあ、……」

「それはまあ、どうだと云われる？」

「どう申したらよいのでしょうか」

と、平中はわざと気を持たせて、ニタ／＼笑いを噛み殺しながら、仔細らしく首を傾げた。こゝで此の二人が噂をしている「帥の大納言」とその北の方と云うのは如何なる人であるか、と云うのに、大納言は藤原国経のことで、閑院左大臣冬嗣の孫に当り、権中納言長良の嫡男である。時平は此の国経の弟、長良の三男に当る基経の子であるから、彼と国経とはまさしく伯父甥の関係になるのであるが、地位から云えば故太政大臣関白基経の長子であり、摂家の正嫡である時平の方が遙かに上で、すでに左大臣の頭職にある年の若い甥は、老いばれの伯父の大納言を眼下に見下していたのであった。

いったい国経はその頃としては大変長寿を保った人で、延喜八年に八十一歳を以て歿したのであるが、生来一向働きのない、好人物と云うだけの男で、兎も角も従三位大納言の地位にまで昇り得たのは、長生きをしたお蔭であろう。嘗て太宰権帥に任じていたこ

とがあるので、帥の大納言と呼ばれていたが、その大納言になったのは実に延喜二年の正月、彼が七十五歳の時であった。彼にたゞ一つの取柄とりえと云えば、非常に健康に恵まれていたことで、肉体的精力が倫を絶していただであらうことは、そう云う高齢で二十何歳と云う夫人を擁ようし、男子を生ませていた一事を以てしても観察するに足るのである。これは餘談であるけれども、昭和の現代に於いて、ついで此の間、六十八九歳になる或る高名な老歌人が、四十何歳かの某夫人と「おいらくの恋」とやらをして新聞や雑誌に艶種つやねを提供し、大いに世間を騒がしたことはなおわれ／＼の記憶に新たなところである。當時此の老歌人の知己友人たちの間で一番問題になったのは、彼の体力がよく堪え得るであらうかと云うことであつたので、或る物好きな男がそつと夫人に質たづして見るなどのことがあつたが、その結果、夫人は少しもそう云う方面に不満を感じていない事実が明かにされ、われ／＼は改めて老歌人の精力を羨うらやみもすれば驚きもした次第であつた。現代に於いてさえこう云う組み合わせの性生活は類たぐひ稀まれなこととして世の視聴を惹くのであるから、此の老歌人よりなお八九歳の高齢で、五十も歳下な婦人を妻にしていた国経のようなのは、平安朝の昔としたり餘程珍しいことではあるまいか。次にその北の方と云うのは、筑前守在原棟梁ちくぜんのかみの女むすめであるから、在五中将業平の孫に当る訳であるが、此の夫人の正確な年齢は、ほんとうのところよく分らない。大納言と五十も歳が違つと云うのは、まさかとも思われるけれども、世継物語には「わづか二十ばかりにてぞおはしける」とあり、今昔こんじやくには「二十に餘る程」とあるので、二十一二歳であつたかと思える。彼女が業平を祖父に持っているからと云つて、美人であつたときめることは出来ないけれども、子の敦忠あつたすも美男であつたと云うことであるから、矢張美人系の一

族たるに耻はじない容姿だつたのであらう。時平は何処かゝらそう云う噂を聞き、而もその人が時々夫の眼を忍んで情人を呼び込んでいると云うこと、その情人とは別人ならぬ平中であるらしいことをチラと小耳に挟はさんだので、それがほんとうなら、左様な美女をよば／＼の老翁ろうおうや位の低い平中如ごときに任まかしておくと言ふ手はない、須すべからく乃公だいこうが取つて代るべしである、と、ひそかに野心を燃やしていたところへ、そんなことは知らぬ平中がひよつこり今夜御機嫌伺いに罷まかり出たのであつた。

後段に述べるが如く、時平はやがて望みを達して自分よりも十ほど若い此の義理の伯母を、見事伯父から奪い取つて自分のものにしたのであるが、大和物語には此の夫人がまだ国経の妻であつた時代に、平中が彼女に贈つたと云う和歌を載せている。――

春の野に緑にはえるさねかづら

わが君実きみざねとたのむいかにぞ

此の「君実」と云うのは本妻の意であつて、何処まで本気で云つてゐるのか分らないとしても、斯様な文句を書き送るからには、平中も此の人に対して多少とも真剣な気があつたのであらう。彼は今、時平に突然みそかあはことを発あはき立てられたので、うろたえた返事をしたのであるが、正直を云うと、まだ幾分か此の過去の恋人のことを忘れかねていたのであつた。浮気男のことであるから、今日迄に契ちぎつた女は数を知らず、大部分はその場かぎりで捨てゝしまい、今では顔も名もおぼえていないのが多いのだけれども、此の美しい夫人とは、近頃暫しばらく遠のいてゐるようなものの、一時はたしかに並々ならぬ関係にあつたのである。目下のところ、已やむに已まれぬ行きが、りて侍従じじゆうの君きみを追ひ廻すような羽目になり、へんに懊あらされてゐるものだから、一途に心がその方へばかり向いてゐるので

あるけれども、前者との縁も決して完全に切れてしまっている訳ではなかった。殊に思いもかけない時に、そう云う風に時平に尋ねられて見ると、又改めてその人のことが思い出されて来るのであった。「いや、先程も申しました通り、お逢いしたのは一二度でございますので、たしかなことは申せませんけれども、すぐれてめでたい御器量であられることは、先ずほんとうでございますな」と、まだ平中は何となく胡麻化しながら、少しずつ出し惜しみをするように云った。

「ふうん、さては世間の噂に違わず……」

「こうになりましたら隠さず申し上げますが、あれだけの顔だちの方は、ちょっと外に見当らない、と申しても宜しゅうございましょうな。憚りながら、わたくしが今までにお逢いしました人々のうちでは、あの北の方が一番お美しゅういらっしやいます」

「ふうん」

と、時平は呻るように云って息を詰めた。

「で、あなたの見たところ、夫婦仲はどんな具合です。矢張老人との間は巧く行っていないのでしょうかね」

「さあ、身の不仕合わせを歎くようなことを申されて、涙ぐんでおられたこともございましたが、大納言殿は世にも親切なお人で、非常に大切にしてくれる、なども仰っしゃっておられました。さればどう云うお心持でおられますか、実際のところは分りかねます、何しろ可愛い若君もおいでになりますし、……」

「子達は何人おられるのです」

「お一人らしゅうございます。四つか五つぐらいになられる若君ですが、……」

「はう、では七十を越されてからのお子なのですね」

「えらいものでございますよ」

平中は、なおいろ／＼とその人のことを根掘り葉掘り問われるまゝに、知っている限りは知らしてやるのに吝かでなかった。いかさま、思い返して見れば、二度とあゝ云う蘭たけた人に出遇えるかどうか分らないけれども、でもう自分は、あの人の恋は一往叶えたのである、どう云う相手であったにしろ、その人の魅力の程は知ってしまった、その人との夢は見つくした、自分はその人にもはや全く興味がなくなるとは云わないけれども、矢張それよりは未知の女、

——次から次へ技巧を構えて自分の情熱を煽らずには措かない人の方へこそ、遙かに強く惹き着けられるのを感じる。——平中はそんな気持であった。漁色家の心理と云うものは、王朝時代の摺紳も江戸時代の通人と同じようなもので、過ぎ去った女のことにならば、どうなと好きなようにされるもよからう、——と、彼はそれぐらいに思つたでもあろうし、それに又、あの太納言のような好人物の眼を偷んでそう／＼不義なことをするのは、他人は知らず、彼としては何となく気が済まないところもあった。人の女を寝取ることにかけては常習犯の彼なのであるが、あの傷々しい、骸骨のように瘦せた老翁が、たま／＼若い美しい妻を贏ち得て、後生大事にその人に冊き、それに満足しきっているらしい様子を見ては、柄にもなく憐愍の情に似たものを感じていた訳であった。なおついでながら、大納言国経と平中との間には、此の北の方の關係を外にして直接深い交渉はなかったようであるが、或る年の秋、何かちよつとしたことで国経から平中の許へ使者が手紙を持って来た時に、平中が庭に咲いていた菊の一枝を取って返書に添えて渡したことが、平中日記に見えている。その時菊の花を貰った国経は、

直ぐに次のような歌を詠んで贈った。

みよを経てふりたる翁杖つきて

花のありかを見るよしもがな

平中の返し、

たまばこに君し来寄らば浅茅生に

まじれる菊の香はまさりなむ

これはいつ頃のことであつたか明かでないが、或は平中は、自分が此の翁の秘蔵の花を手折ったことを考えて、いくらか皮肉にそんな贈物をしたのであろうか。

その三

それからと云うもの、時平は宮中で国経と顔を合わすと、急に如才なく挨拶するようになった。位は下でも、彼には正しく伯父に当る高齡の人を、敬いたわるのに不思議はないようなものだけれども、菅公を失脚せしめて以来、ひとしお態度が驕慢になつて、満廷の朝臣どもに颯爽たる威容を誇つていた彼は、ついぞ此の伯父の存在などを眼中に置いたことはなかったのに、どう云う風の吹き廻しか、伯父に出遇うと変なニコ／＼顔をする。そして、御壮健で結構であるが、此の頃の寒さはおこたえになりはしないか、とか、お風邪を召されぬように、とか、取つて附けたような愛想を云う。或る日、分けても寒さの厳しい朝のことであつたが、伯父の大納言の鼻先から水洩が滴れているのを見ると、彼はそつと寄つて行つて、

「お洩が出ておりますぞ」

と、注意をして、

「お寒かったら綿の物をたくさんお着込みになることですね」と、小声で云った。

長寿の人によくあるように、大納言は少し耳が遠いので、

「綿？……」

と聞き返すと、

「ふん、ふん」

と、時平はひとりうなずいて、何やら老人には聞き取れないことを

云ったが、やがて老人が館に帰ると、左大臣からの使者だと云って、雪のような綿を幾屯と云うほど届けて来た。「あなたのように^{よわい} 齢八十になんくとしてなお豊饒たる元気を保ち、壮者を凌ぐ趣がおりになるのは羨しい次第である。国に斯様な朝臣があるのは寔にめでたい限りであるから、何卒此の上とも体を大切にされて、一日でも多く長生きをして下さるよう」と、使者はそう云う口上と共にくだんの贈物を置いて帰ったが、その二三日後、朝から大雪が降り出して一尺近くも積った夕方に、又使者があつて、此の雪の白を如何ように過しておられますか、今夜は大方なみくならず冷えることゝ存じますが、……と云うような言葉を述べ、何やら衣筐に収めたものを恭しく捧げながら運び入れた。そして、「これは唐土から伝来の品で、昔御先代の昭宣公が、冬になると召しておられたのですが、今の左大臣はまだ年がお若く、斯様なものを着用される折もないので、父君に代つて伯父君に召して戴きたいと仰つしやいまして」と、そう云つてそれを置いて行つたが、衣筐の中から出たものは、立派な貂の裘で、昔の人の薫きしめた香の匂が、今もなつかしくかおっているのであつた。贈物はそれから引きつゞいて数回に及んだ。或る時は錦、綾、等々の織物、或る時はこれも唐土から渡つたと云う珍奇な幾種類もの香木、或る時は葡萄染、山吹、等々の御衣幾襲ね、――折にふれて何とか彼とか口実を設けては、矢継ぎ早やに使者が来るのであつた。大納言は時平に格別な考があるのだらうなどゝは疑つてもみず、たゞもう有難さと忝さで一杯であつた。誰しも老年になると、若い人からちよつとしたいたわりの言葉をかけられても、嬉しいが身にこたえてほろりとするものであるのに、まして生れつきおめでたい、気の弱い国経なのである。殊に相手は甥と云つても、

天下の一人であり、昭宣公の跡を継いで摂政にも関白にもなるべき人であるのが、さすがに骨肉の親しみを忘れず、何の取柄もない老いたる伯父に斯くまで眼をかけてくれるとは。

「やっぱり長生きはするものですな」

と、或る晩老人は、北の方のゆたかな頬に皺だらけな顔を擦りつけて云つた。

「わたしはあなたのような人を妻に持つて、自分の幸福はもう十分だと思つていましたのに、そのうえ近頃は左大臣のようなお人から、斯ように優しくして戴ける。……ほんとうに、人はいつどんな時にどんな好運にありつくかわからないものです」

老人は、北の方が黙つてうなずいたのを自分の額で感じながら、一層つよく顔を擦り着け、両手で項を抱きかゝえるようにして彼女の髪を長い間愛撫した。二三年前まではそうでもなかったのであるが、最近になって老人はだんく愛し方が執拗になり、冬の間は毎夜北の方を片時も離さず、一と晩じゅう少しの間も出来ないようにびったり体を喰つ着けて寝る。そこへ持つて来て、左大臣が好意を示すようになってからは、その感激のせいでつい酒を過ぎ、酩酊してから床に這入るので、なおさらしつこく手足に絡み着くようにする。それにもう一つ、此の老人の癖は、闇の中の暗いのを厭うて、なるべく燈火をあかるくしたのであつた。と云うのは、老人は北の方を手を以て愛撫するだけでは足らず、ときぐ一二尺の距離に我が顔を退いて、彼女の美貌を讃嘆するように眺め入ることが好きなので、そのためにはあたりを明るくしておくことが必要なのであつた。

「ですが、もうわたしなどは何を着ようと差支えない。あなたこそあの綿や錦を召して下さい」

「それでも大臣は、殿がお風邪を召さぬようにと仰っしゃって、下されましたものを、……」

低い声でしかものを云わない北の方は、耳の遠い老人に分らせることが困難なので、自然夫に対しては言葉数が少く、分けても聞に這入ってからは殆ど無言で通すので、此の夫婦の間では寝物語が交されることはめったになく、大概老人の方がひとりでしゃべりつづけるのであった。そして北の方はたゞうなづくか、たまに一と言か二と言、老人の耳の端へ口を寄せて、唇が耳朶へ触れるくらいにして云うのであった。

「いゝや、わたしは何も要りはない。何も彼もあなたに進ぜます。……わたしには此の人さえあれば……」

そう云って老人は又自分の顔を妻の顔から遠ざけながら、妻の額の上にかゝる髪の毛を掻きのけ、その目鼻たちへ燈火のあかりがほんのり当るようにした。こう云う時、いつも北の方は老人の節くれたった歪んだ指がわなゝきながら髪をいじくったり頬をさすったりするのを感じつゝ、おとなしく老人のするまゝになつて眼を閉じているのである。それは顔の上にさす明りの晴れがましさを避けるため、と云うよりは、老人の貪るような瞳の凝視を避けるため、と云った方が適當であるかも知れない。八十に近い老人に斯様な熱情があることは、不思議と云えば不思議であるが、実はさしにも頑健を誇つた此の老人も、一二年此のかた漸く体力が衰え始め、何よりも性生活の上に争われない証拠が見え出して来たので、それを自覚する老人は、一つには遣る瀬なさの餘り変に懊れているのでもあった。尤も彼の場合、その遣る瀬なさは、自分の悦樂が思うように叶えられないと云うよりは、此の若い妻に申訳ないと言ふ気持ちから来る方が多いのではあったが、……

「いゝえ、そんなお心づかいはなさらないで、——」

老人がその胸中を率直に打ち明けて、あなたに済まないと思つてゐる、と云う風に詫言めかして云うと、北の方はしずかに頭を振つて、却つて夫を気の毒がるのが常であつた。お年を召せばそれが当り前なのであるから、何も気になさることはない、その当り前の生理に背いて無理なことをなさるのこそ、お体のために宜しくない、そんなことより、殿が摂生をお守りなされて一年でも多く長寿を保つて下さる方が私もうれしい、と、北の方はそう云う意味に取れることを云う。

「そう云つて下さるのは 忝 いが」

老人は、そんな工合に北の方から優しい言葉で慰められると、一層北の方の心根がいとおしくなるのであつた。そして、又しても眼をつぶつてしまつた北の方の顔を見守りながら思うことは、いったい此の人は心の奥でどんなことを考えているのだろうか、と云うことであつた。それと云うのも、此の人がこんなにもすぐれた器量を持ちながら、五十以上も歳の違ふ夫に添わされた我が身の悲運を、それほどにも自覺していないように見えるのが不思議で、何か自分が世間知らずの妻を欺しているような気がするばかりでなく、妻の犠牲の上に自分の幸福が築かれてゐると云う意識があるからなのであるが、内心にそう云う訝しみを蔵しつゝ眺めると、ひとしお此の顔が神秘に満ち、謎のように見えて来るのである。老人は、自分がこれほどの宝物を独り占めにしていること、世にこれほどの美女がいることを知つてゐるのは自分だけで、当人さえもそれをはつきりとは知つていないらしいことを思うと、何となく得意の念の禁じ難いものがあり、どうかすると、此のような妻を持つてゐるのを誰かに見せて、自慢してやりたい衝動をさえ感じるのであつた。又

翻ひるがえつて思うのに、もし此の人が口で云う通りのことを考えているのであったら、——みずからの性的不満などは意に介せず、ひたすらに老いたる夫の命長かれとのみ願っているのが本心であるなら、——その有難い志に対して自分は何を報いたらよいのか、自分は此の後、たゞ此の顔を眺めるだけで満足しつゝ死んで行きもしようけれども、此の若い人の肉体を、自分と共に朽ち果てさせてしまうのは餘りにも不憫ふびんであり惜しくもある。で、両手の間にその宝物をしっかりと挟んで視つめてみると、いっそ自分のようなものは一日も早く消えてなくなつて、此の人を自由にさせてやりたいと云う怪しい気持にもなるのであった。

「どうなさいましたの」

老人の眼に浮かんだ涙が、自分の睫毛まつげに伝わつて来たのを感じると、北の方ははつとして眼を開けたが、

「いや、何でもない、く」

と、老人はひとりごとのように云つて口を噤つぶんだ。

そんなことがあつてから数日後、はやその年も残り少なくなった十二月の二十日頃に、又しても時平の許もとから数々の贈物が届けられた。

「大納言殿も来年は更に齡を加えられ、いよく八十路やそじに近くなられると、承うけたまわるにつけても、縁につながるわれく共は慶賀に堪えない。これは些いさかながら、そのおよろこびのしるしまでに差上げるのですが、何卒どうぞこれらの品々を御受納なされて、よき初春をお迎えになつて下さい」と、使者はそう云う口上を述べたが、なお附つけ足して、時平が正月の三箇日のうちに、大納言の館やかたへ年賀に見えるであろうと云う意を伝えた。「大臣が仰せられますには、自分の伯父御おじごにこう云う長寿の人があるのは返すぐも一門の榮譽である。自分がかねぐ此の伯父御とゆつくり酒を酌くみ交して、

共によろこびを分ち、且かつは養生の術をも授かり、且は健康にあやからせて戴きたいと存じながら、今日まで折がなくて過して来たので、是非近々にその念願を遂げたいのであるが、それには此の正月がよい機会である。自分は毎年伯父御の邸へ年賀に参上したことがないので、済まなく存じていた際でもあるから、来春から改めて御挨拶に伺い、年来の無礼をも詫びたいのである。と、左様に仰つしやつておいでになりました、三箇日のうちには必ず参上致すからお含みおきを願うようにと、申し付かつて参りました」——使者はそう云つて帰つたのであったが、此の申越しはいやが上にも国経を驚喜せしめた。事実、時平が此の大納言の所へ年頭の礼を述べに来るなど、云うことは、嘗かつて前例がないばかりでなく、前代未聞みもんの事件と云つても差支えない。此の恵み深い青年の左大臣は、一門の年長者たるの故を以て一介いっかいの老骨ろうこつに結構な財宝をあまた、び贈つてくれた上に、今度は自身その邸宅に駕を枉まげると云う光榮を授けてくれるのである。——ありていに云うと国経は、先達せんだつてから左大臣の測り知られぬ温情に対して何がな報いる道はないだろうかと、寝ても覚めてもそのことを気に懸かけていた矢先であつた。そして、大臣の邸とは比べものにならない手狭な館ではあるけれども、一いっ夕せき我が方へ臨席を仰いで饗宴きやうえんを催し、心の限りもてなしをして、感謝の念の萬分の一でも酌み取つて貰えないであらうかと云うことも、考えないではなかつたのであるが、なか／＼大納言風情ふうぜいの所へなど来てくれそうなる人ではないので、申し出ても無駄であらう、却つて身の程を弁わえぬ失礼な奴と、物笑いになるだけであらう、と、そう思つて差控えていた際であつたのに、図はからずもその人が自ら望んで客人まろうどになろうと云い出したのであつた。

その翌日から国経の邸は俄にわかに活気づき、大勢の人夫共が出入りし

始めた。もう正月に餘日もないので、大切な客人を迎えるために急いで工匠や園丁を雇い、殿舎の修繕や林泉の手入れにかゝつたのである。家の中では板の間や柱をつや／＼と拭き込み、畳建具を新しく調え、屏風や几帳を動かして座敷の模様がえをする。家司や老女などが指図をしつゝ、あゝでもない、こうでもない、一つ調度を何回となく彼方へ持つて行かしたり、此方へ持つて来させたりしている。前裁では樹木を掘り起し、池の水を堰き止め、築山の一部を崩しなどしているが、此処では国経が自ら庭に下り立つて、木や石の布置をいろ／＼に工夫して見たりしている。国経に見ればまことに一世一代の面目で、老後に花を咲かせるのであるから、此の支度のためにどれ程の人力と財力とを傾けても惜しくはなかった。

左大臣家からは正月の二日に前触れがあつて、明くる三日に、きらびやかな車や騎馬の列が大納言の邸へ乗り入れた。餘り仰々しくならないように、供の人数なども目立たぬ程にして参る、と云うことであつたけれども、右大将定国、式部大輔菅根など、云つた人々、——いつも時平の腰巾着を勤める末社どもの顔ぶれを始め、殿上人や上達部が猶相当に扈從して、平中も亦その中に加わつてゐた。客人たちの座に着いたのが申の刻を少し過ぎた時分、宴が開かれると間もなく日が暮れたが、その晩は特に酒杯の進行が激しく、主客共に酔いの循環りが速かであつたのは、旨を啣んでいた定国や菅根たちの取持ちのせいもあつたであらう。やがて時平が、

「酒ばかりでは面白くない、……」

と、末座の方へこなしたのを合図に、或る少納言が横笛を取り出して吹き始める。それに合わせて誰かゝ琴のことを弾く。扇で拍子

を取りながら唱歌をうたう。つゞいて箏のことや、和琴や、琵琶が運び出された。

「御老体々々々、まずあなたからもつとお重ねにならなければ、……」

「御主人公がそう慎しんでおいでになる手はありませんな。それではわれ／＼も酒がさめます」

「いや、忝、い／＼、……愚老はたゞもう忝うて／＼、……こんな嬉しいことは八十年来始めて、……」

国経が酔い泣きしそうな口調で云うのを、

「あはゝゝゝ」

と、時平が持ち前の潤達な笑いで打ち消した。

「そんなことはお置きなされい。それよりもつと浮き／＼と騒ぐじゃないですか」

「いかに／＼」

と云つて、国経は突然声を張り上げて謡つた。

「我に酒を勧む、我辞せず、請ふ君歌へ、歌うて遅きこと莫れ。……」

老人は白氏文集を愛読していて、興に乗ずると、こんな工合に文句を暗誦するのであるが、これが出る時はそろそろ酒が循つて来た證據であつた。

「……洛陽の兒女面は花に似たり、河南の大尹頭は雪の如し。……」

老来量を節してはいても、もと／＼下地は好きな方で、過せばいくらでも過せる国経は、今宵は自分が主人役として容易ならぬ人を迎え、粗相があつてはならぬと思うところから、最初のうちは努めて引き締めていたのであつたが、何分胸中に抑えきれない喜びが

あふ
溢れてい、而も客人たちの方から頻りに杯を強いられるので、いつか心の緊張が弛んで、上機嫌になって行つた。

「いや、頭は雪の如しでも、御精力のお盛んなことはお羨しい限りですな」

そう云つたのは式部大輔の菅根であつた。

「わたくしなどは、老人と申しまでも明けて五十歳になつたばかり、御老体から見ますれば孫のようなものですが、近頃めつきり衰えを感じておりますよ」

「そう云つて下さるのは忝いが、もう此の老人もとんと駄目です、……」

「駄目とは何が駄目なのです」

と、時平が云つた。

「何も彼も駄目でございますが、一三年来特に駄目になつたものがございますてな」

「あッはゝゝゝ」

「玲瓏々々老いたるを奈何にせん」

と、老人が又白詩を唱えた。

二三人の公卿たちが代るゝ立って舞い出した頃から、宴はだんく闌たけなわになつて行つた。春とは云つてもまだ冬の感じの、うすら寒い宵であるのに、此処ばかりは陽氣に花やいで、笑い声と歌声と歓語の聲が沸き返り、人々は皆上衣の襟を外したり、片袖を脱いで下着を出したり、行儀作法を打ち忘れて騒いでいた。

その四

主人の妻、大納言の北の方はこう云う座敷の有様を、御簾のうちにいてさつきから隙見すきみしていた。初めのうちは、客人の席のうしろを囲かこつていた屏風が邪魔になつて見えにくかつたのであるが、故意にか偶然にか、追ひく騒ぎがはげしくなり、人々が起つたり居たりするにつれて、その屏風の端が少しづつ畳まれて行き、斜はすかいに開いたので、今は左大臣の姿形がほゞ正面に見えるようになった。御簾越しにはあるけれども、左大臣はついそこに、北の方とはなゝめに畳三四畳を隔てたあたりに、此方を向いて坐つてゐるのが、ちよつどその前に燈台が据えてあるので、残るところなく分るのであるが、色白のふつくらしした顔が酔いのために紅く火照ほてつていて、眉まゆの付け根をとぎく瘡癥かんべきが強そうにふるわせるくせはあるけれども、笑うとひどく愛嬌あいぎやうがあつて、眼もとや口もとに子供のよな無邪氣さが溢れる。

「まあ、何と云うお立派な、……」

「やっぱりあゝ云うお方は何処か違つていらつしやいますのね」お側の女房たちがそつと袖を引き合つて溜息を洩らしたのは、北の方の同感を求めるためであつたらしいが、北の方は眼顔でそれをたしなめて、ただ吸い寄せられるように御簾の方へ体を擦りつけていた。北の方が先ず驚いたのは、主人の国経が常になく酔態をさらけ出し、だらしない恰好で何か呂律の廻らない濁声を挙げてゐることであつたが、左大臣もそれに劣らず酔つてゐるらしい。だが此

の方はさすがに夫の大納言のような見つともない態はしていない。大納言は坐つていても彼方へよろ／＼此方へよろ／＼し、眼がどろんとして何を見ているのやら分らないが、左大臣は居すまいも正しく、しゃんとしていて、酔つても威容を崩さない。それでいて絶えず杯に満を引いて、いくらでも酒を呷っている。管絃の合間々に皆が催馬楽を謡うのであるが、左大臣の声の美しさと節廻しの巧さには、誰も及ぶ者がないように感ぜられる。――但し、これは北の方や附添いの女房たちが左様に感じた迄であつて、時平が果して音曲の才を備えていたかどうか、別段それを證拠立てるような記録があるのではない。が、時平の弟の兼平は琵琶の上手で、琵琶宮内卿と云われた人であつたこと、悴の敦忠も管絃の名手で、博雅三位に劣らない人であつたこと、などを思い合わせる、或は時平にも多少その方面の天分があつたかも知れず、満更これらの婦人たちの鼻眼目ではなかつたでもあろうか。――

北の方がなお氣を付けて見ていると、左大臣はさつきから時々ちら／＼と御簾の方へ流眊を使う。それも最初は遠慮がちな眼つきで、こつそり偷むように視線を投げ、すぐ又しらを切っていたが、酔いがすゝむに従つてその眼づかいが大胆になり、いかにも様子ありげな、色気たつぷりな表情をたゝえて見るのであつた。

我が門を

とさんかうさん練る男

よしこさるらしや

よしこさるらしや

これは催馬楽の「我門乎」の文句であるが、左大臣はこれを謡いながら、「よしこさるらしや」の繰り返しのところへ来ると、一段と声に力をこめて唱えた。そして訴えるような眼ざしを、臆する

ところなく真つ直ぐ御簾の裡へ注いだ。北の方は、自分が左大臣を隙見していることを、左大臣が知っているかどうか半ば疑問にしていたのであつたが、今は疑う餘地もないと思うと、自分の顔が俄かに赧くなるのを感じた。現に左大臣の装束に薰ぎしめてある香の匂が、此の御簾のうちへかぐわしく匂つて来るのを見れば、彼女の衣の薰物の香も左大臣の席へ匂つてゐるに違いない。事に依るとあの屏風の畳まれたのも、誰かゞ左大臣の意を酌んで、わざとあんな風に動かしたのであるかも知れない。それかあらぬか、左大臣は御簾のうちにゐる北の方の顔を、何とかして見届けようとする如く、探るような瞳を挙げてしきりにキョロ／＼するのであつた。

左大臣の席からはずつと離れた遙かな末座に、別にもう一人、矢張此の御簾のあたりへ密かな視線を注いでゐる男があるのを、北の方は疾うから意識していたが、それは云う迄もなく平中であつた。

女房たちは勿論それに氣が付いていたのであるが、今の場合北の方に憚かつて、此の優男の噂をするのを差控えながら、心の中では左大臣と比較して、孰方がより美男子であるかを批判していたでもあろう。北の方は、嘗て幾夜となくうす暗い闇の燈火のはためく蔭に、夫の大納言の眼をかすめて此の男の抱擁に身をゆだねたおぼえはあるが、こう云う晴れの席上で、歴々の人々の間に伍している彼を見るのは始めてであつた。が、さしもの平中もこう云う座敷では、堂々たる時平の貫禄に押されて、別人のように貧弱に見え、蘭燈なまめかしき帳の奥で逢う時のような魅力がない。それに今宵は誰も彼もが羽目を外して燥いでゐるのに、どう云うわけか平中はひとり沈んで、自分だけは酒が甘くないと云いたげな様子をしてゐるのであつた。

と、時平がそれに眼をつけて、

「佐殿」

と、遠く隔たった席から呼んだ。

「あなたは今日は妙に萎けておられるね。何か仔細があるんですか」

時平の顔にいたずら好きな子供がするような、意地悪な微笑が浮かんだのを、平中は世にも恨めしそうに横眼で見たが、

「いや、そんなことはございませんが、……」

と、強いて苦しそうな愛想笑いを洩らして云った。

「でも可笑しいですね、酒がちつとも行かんようじやないですか、もつと飲み給えく」

「十分戴いてるのでございます」

「そんなら一つ、得意の猥談でも聴かせ給え」

「御、御冗談を仰っしゃっては、……」

「あッはゝゝゝ、どうですか方々」

と、時平は一座を見廻して、平中を指さしながら、

「此の人は猥談と惚気話が頗る得意なんです、一席こゝでやって貰おうじやないですか」

「ようよう！」

「謹聴々々！」

と、皆が拍手したが、平中は泣き出しそうな顔をして、

「御勘弁をく」

と、頻りに首を振るのであった。時平はいよく意地悪な笑いを露骨に示して、いつも私に聴かしてくれるのに、なぜ此の席ではやれないのか、聞かれて困る人でもいるのか、どうしてもやらないなら、私が素ッ葉抜くがよいか、此の間のあの話を、代りに披露してやるぞ、などゝ云つて脅迫する。平中はいよくべそを掻いて、

拝まんばかりの恰好をして、

「御勘弁をく」

を繰り返すのであった。

夜はすっかり更け渡ったが、宴はいつ終るとも見えず、馬鹿騒ぎは一層盛んになって行つた。左大臣は又「我が駒」を謡い出して、

待乳山

待つらん人を

行きてはや

あはれ

行きてはや見ん

と云いながら、しまいには伸び上るような風をして御簾の方へ秋波を送った。それから誰かゞ「東屋」の文句を謡つたり「我家」の文句を謡つたりした。

「押開いて来ませ、我や人妻、……」

「鮑さだをか石陰子よけん、……」

「りらららるる、……」

そのあととはみんな勝手に、てんぐばらくに好きなことを我鳴り散らして、誰も他人の云うことなんぞに耳を傾ける者はなかった。国経の取り乱し方は一段と甚しかった。坐つていても倒れそうになる上半身を辛うじて支えて、

「玲瓏々々老いたるを奈何にせん」

と、まだあの文句を世迷い言のように口号むかと思うと、誰彼の区別なく傍に来た者を掴まえては、

「愚老はたゞもう忝うてく、……こんな嬉しいことは八十年來……」

と云いながら、ぽろく涙をこぼしつづけた。それでも感心に、主

人の為すべき勤めは忘れず、左大臣が礼を述べて帰り支度をしかけると、かねて今夜の引出物に用意しておいた箒のを持て来させたり、白栗毛と黒鹿毛の見事な馬を曳いて来させたりして披露をした。そして、左大臣がよろめきながら座を立ちかけると、

「殿々、失礼ながら、お足元が心もとない」

と、自分も同じように危い足取りで立ち上って、

「御車を此方へ着けさせましょう」

と、時平の車を階隠の間へ寄せるように命じたりした。

「あッはゝゝゝゝ、こう見えても私は大丈夫、あなたこそえらい御酩酊ではないか」

そう云う時平は、これも正体なく酔っていて、車が勾欄の際へびつたりと引き寄せられても、そこまで歩いて行くことさえ困難に見えた。そして、二三歩足を運んだところで、どしんと腎餅をついてしまった。

「あ、これはいかん、………」

「それ、それ、そのようにふらくしておいでなされて、………」

「何でもない、くく」

そう云って時平は立ちかけたが、立つと又すぐ腎餅をついた。

「これはく、我ながら醜態極まる」

「それではとても御車にはお召しになれませんな」

定国がそう云うと、

「左様々々」

と、菅根が応じた。

「いっそのこと、今暫く酔いをお覚ましなされてからお帰りになることですか」

「いやく、あまり長座をしては主殿が御迷惑だ」

「何を仰っしゃる！　こんなむさくろしい所ですが、お氣に召したらいっつ迄でも御ゆっくり願いたい！」

いつの間にか国経は時平に体を擦り寄せて坐って、その手を執らばかりにして口説いていた。

「殿々、愚老はあなたを無理にでもお引き止めしますぞ、帰ろうと仰っしゃっても決してお歸し申しませんぞ」

「ほゝう、長座をしてもよいと云われるか」

「よいどころの段ではござらぬ」

「しかし私をお引き止めになるなら、もそつと何か、特別のおもてなしをなさる必要がありますな。――」

突然時平の声の調子が変わったので、国経が見ると、さっきまで赤味を帯びていた顔の色が蒼白になり、唇の端を神経質にピクピクさせていたのであった。

「――今宵は至れり盡せりの御饗応に与り、結構な引出物まで頂戴したことはしましたが、まだこれだけでは、憚りながら此の左大臣を引き止めるには足りませんな」

「そう仰っしゃられると穴へでも這入りたい！　愚老としましては

此れが精一杯なのですが、………」

「あなたは此れで精一杯だと仰っしゃるが、失礼ながらあの箒のことう馬二匹では、まだ引出物が不足ですか」

「と仰っしゃいますと、外に何ぞ御所望の品がおりでしょうか」

「それをわたくしに云わせないでも、何かそちらにお心あたりがありそうなものじゃありませんか。――ねえ、御老体、そう物惜しみをなさるなよ」

「物惜しみとは心外な！　愚老は何とかして日頃の御恩報じがしたい、御満足が得られますなら、どんな物でも差上げたいんです」

「どんな物でも！　ですか、あッはゝゝゝゝ」

と、時平は体を仰け反らして、さすがにいくらか照れ臭いらしく、例の豪傑笑いをした。

「でははっきりと申しますぞ」

「どうぞく」

「もしほんとうに、あなたが口で仰っしゃるように、私の日頃の好意に対して、感謝しておいでになるならば、——ですな。——」

「はい、はい」

「あッはゝゝゝゝ、なんぼう酔っ払っておつても、ちと物狂おしいようで、此の先は申しにくい」

「そう仰っしゃらずに、どうぞく」

「それは私の館には勿論、やんごとない九重の奥にさえないもので、御老体のお手もとにだけあるもの。——御老体につけて命より大切な、天にも地にもかけがえのないもの。——箒のことだの、馬なんかとは比較にならない宝物。——」

「そんなものが愚老の所にございましょうか」

「あります！　たった一つあります！——さ、御老体、それを引出物に下さい！——」

時平はそう云つて、愕然としてゐる老人の眼の中を視据えた。

「さ、それを下さい、物惜しみをなさらない證拠に！」

「おゝ、物惜しみをしない證拠に！」

何と思つたか国経は、鸚鵡返しに云つた。そして次の瞬間に、座敷のうしろを囲つていた屏風の方へ歩み寄つて、それを手早く押し畳むと、御簾の隙間へ手を挿し入れて、中に隠れていた人の袂の端をぐいと捉えた。

「左大臣殿、御覧下さい。——愚老の命より大切な、天にも地にも

かけがえのない物、あらゆる宝物にまさる宝物、愚老の館より外に、何処を尋ねてもない宝物は此れなのです。——」

今までぐでんぐでんに酔いしれていた国経は、急に活を入れられたようにしゃんと立っていた。言葉も呂律が廻らなかつたのが、てきぱきした物云いで、りんくんと響き渡るように云つた。たゞその大きく見開かれた眼には、何か発狂したような怪しい輝きが満ちていた。

「殿、物惜しみをしない證拠に、これを引出物に差上げます。お受け取り下さい！」

時平を始め満座の公卿たちは一言も発せず、眼前に展開した思いがけない光景に恍惚としていた。——最初、国経が御簾の蔭へ手をさし入れると、御簾の面が中からふくらんで盛り上つて来、紫や紅梅や薄紅梅やさまぐな色を重ねた袖口が、夜目にもしるくこぼれ出して来た。それは北の方の着ている衣裳の一部だつたのであるが、そんな工合に隙間からわずかに洩れている有様は、萬華鏡のようにきら／＼した眼まぐるしい色彩を持った波がうねり出したようでもあり、非常に嵩のある罌粟か牡丹の花が揺ぎ出たようでもあつた。そして、その、人間の大きさを持った一輪の花の如きものは、漸う半身を現わしたところで、まだ国経に袂をとらえられたまゝ静止して、それ以上姿を現わすことを拒んでゐるように見える。国経はやおらその肩へ手を廻して抱きかゝえるようにしながら、もつとその人を客人たちの方へ引つ張つて来ようとする風であつたが、そうされるとなほその人は、御簾のかげに身を潜めようとした。顔に扇をかざしているので、目鼻だけは窺うよしもなく、扇を支えている指先さえも袖の中に隠れていて、たゞ両肩からすべっている髪の毛だけが見えるのであつたが、

「おっ！」

と叫んで、時平は恰も美しい夢魔から解放されたように、つと御簾の傍へ走り寄ると、大納言の手を振り払って、自分がその袂をしつかりと掴んだ。

「帥殿、此の引出物はたしかに頂戴しましたぞ。これでこそ今宵参った甲斐がありました。心からお礼を申します！」

「お、世に二つとない宝物が始めて所を得たのです。愚老こそお礼を申さなければ！」

国経は時平に席を譲ると、屏風の此方へ引き下つて来て、

「方々！」

と、事のなりゆきを呆然と眺めていた公卿や上達部たちに声をかけた。

「さあ、方々、——御一同はもはや御用はございますまい。そうして待っておいでになつても、恐らく大臣は急にはお出ましになるまいと存ずる。どうぞ御遠慮なく、御自由にお引き取りになつて下さい」

そう云いながら、畳んだ屏風を再びひろげて、御簾の前を囲つてしまった。

意外なことがつきくと起るのに、客人たちは度胆を抜かれて、館の主から「帰れ」と云われても直ぐには動くけしきもなく、興奮しきつた主の顔の、喜んでゐるのか泣いてゐるのか判断のつかない眼つきを見ていた。

「さあ、どうぞお引き取りを」

と、重ねて主が促すと、人々の間に漸くざわめきが湧き上つたが、それでもなお、あつさりその場を出て行つた者は幾人もいなかった。不承々に立ち上つたものゝ、大部分はへんな眼をして顔を見合

せ、ちよつと出て行きそうにして又立ち止つてしまつたり、柱や戸の蔭にひそんだりして、事件の落着を見届けなければ気が済まないと言ふ風であつた。此の人たちの好奇心に充ちた視線が、期せずして屏風に囲まれた御簾の方に注がれていた時、屏風の向う側ではどんなことが起りつゝあつたか。——時平は国経が袂の端を彼に渡して彼方へ逃げて行つたのを知ると、無言でその袂を自分の方へしずかに引いた。そして、今しがた国経がしていた通りに、御簾の隙間へ半身を入れて、うしろから此の大輪の花の如きものを抱きかゝえた。と、さつき屏風の彼方で嗅いだ、あの甘いほのかな薫りが今はしたゝか咽せ返るように鼻を撲つのであつた。女はその時までなお扇をかざしていたが、

「憚りながら、もうわたくしのものにおなりになつたのですよ。お顔をお見せになつて下さい」

と、そう云つて時平がそつと袂の上から手をとらえると、手はわな／＼とふるえながら扇を膝のあたりへ置いた。御簾の間には燈火がないので、うたげの席にともっている大殿油の穂先が、屏風に遮られながら遠く此方側へまたゝきを送つてゐるのであるが、そのうすら明りの中に匂うほのじろいものが始めて接するその人の面輪であることが分ると、時平は自分の計畫がいみじくも此処まで運んだことに云いようのない満足をおぼえた。

「さあ、御一緒に、わたくしの館へ参りましょう」

彼はいきなりその人の腕を取つて肩にかけた。女は引き立てられながらさすがに躊躇するらしく見えたが、でもしなやかに少し抵抗したゞけで、やがてする／＼と体を起して行くのであつた。

屏風の外で待つていた人々は、急には出て来ないであらうと思へた左大臣が、忽ち恐ろしく嵩高な、色彩のゆたかなものを肩にかけ

ながら物々しい衣きぬずれの音をひゞかして出て来たのに、又驚ききを新たにした。左大臣の肩にあるものは、よく見ると一人の上臈じやうろう、

——此の館の主が「宝物」だと云ったその人に違いなかった。その人は右の腕を左大臣の右の肩にかけ、面を深く左大臣の背に打つ俯ふせて、死んだようにぐったりとなりながら、それでもどうやら自分の力で歩みを運んでいたのであったが、さつき御簾からこぼれて見えたきらびやかな袂たけや裾すそが、文なす髪とよじれ合いもつれ合い、床を引きずって行く間、左大臣の装束とその人の五衣いつぎぬとが一つの大きなかたまりになって、さや／＼と鳴りわたりながら階隠はしかくしの方へうねって行くのに、人々はさつと道を開いた。

「帥殿そち、それでは戴さいて帰ります！」

「はっ」

と云って国経は、畏かしこまって頭を下げたが、すぐ立ち上って、

「御車、御車」

と云いながら、自分が先に階きざはしを下りると、車の簾すだれを両手で高くかゝげ持った。時平が重くて美しい肩の荷物を持て扱いながら、喘あえぎ／＼車の際きわまで辿たどり着くと、雑色ぞうしきや舍人とねりたちが手に／＼かざす松明の火のゆらめく中で定国や菅根やその他の人々が力を添え、両側から掬すくい上げるようにして辛うじてその嵩張かさばるものを車へ入れた。国経は簾をおろす時に、

「私をお忘れにならないで」

と、一言云ったが、生憎あいにくなことに車の中は真つ暗で、もうその人の顔は見えず、せめて別れの言葉ぐらい聞かしてくれるかと思っているうちに、あとから乗り込んだ時平の姿で、眼の前が一杯に塞ふさがれてしまった。その時、——と云うのは、北の方のあとに続いて時平が車に乗った時、下襲したかさねの尻が簾から食はみ出して地に垂れたの

を、誰か混雑に紛れつゝ寄って来て、手に取り上げて、簾の中へ押し入れてやった者があったが、それが平中であつたのに気づいた人は殆どほとんなかった。その夜平中は席にいた、まれない心持で暫く席を外していたのであったが、昔の恋人が時平に拉らし去られるのを見ては泳こもえきれなくなったのであろう。あり合う陸奥紙みちのくがみに、物をこそいはねの松の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

と、走り書きをして、小さく畳んで、不意に何処からか左大臣の車の側に現れ、下襲の尻を簾の中へ押し込むのと一緒に、人知れずそれを北の方の袖の下へ挿さし入れたのであった。

その五

国経は、北の方を乗せた時平の車が供の人数を従えて去って行くのを見送ったまでは、幾分か意識がはつきりしていたけれども、車の影が見えなくなると、俄かに緊張が弛んだせいか、内攻していた酔いが発して、勾欄のもとにくたくとくずおれてしまった。そしてそのまゝ、簀子の板敷に倒れ伏して寝入りかけたのを、女房たちが扶け起して寢所へ連れて行き、装束を脱がしたり、床に就かしたり、枕をあてがったりしたのであったが、当人は一切前後不覚で、それきりぐっすりと一緒に眠った。が、およそ何時間ぐらい過ぎた時分か、へんに襟もとがうすら寒く、何処からか蓐の中へすう／＼風が入り込むようなので、ふと眼を覚ますと、もう閨の中がしら／＼と暁に近いほの明るさになっていた。国経はぞっと身ぶるいをして、なぜこう今朝は寒いのか、自分は何処に寝ているのか、此処はいつもの自分の寢所と違うのか、——と思いながら、そこらあたりを見廻すと、眼に触れる帳や蓐や、それらに沁み着いている香の匂や、すべて朝ゆう馴染の深い我が家の閨であることは疑うべくもないのであったが、一ついつもと違うところは、今朝は自分がひとりぼっちで寝ているのであった。彼も世間の老人なみに早くから眼が覚める方なので、夜明け方の鶏の鳴く音を聞きながら、まだすやくと眠っている妻の顔を、ちょうど今朝ぐらいのうすら明りの中で打ち眺めるのが常なのであるが、今朝はその顔のあるべきところに、主のない枕が空しく置いてあるばかり。いや、

それより何より、いつもはしっかり北の方に纏わり着き、隙間もなく手足を絡み着かせて、二つの体が一つ塊のようになって寝ているのに、今朝は襟頸や腋の下や方々に隙間が出来、そこをすう／＼した風が通り抜けるので、これではいかさま肌寒いのも道理であった。……

今朝に限ってあの人が此処に、自分の腕の中に抱かれていないのはどう云う訳か。あの人は何処へ行つたのか。——国経はそう考えると、何か奇怪な幻影のようなものが頭の隅にこびりついていて、それが少しずつ髣髴とよみがえって来、朝の光が次第に明るさを増すにつれて、その幻影もいよくあざやかな輪郭を取って浮かび上って来るのを覚えた。彼は何とかしてその幻影を、酔餘の揚句に見た一場の悪夢である、と云う風に思い做そうとしてみたが、昨日の夕方からの出来事の記憶を、一つ／＼気を落着けてじっくりと呼び返しつゝ吟味してみると、どうやらそれは夢ではなくて事実であるらしいことが、否み難くなって来るのであった。

「讃岐、……」

と、国経は次の間に控えている筈の老女を呼んだ。これはむかし北の方の乳人をしたことのある、四十あまりになる女で、嘗て讃岐介の妻になり任国へ下つて暮すうちに、夫に死なれたので北の方の縁を頼つて来、こゝ数年来大納言家に奉公をしているのであるが、大納言にすれば年の若い北の方を娘のように思うところから、どうかした折には此の女房を娘の母親のように思い、夫婦間のことは勿論、家事萬端の相談をしたりするのであった。

「もうお眼ざめでいらつしやいますか」

と、讃岐はそう云つて枕許に畏まったが、国経は顔を夜着の襟に埋めたまゝ、

「うむ」

と一言、不機嫌に答えた。

「いかゞでいらつしやいますか、御気分は」

「頭痛がして、胸がむか／＼する。わしは二日酔いをしたようだ。

……」

「何ぞお薬を持って参りましょうか」

「昨夜は大分過したらしいが、どのくらい飲んだであろうか」

「さあ、どのくらい召上りましたやら。……あんなにお酔い遊ばしたのを、ついぞ見たことはございません」

「そうか、そんなに酔っておったか」

国経はそこで顔を出して、

「讃岐」

と、少し調子を変えて云った。

「今朝眼がさめたら、わしはひとりで寝ている。……」

「はい」

「これはどう云うことなのか。上は何処へ行かれたのか」

「はい、……」

「はいでは分らん。いったいどう云う訳なのだ。……」

「昨夜のことを、おぼえておいでにならないのでございましょうか」

「今少しずつ思い出しているのだが、……上はもう此の館におられないのだろうか。……あれは夢ではなかったのだろうか。……」

……わしは左大臣がお歸りになろうとするのを、無理にお引き止めした。そうしたら左大臣が、箒のこと、馬だけでは物足らぬ、もつと立派な引出物をせい、物惜しみをすると仰せになった。そこでわしはあの命よりも大切な人を、引出物として差上げた。……あれは夢ではなかったのだろうか」

「ほんとうに、お夢であつたらようございますものを。……」

不意に、何だか鼻をすゝるような音がしたので、国経が顔を上げてみると、讃岐は袖で面を隠して、じつと俯向いているのであった。

「それでは、夢ではなかったのか。……」

「憚りながら、何ぼう酔うていらつしやつたにしましても、どうしてあんな物狂おしい真似をなさいましたか。……」

「もうそんなことを云うのは止せ。今更取返し of つかないことだ」

「でも、左大臣とも云われるお方が、本気で人妻を奪い取るようなことをなさいますようか。昨夜のことはお戯れで、今朝はきつとお返し下さるのではございますまいか」

「そうであつてくれたらよいが、……」

「何なら、お迎えの人を出して御覧になりましたら、……」

「そんなことが出来るものか。……」

国経は又すっぽりと夜着を被って、

「もうよい、彼方へ行つてくれ」

と、聞き取りにくい濁声で云った。

今になつて考えれば、なるほどそれは自分の胸に正しく覚えのあることである。氣狂いじみた行為ではあるが、左様なことを仕出した心理については、自分には説明が付かないでもない。自分は昨夜の饗宴を、平素の左大臣の恩に報いる絶好の機会であると思い、出来るだけのもてなしをしたには違ひなかったが、一方では、自分の力に限りがあつて、到底左大臣を満足させる程の款待をなし得ないのを、耻しくも齒痒くも感ずる念が一杯であつた。自分こそ云う自責の心持、——こんな貧弱な饗応をしたのでは相済まない、何かなもつと喜んで戴くことは、——と云う心持があつた矢先に、左大臣からあゝ云う風に云われ、剩「物惜しみをするな」

とまで云われたのがぐつと答えて、左大臣が所望とあらば、どんな物でも差出す料簡りょうけんになったのであった。それに自分は、謎をかけられるまでもなく、左大臣の所望するものが何であるかを、大凡そ察し得たのであった。昨夜の左大臣は、あの御簾の方へ始終横眼を使つてばかりいた。最初はそれも控え目であったが、だんく露骨になり、しまいには夫である自分の見ている前で、伸び上つて秋波を送つたりした。……自分がいかに老耄ろうもうし、血のめぐりが悪くなっているからと云つて、あんなにまでされて気が付かずにいられようか。……

……国経はこゝまで記憶を辿つて来て、さて、昨夜のあの時の自分の感情が妙な風に動いたことを思い出すのであった。と云うのは、時平のそう云う眼に餘る行動を見ながら、奇怪にも彼はその無礼を不愉快に感ぜず、却つて幾分かうれいような気がしていたのであった。……

……なぜ自分は嬉しかつたのか。……なぜ嫉妬を感じないで、得意に感じたのだろうか。……自分は前から、あゝ云う世にも稀な人を自分が妻にしていることを、無上の幸福としていたのであるが、正直を云うと、世間がその事実に関心でいることが物足りなくもあつたのだ。自分は誰かに、時々自分の此の幸福を見せびらかして、羨ましがらせてやりたかつたのだ。だから左大臣が羨望に堪えぬ顔つきをして簾の奥へ流眊ながしめを送つたのを見ては、大いに満足したわけであつた。自分は斯様に老耄し、官位は漸く正三位大納言を以て終る運命にあるけれども、而も自分は、此の年の若い美男子の左大臣にさえ缺けているものを持っている、いや、恐らくは、九重の奥にまします帝でさえも、此れほどの人を後宮に持つてはおられないであろう。自分はそう思うことで云うに云われぬ誇りを

感じ、それで嬉しかつたのであった。……が、それだけならば誰に話しても分つて貰えることだけれども、実は自分の胸の中には、又もう一つの感情があつた。つまり自分は、二三年来生理的に夫たる資格を失いかけているところから、此のまゝでは、——何とかしてやらなければ、——妻に申訳がないと云う気持が、昂じて来ていたのであつた。自分は自分を幸福だと感ずる半面に、自分のような老いばれを夫に持った人の不幸を、だんく強く感じつゝあつたのだ。尤も世には悲惨な運命に泣く女はいくらもあるもので、そのくらいなことを一々不憫がつていては際限がないけれども、これは普通の、ありふれた女ではないのである。左大臣はおろか、帝の后と云つてもよい程の容貌と品威に恵まれた人が、相手もあらうに無能力者の老翁の伴侶となつたのである。自分は最初はその人の不幸を、努めて見て見ないふりをしていたのであつたが、その人のめでたさ、いみじさが、肝に銘じて分つて来るに従い、自分のようなものがこれだけの人を独占している罪の深さを、反省しないではいられなくなつた。自分は天下に自分ほどの仕合わせ者はないと思つていられるけれども、妻の方では何と思つていられるであらう。自分がどんなにその人を大切にし、いつくしんだにしろ、妻は内心迷惑こそすれ、決して有難いとは思感じてまい。妻は此方が何を問うてもはつきり答えない人なので、お腹の中は知るよしもないが、ひよつとすると、此の老翁が早く死んでさえくれたらと、いつまでも長寿を保っている夫を恨み、その存在を呪つているのではなからうか。……

……自分はそれに気が付くにつれ、もし適当な相手があつて、此の気の毒な、いとしい人を、今の不幸な境涯から救い上げ、真に仕合わせにしてやるのが出来るのであるなら、進んでその人に彼女

を譲ってやつてもよい、いや、譲るべきが至当である、と思うようになったのであった。どうせ自分の餘命はいくばくもないのであるから、晩おそかれ早かれ、彼女にそう云う運命が廻まわつて来ることでありうけれども、女の若さと美しさにも自おのづから限りがあることを思えば、彼女のためには一日も早くそうなった方がよいのである。自分も彼女から死ぬのを待たれているくらいなら、今から死んだつもりになって、彼女の半生を明るくしてやりたい。恋しい人を此の世に遺のこして死んだ人間が、草葉の蔭からその人の将来を絶えず見守つてやるように、自分は生きながら死んだと同じ心持になるのだ。そうしてやつたら、彼女も始めて、此の老人の愛情がいかに献身的なものであつたかと云うことを、理解するであらう。その暁にこそ、彼女は此の老人に向つて無限の感謝と萬斛ばんこくの涙をそぐであらう。彼女は恰あたかも、故人の墓に額ぬかずくような氣持で、あゝあの人は私のためにこんなに親切にしてくれた、ほんとうに可哀そうな老人であつたと、泣いて礼を云つてくれるであらう。自分は何処か、彼女からは見えない所に身を隠して、餘所よそながら彼女のその涙を見、その声を聞いて餘生を送る。その方が、いとしい人から恨まれたり呪われたりして暮すよりは、自分としてもどんなに幸福であるか知れない。……

自分は昨夜、左大臣のあのしつツこい所作しよくさを見ているうちに、平素胸中にわだかまっていたそう云ういろくなもやくが、酔いが発するのと共に次第に湧き上つて来るのを覺えた。いったい此の人が、そんなにも自分の妻に氣があるのだらうか。もしそうならば、自分が日頃夢見ていたことが、或あるは実現されるかも知れない。自分が本気で、その計畫を実行に移すつもりなら、今こそ無二の機会であり、此の人こそその資格のある人物である。官位、才能、容貌、

年齢、あらゆる点から云つて、此の人こそ、自分の妻にふさわしい相手である。此の人ならば、ほんとうにあの人を幸福にしてやることが出来るのである、と、自分はそう思ったのであった。

自分の心にそう云う考きざが萌もしていたところへ、左大臣があんな工合に積極的に出て来たので、自分は一も二もなかった。自分の念願と左大臣の念願とが図らず合致したことに、自分はひどく感激した。

一つには左大臣の恩に報い、一つにはいとしい人への罪のつぐないが出来ると思うと、自分は有頂天になった。そして咄嗟とつさにあゝ云う行動に出てしまった。……あの瞬間にも、お前はそんなことをしてよいのか、いくら恩返しをすると云つても、餘り寛大過ぎはしないか、……酔つた勢で飛んだことをして、覺めてから地団太蹈じだんたふむのではないか、……お前が愛する人のために献身的になるのはよいが、果してお前は後の孤独に堪えられるのか、と云う囁ささやきが聞えないでもなかったのであるが、なに構うものか、後のことは後のことだ、善と信じて疑わないなら、酒の勢を借りて、も断行すべきだ、生きながら死んだ人間になる覺悟をした者が、何で孤独が恐こわいものか、……と、強しいて自ら危惧きぐの念を嘲あざけつて、とう／＼あの人の袂たもとの端を、左大臣に執とらせてしまったのであった。……

国経は、昨夜の自分の行動がどう云う動機に基づいていたかを、今は詳細に突き止めることが出来るのであったが、でもそのために少しでも心の憂鬱ゆううつが軽くなるのではなかった。彼はしずかに夜着の中に顔を埋めて、ひし／＼と迫る悔恨の情に身を委ゆたねた。あゝ、己は何と云う軽卒なことをしたのか。……いくら恩返しのためだからと云つて、恋しい妻を人に譲るなんと云う馬鹿をする者があるだらうか。……こんなことが世間に知れたら、全く物笑いの種でし

かない。……左大臣だつて感謝するよりは舌を出して可笑しがつておられるだらう。あの人にしたつて、熱狂的な愛情から出た行動であることを理解しないで、却つて己の薄情を恨んでゐるだらう。

……實際、左大臣のような人なら他にいくらでも美しい妻を求めることが出来るけれども、自分があの人を逸してしまつたら、二度と再びこんな所へ誰が来てくれよう。それを考えたら、自分こそ最もあの人を必要としたのだ。自分は死んでもあの人を手放すべきではなかつたのだ。……昨夜は一時の興奮に駆られて、孤独なんか恐くはないような気がしたけれども、今朝覚めてからの数時間でさえこんなに辛いのに、此れからずっと此の淋しさがつゞくとしたら、何として堪えて行けるであらう。……国経はそう思つた途端に、涙がぼろ／＼とこぼれて来た。老いれば小兒しょうにに復ると云うが、八十翁の大納言は、子供が母を呼ぶように大きな声で泣き喚わめきたかつた。

その六

妻を奪われた国経が、恋慕と絶望さいなに苛まれつゝ、その後なお三年半の歳月を生きた間のことは、後段滋幹しげもとのくだりに於いてや、詳細に触れる折がある。今は暫く筆を転じて、あの夜あの車の中へ「物をこそ」の歌を投げ入れた平中の方へ叙述を移そう。

平中も亦、国経ほどではなかつたにしても、やゝそれに似た、或る後味のほろ苦いものを嘗めさせられたのであつた。もと／＼此の事の起りは、去年の冬の或る夜、彼が本院の館に伺候した折、左大臣からあの北の方のことをいろいろ尋ねられたので、ついつかりと、好い氣になつておしゃべりをしたのが始まりであることを思えば、彼は誰を恨むよりも、己おのれの浅慮を恨まねばならない。いたい彼は、「われこそは当代一の色事師である」と己惚うぬぼれているところへ持つて来て、おつちよこちよいの癖があるので、しば／＼時平に巧い工合におだてられて、泥を吐かされるのであるが、それにしても、もしあの当時時平があゝ云う暴拳に出るであらうことが豫想されたら、あんなおしゃべりはしなかつた筈であつた。彼も、此の道にかけては油断のならない左大臣が、あの北の方のことを知つたら何かいたずらをしはしないか、と云う懸念けねんは抱いたけれども、自分のような官位の低い輕輩と違つて、まさかに朝廷の重臣である人が、そう軽々しく夜遊びに出かけ、他人の家に忍び込んで北の方の閨ねやへ這い寄る、と云う訳にも行くまい、そこは一介の左兵衛佐の方が氣樂だと、そう思つて安心していたので、あんな工合に、衆

人環視の中に於いて堂々と人妻を浚^{さら}つて行くような派手なことが可能であらうとは、全く考え及ばなかったのであった。彼に云わせれば、妻は夫の眼を掠^{かす}め、夫は妻の眼を掠^{かす}めて、無理な首尾をし、危い瀬戸を渡り、こつそりと切^{せう}ない逢^あう瀬を楽しむところにこそ恋の面白味は存するのである。地位や権勢を利用して他人の所有物を強奪^{ごうだつ}するのは、身も蓋^{ふた}もない野暮^{やば}な話で、自慢にも何ものりはない。左大臣のやり方は、他人の面目や世間の掟^{おきて}を踏み躪^{にじ}つた傍若無人^{ぼうじやくぶじん}な行為であるのみか、色道の方でも仲間の仁義を無視した仕方、あれでは色事師の資格はないと云うべきである。そう思うと平中は、何か知らず不快なものが胸に残るのであった。女に好かれる男の常として、なまけ者ではあるけれども、洒脱^{しゃだつ}で、のんきで、人あたりがよくて、めったに物にこだわらない彼なのであるが、今度は例になく、時平のしたことが腹が立つてならなかった。元来彼があの北の方に寄せていた感情は、前にも云うように通り一遍の色恋よりは深いものがあつたので、あの当時もしあのまゝで進んだならば、まだもっと関係が続いたかも知れないのに、彼にしては柄^{がら}にもなくあの好人物の老大納言に惻隱^{そくいん}の情を催して、これ以上罪を重ねることが厭^{いと}わしくなつたところから、努めて彼女のことを忘れるようにして、遠のいたのであった。時平は勿論彼のそう云う胸中を知つていよう筈はないけれども、それにしても平中は、時平のためにその折角の心づかいを無駄にされてしまったのである。平中は罪を重ねると云つても、たゞ内々で老大納言の妻である人と契^{ちぎ}り、ときぐ数時間逢つていたに過ぎないのであるが、時平は老大納言に僅かばかりの恩を売り、あの老人を前後不覚に酔わしておいて、彼が命よりも大切にしているものを、あっさりと自分の所有に移した。平中の場合と時平の場合と、老人に取つて孰方^{どっち}が餘計残酷で

あるかは言を俟^{まち}たない。平中は今、自分の過去の恋人がたま／＼彼の手の届かない貴人の許^{もと}へ拉^{らっ}し去られたと云うだけのことに、遣^{つか}る方ない忿懣^{ふんまん}を感じているのであるが、老大納言の災厄はなかく／＼そんな生やさしいものではない。而もあの老人がそう云う災厄を蒙^{こう}むるに至つたのは、平中が時平に詰まらぬおしゃべりをしたからなのである。平中は、老人を不幸に陥^{おとし}れた元兇^{げんきよう}は自分であり、老人は何もそのことを知らずにいるのだと思うと、何と詫^わび言を云つてよいか分らないのであった。

だが人間は身勝手なもので、平中にして見れば、自分よりは老人の方が比較にならぬほど気の毒なことは分つていながら、馬鹿を見たのは誰よりも自分であると云う気がして、ひどく忌ま／＼しいのであった。それと云うのが、何分今云つたような事情もあつて疎遠になつたのであるから、もはやその人に興味を失つたとは云つても、実のところはまだ心底から忘れ去つていたのではなかった。もっとはつきり云うならば、一往は忘れていたのだけでも、時平がその人に好奇心を抱いていることが明かになるや否や、意地悪くも一旦失いかけていた興味が、猛然と復活して来たのであった。彼は去年のあの晩以来、時平が急に伯父の老大納言に接近し始め、しきりに飲心を求めるようになり出したのを、何となく不安な気持ちで眺めながら、それにしてもどう云う積^{つも}りであろうかと、密^{ひそ}かに時平の意図を疑い、事件のなりゆきに注意を怠^{あたか}らなかつたのであるが、恰^{あたか}もその矢先に、あの饗宴の話が持ち上り、自分もそれに随行するように命ぜられたのであった。

あの晩、平中は虫が知らすと云うのか、今に何か／＼起るのではないかと云う豫覺があつて、最初から憂鬱になつていた。彼は左大臣が自分を此の席に加えたことを、必ず訳がありそうに感じていたが、

宴が始まると非常な速力で酒が進行し、左大臣や取巻き連中が寄つてたかつて老翁を酔わせるようにしたり、左大臣が一方ではあの御簾の方へ頻々と色目を使い、一方では平中を掴まえて変な皮肉を浴びせたりしたので、一層不安が募つたのであった。彼は時平が腕白小僧のように眼を光らして、泥酔した顔を火照らし、喚き、唄い、笑うのを見ると、いよく何か大きな危険が御簾の中の人の上に迫りつゝあるように思ふ、それにつれてだんく昔の愛情が、昔と同じ強さを以て蘇生つて来るのを覺えた。そして時平が簾中に闖入した時は、座に堪えられず慌て、席を外したのであったが、やがてその人が車に乗せられて連れて行かれようとするけはいに、又じつとしていられないで、車の際へ走り寄つて、夢中であの歌を投げ込んだのであった。

その夜平中は、再び警固の人数に加わつて車の跡に付き随い、左大臣の邸まで供をして行つて、そこからひとりとぼくと深夜の街を家路に就いたが、その途々も、一步は一步毎に恋しさが増して行つた。行列が本院の館に着いて、その人が車から下りる時に、せめて一と眼逢えもしようかと願つていたのに、とうくその望みも空しく終り、もはや永久に隔絶し去つたことを思うと、更にその人を愛惜する念が燃え上つて来るのであった。自分はあの人をまだこんなにも恋していたのか、あの人へ寄せる熱情が、どうしてこんなにも消えずにいたのかと、彼は自分を訝しむにはいられなかったが、蓋し平中の思慕の情は、夫人が彼の及び難い高根の花になつたと云う事実によつて、挑発されたところもあるう。つまり夫人が老大納言の北の方であるうちは、いつでも自分の欲する時に撚りを戻すことが出来たのに、今やそのことが不可能になつたので、そのための口惜しさが重なる原因であつたのだと、云えなくもあるま

い。因みに云うが、前掲の平中の「物をこそ」の歌は、古今集には読人しらずとして載っており、「物をこそいはねの松の」が「思ひ出づるときはの山の」となっている。又十訓抄は此の歌の作者を国経としているが、その文に曰く、

時平公はすべておこれる人にておはしけるにや、御をちの国経大納言の室は在原棟梁の女なりけるを、たばかりとりて我が北の方にし給ひけり、敦忠卿の母なり、国経卿歎き給ひけれども、世のきこえにはゞかりてちから及ばざりけり
思ひ出づるときはの山の岩つゝじ

いはねばこそあれ恋しきものを

此の歌は、国経卿その比よみ給ひけるとぞ

と。なるほど、歌としては「物をこそ」より「思ひ出づる」の方が格調が高いように感じられるし、又これを国経老人が詠んだと云う風に考へて見るのも哀れが深いが、そう云う詮議立ては此の小説の埒外であるから、今は孰方でもよいとしておこう。たゞ、こゝにもある通り、時平は夫人在原氏をたばかり取る目的で連れ去つたのであるから、もちろん明るる朝になつても大納言の所へ返して寄越しはしなかった。それどころか、豫めしつらえて置いた寢殿の奥の一と間に住まわせて寵愛したので、翌年には早くも後の中納言敦忠である男子を生むに至り、遂には世人も此の夫人を貴んで「本院の北の方」と呼ぶようになった。気の弱い国経はそんな有様を見ながらどうすることも出来ず、今昔物語の叙述に従えば、「妬く悔しく悲しく恋しく、人目には我が心としたる事のやうに思はせて、心のうちにはわりなく恋しく」思いつゝ遣る瀬ない日を送つたのであるが、平中はなおあきらめ切れず、大胆にも今は左大臣の

妻である人に、隙があつたら密かに云い寄ろうとしたのであつた。後撰集卷十一恋三の部に、「大納言国経朝臣の家に侍りける女に、いと忍びて語らひ侍りて行末まで契りける比、此の女俄かに贈太政大臣（時平）に迎へられて渡り侍りにければ、文だにも通はず方なくなりにければ、かの女の子の五つばかりなる、本院の西の対に遊び歩きけるを呼び寄せて、母に見せ奉れとて腕に書きつけ侍りける。平定文」として、

昔せしわがかねごとの悲しきは

いかに契りし名残なるらん

と云う歌が載っているのは、その何よりの証拠であるが、この歌のあとに又、「返し、読人しらず」として次のような歌が見えるのは注目に値する。――

うつゝにて誰ちぎりけん定めなき

夢路にまよふ我は我かは

時平は国経や平中とのいきさつがあるので、新夫人の身边を油断なく見張らせ、めつたな人は寄せつけぬように用心したであろうことは想像に難くないのであるが、平中はいかにかして警戒の目をくゞり、幼童を手馴ずけて歌の取次をさせることには成功したのである。此の幼童と云うのは、十訓抄には「かの女の若君の、とし五つばかりなるが」とあり、世継物語にも「若君のかひなに書いて」とあつて、夫人在原氏と国経との間に生れた男の子、後の少将滋幹のことなのであるが、蓋し此の児だけは、母なる人が本院の館へ連れ去られた後も、乳人などに伴われて自由に出入りすることを許されていたか、又は大目に見て貰つていたのであつた。如才のない平中がかねてからそれに眼をつけ、巧く此の児に取入つていて、或る日此の児が本院の館へ来、母が住んでいる寢殿の、西の対屋で遊

んでいるところへ行き通わして、すかさず取次を頼んだのであろう。それにつけても、彼が何とかしてその人に近づこうと思ひ、暇があれば此のあたりをうろくしていた情況が察しられるが、少年の腕に歌を書いたとは、急の場合で紙などの持ち合わせがなかったのか、紙では却つて落ち散る恐れがあつたからであらうか。北の方は、我が子の腕に書いてある昔の男の歌を読んで、ひどく泣いたが、やがてその文字を拭い取つて、「うつゝにて」の返歌を、同じように腕に書き記し、「これをその方にお見せ」と云つて我が子を突き遣ると、自分は慌てゝ几帳のかげに身を隠した。

今を時めく左大臣の北の方に、こんな工合にして平中が取次を頼んだのは一度や二度ではなかつたと見えて、大和物語には又別な歌が伝わっている。――

ゆくすゑの宿世も知らず我がむかし

契りしことはおもほゆや君

北の方はこれにも返歌を与えたらしいのであるが、生憎その歌は残っていない。が、文を通わすことは出来ても逢うことは許されなかつたので、さしもの平中も次第に望みを失つて匙をなげたらしく、やがて此の夫人との関係は果敢ない終りを告げたのであつたが、そうなると自然、此の好色漢の心は、再び嘗てのもう一人の恋人、あの侍従の君の方へと傾いて行つた。それと云うのが、此の人も左大臣家の女房として、同じ本院の館のうちにいるのであるから、夫人の方が脈がないと極まれば、平中としては手ぶらですごく引込む気になれず、もとく嫌いでも何でもなかつた此の人を、せめて此の際物にしなければ自分の男が廃つてしまうように、恐らくは考えたことでもあらう。しかし意地の悪いことにかけては一通りでない侍従の君が、今となつては尚更おいそれと平中に靡く筈は

なかった。もし平中があの時翻弄されながらも一途に熱意を失わないで追い廻したら、結局試験に及第したことになって、許されたのに違いないのであるが、途中で脇道へ外れたために、相手はすっかり機嫌を損じて一層旋毛を曲げてしまい、もう何を云って来ても鼻であしらって、てんで取り上げないのであった。

一人の恋人は他人に奪われ、もう一人の恋人には手きびしくはねつけられた平中が、色事師の面目にかけてもと、必死になって侍従の君に泣きを入れたいきさは、煩わしいので茲に詳述するのを避けよう。読者は世にも自尊心の高い、男を憫らすことに特別な興味を抱く侍従の君が、再び前と同じような、或は前よりも何層倍か苛酷な試験を平中に課したのであることを、そして平中が、今度は実に辛抱強く一つの試験に堪えて、兎にも角にも彼女の誇りを満足させ、許しを得る迄に漕ぎ着けたやゝこしい経路を、宜しく想像すべきである。が、漸く平中も思いを遂げて、長い間のあこがれの的であつた人と逢う瀬を楽しむ境涯になったものゝ、それから後も皮肉屋の女の癖は改まらず、やゝもすれば意想外な悪戯を考え出して嬲りものにし、目的を果たさずに帰って行く男のあとから舌を出したり、べかこうをしたりすることが、三度に一度ぐらいは必ずあるので、平中もしまいには業を煮やして、糞、忌ましくしい、いつ迄馬鹿にされているのだ、こんな女を思い切れないなんてことがあるものかと、何度か決心をしては、何度か誘惑に負ける、と云うようなことを繰り返していたのであつたが、あの今昔物語や宇治拾遺物語に出ている有名な逸話は、多分その頃の出来事だったのであろう。聞くところに依れば、此の逸話は故芥川龍之介氏の著書にも紹介されているそうであるから、読者の多くは既に知っておられるであらうが、それを讀まない人々のために、今その

大要を物語ることにしよう。

さて平中は、何とかして侍従の君のアラを捜し出してやりたい、いくらあの女が非の打ちどころのない美婦人であるからと云って、結局は普通の人間に過ぎないのだと云う證據を見たら、これほどに迷い込んだ夢もさめて、愛憎を盡かすことが出来るであらう、と、そう思った末に考えたのは、あのようなみめうるわしい女であっても、その体から排泄するものは、われくと同じ汚物であらう、ついては何とかしてあのお虎子をお虎子を盗み出し、中にしてあるものを見届けてやりたい、そうしたら己も、あんな顔をしてこんなむさい物を出すかと思つて、一遍に厭気がさすであらう、と云うことであつた。ついでながら、筆者はその時分のお虎子がどんなものであつたかを知らない。今昔にはたゞ「宮」と云つてあるが、宇治拾遺には「かはこ」とあるので、皮で造つた宮が普通だつたのであらうか。何にしてもそう云う地位の女房たちは、宮の中に用を足して、それを時々召使の女に捨てに行かしたのであつた。で、平中が例の局のあたりへ行つて物蔭にひそみながら、宮の始末をする召使の出て来るのを待っていると、或る日、年の頃十七八の、可愛らしい姿形をした、髪 of 長さは柏の文に二三寸足りない程なのが、瞿麦重ねの薄物の柏を着、濃い袴をしどけなく引き上げて、問題の宮を香染めの布に包み、紅い色紙に絵を書いた扇でさし隠しながら出て来たので、こっそり跡をつけて行つて、人目のない所へ来た時、不意に駈け寄つて宮に手をかけた。

「あれ！ 何なさいますの」

「ちよつと！ ちよつと此れを……」

「あれ！ 此れはあなた……」

「いゝんだよ、分つてるよ！ ちよつと寄越し給え」

女が呆^{あき}れている隙に、平中はすばやく筥を奪い取って一目散に走り去った。

後生大事にその品物を袂のかげに抱えながら、我が家へ逃げ帰った平中は、一と間のうちに閉じ籠^{かご}ってあたりに誰もいないのを確かめてから、先ずそれを恭^{うやうや}しく座敷にすえて、とみこみした。これが自分の深くも心を打ち込んだ人の物を入れてある容器かと思うと、直ぐには蓋^{ふた}を開けるのが惜しい気がして、なおよく見ると、普通にあるような皮籠^{かわご}ではなくて、金色の漆^{うるし}の塗^ぬつてある立派な筥であつた。彼は改めてそれを手に取り、上げて見たり、下げて見たり、廻^{まわ}して見たり、中の重みを測^{はか}つて見たりしていたが、やがて恐る／＼蓋^{ふた}を除けると、丁子^{ちようじ}の香に似た馥郁^{ふくいく}たる匂が鼻を撲^うつた。不思議に思つて中を覗^{のぞ}くと、香の色をした液体が半分ばかり潑^{おと}んでいる底の方に、親指ぐらいの太さの二三寸の長さの黒っぽい黄色い固形物が、三きれほど圓^{まる}くかたまつていた。が、何しろそう云うものらしくない世にもかぐわしい匂がするので、試みに木の端きれに突き刺して、鼻の先に持つて来て見ると、あの黒方^{くろほう}と云う薫物^{たきもの}——沈^{じん}と、丁子^{ちようじ}と、甲香^{かうかう}と、白檀^{びやくたん}と、麝香^{じやくかう}とを煉^ねり合わせて作つた香の匂にそっくりなのであつた。

「中を突き刺して鼻にあて、嗅^{かぐ}げば、えも云はず馥^{ふく}しき黒方の香にてあり、すべて心も及ばず、これは世の人にあらぬなりけりと思ひて、これを見るにつけても、いかで此の人に馴^なれ睦^{むつ}びんと思ふ心狂^{くる}ふやうにつきぬ」とは今昔の描写であるが、要するに、たゞの人間に過ぎないと云う證據を見てあきらめようとしてかゝつたのが、却^{かえ}つて反対の結果を生み、なか／＼愛憎を盡かすところではなかつたのであつた。でも平中は、あまり不思議でたまらないので、その筥を引き寄せて、中にある液体を少し啜^すつて見た。と、やはり

非常に濃い丁子の匂がした。平中は又、棒^{ぼう}ぎれに突き刺したものをちよつぱり舌に載せて見ると、苦い甘い味がした。で、よく／＼舌で味わいながら考えると、尿^{によう}のように見えた液体は、丁子を煮出した汁であるらしく、糞^ふのように見えた固形物は、野老^{とろう}や合薫物^{あわせたきもの}を甘葛^{あまぎ}の汁で煉^ねり固めて、大きな筆の欄^{つか}に入れて押し出したものらしいのであつたが、しかしそうと分つてみても、いみじくも此方の心を見抜いてお虎子^{おまる}にこれだけの趣向^{こころ}を凝^こらし、男を悩殺^{なやめ}するようなことを工^{たく}むとは、何と云う機智^{きし}に長けた女か、矢張^{やは}彼女は尋常^{じんじょう}の人ではあり得ない、と云う風に思えて、いよく諦^{あきら}めがつきに／＼、恋しさはまさるのみであつた。

人間の運は、一遍悪い方へ曲り始めると何処まで曲るか分らないもので、さすがの平中も、侍従の君のお虎子^{おまる}の匂を嗅^{かぐ}いでからと云うものは、何処へ行つても色事が成功せず、悉^{ことごと}く失敗つゞきであつた。まして侍従の君はます／＼驕^{きよう}慢^{まん}に、残酷^{さくこ}になり、彼が熱を上げれば上げるほど冷^{ひや}かな仕打をし、もう少しと云う所へ来ては突^つつ放すので、可哀^{かな}そうな平中は、とう／＼それが原因で病氣になり、悩み死に、死んでしまった。——「いかで此の人に逢^あはで止みなんと思ひ迷ひける程に、平中病み付きにけり、さて悩^{なや}みける程に死に／＼けり」と、今昔物語ではそうなつていのである。尤^{もつと}も、こゝに一つ書き洩^もらしてならないことは、十訓抄に依ると、侍従の君は本来平中の女であつたのを、これも時平が邪魔をして横取りをした、と云うことになつていゝ。そこで筆者が想像するのにも、もと／＼此の婦人は本院の館に仕えていた女房なのであるから、恐らくは早くから時平が手を着けていなかった筈はなく、平中はそれを知らずにか、或は知りつゝか、三角關係を結んだのであろう。されば、お虎子^{おまる}の一件を始めとして侍従の君の彼に対するさまざまな悪戯

の数々は、ひよつとすると背後で此の女を操っていた左大臣の入れ智慧であつたかも知れない。そうだとすれば、平中を殺したのは時平であると云うことにもなる。

その七

筆者は前に、平中の歿年は延長元年とも六年とも云われていて、確かでないと言うことを記した。今、侍従の君のことが原因で病死したと云う今昔の記事に従えば、何となく平中の方が時平より先に死んだような感じを受けるが、前掲の後撰集の詞書などを読むと、矢張平中は最後まで生きていたのであろうか。だがまあそれも執方でもよいとして、北の方奪取事件があつてから四五年の後、延喜九年四月四日に、時平が三十九歳の若さを以て卒去したことははっきりしている。

此の左大臣が有為の材を抱いて早死をしたのは、積る悪業の報いであるように当時の人々は見たのであるが、就中その報いの最たるものは、菅公の怨霊の祟りであるとされたのであつた。これより先、菅公が筑紫の配所で薨じたのは延喜三年二月二十五日であるが、同六年の七月二日には、時平と共に菅公讒奏の謀議に加わつた右大将大納言定国が四十一歳を以て卒し、同八年十月七日には、これも時平の一味であつた参議式部大輔菅根が五十三歳を以て卒した。而も菅根の場合は、雷神と化した菅公の霊に蹴殺されたことになつてゐるが、菅公が雷になつて生前の怨みを報じたと云う怪異談のうち、時平とその一族に係のある部分を、以下に少しく述べて見よう。

菅公の霊が始めて姿を現わしたのは、薨去の年の夏、或る月の明かな夜、五更が過ぎて天がまだ全く明けきらない頃、延暦寺第十

三世の座主法性房尊意が四明が獄の頂に於いて三密の觀想を凝らしている時であつた。中門のあたりと覺しい所にほとくと戸を叩く者があるので、開けて見ると、亡くなつた筈の菅丞相がゐんでいた。尊意は胸騒ぎを隠しながら、恭しく持佛堂に請じ入れて、深夜の御光臨は何御用にて候哉と問うと、丞相の靈が答えて、自分は口惜しくも濁世に生れ合せて無実の讒奏を蒙り、左遷流罪の身となつたについては、その怨みを報せんために雷神となつて都の空を翔り、鳳闕に近づき奉らうと思つてゐる、此の事は既に梵天、四王、閻魔、帝釈、五道冥官、司令、司録等の許しを得てゐるので、誰に憚るところもないのだが、たゞ貴僧は法験がめでたくおわしますので、貴僧の法力で抑えられるのが一番恐ろしい、何卒年来の師壇の契りを思つて、たといその折朝廷からお召しがあつても、お請けにならないように願ひたい、自分は此のことを申上げたいと存じて、只今態々筑紫から参つたのです、と云うのであつた。

そこで尊意は、おん歎きの次第は御尤もであるけれども、古えより賢人が小人のために禍を蒙つた例は珍しからず、貴下御一人に限つた運命ではないのであるし、凡そ世の中は無道なものなのであるから、左様にお恨みなさるの浅ましゅう存ずる、どうかそのようなお考は思い止つて戴きたい、だが、そう云つても貴下と愚僧とは年来のよしみも深いことなので、折角のお頼みとあるなら、たとい眼を抜かれてもお言葉に従つて、宣旨を御請けしないことに致しましう、但し天下は皆王土であり、愚僧も王民の一人である上は、もしお召しの宣旨が数度に及んだら、二度まではお断り申上げるけれども、三度目にはお請けしなければなりませんまい、と、そう答えると、丞相の靈が忽ち顔色を変じて凄じい形相になつた。尊意

が、咽喉が渴いておいでしようと云つて柘榴をすゝめたのを、丞相は取つて口に啣んでひしひしと噛み砕き、妻戸のふちに吐きかけたかと思つと、見るく一条の火焰となつて燃え上つたが、尊意が灑水の印を結ぶと、たちどころにその火が消えた。

それから間もなく洛中の空に黒雲が蔽ひ廣がつて大雷雨が襲来し、風を起し雹を降らして、宮中の此処彼処に落雷した。満廷の朝臣たちが戦き恐れ、或は板敷の下に這ひ入り、或は唐櫃の底に隠れ、或は畳を担いで泣き、或は普門品を誦しなどする中で、時平がひとり毅然として剣を抜き放ち、空に向つて雷霆を叱咤したのは此の時の話であるが、その後風雨がなお止まず、遂に鴨川の洪水を見るに至つた。法性房尊意も宣旨が三度に及んだので、已むを得ず参内して、法力を以て雷電を取り鎮め、帝のおん悩みを除いたのであつたが、その時尊意の乗つた車が鴨川の浜にさしかゝると、水が自然に退いて車を通した。又宮中に於いて尊意が加持祈祷してゐる時、帝は夢に不動明王が火焰の中で声を厲まして呪文を唱えていると見給ひ、おん眼がさめて御覧になると、それは尊意の読経の声であつたと云う。

しかし尊意の法力も度重なつては効を奏さなかつたのか、その後五年を経、八年の十月には菅根朝臣が電撃を受けて震死した。時平は九年の三月頃から何となく所労の氣味で床に就いたが、菅丞相の怨靈がしばく枕頭に現れて呪いの言葉を洩らすので、陰陽師や医師を招いて、さまざまの祈祷、療治、灸治等をして見るけれども一向に利き目がなく、今はたゞ死を待つばかりの状態となつた。一家一門の悲歎やる方なく、此の上は高德の聖を聘してその法力に縋らうと云うことになつたが、それには當時天下にその名が著聞していた浄蔵法師を措いて他になかつた。此の浄蔵と云う僧は、昌泰

三年の昔、菅公がまだ右大臣として時平と昇進を競っていた頃、「離朱の明も睫上の塵を視る能はず、仲尼の智も篋中の物を知る能はず云々」の句のある一書を菅公に呈して、明年必ず公に禍の及ぶであろうことを告げ、早く官を退いて保身の術を講ずべきことを諷した文章博士三善清行の第八子で、母は弘仁天皇の孫女であった。幼にして聡敏比なく、四歳にして千字文を読み、七歳にして出家せんことを求めたが、十二歳の時宇多上皇に見出されて、上皇の法の弟子となった。その後上皇は勅して彼を叡山に上らせて登壇受戒せしめ給い、玄昭律師に附して密教を学ばしめ給うたが、生来多才多藝の人で、頭密の両宗は勿論のこと、十種に餘る学問技術を身につけていたと云われ、医道、天文、悉曇、相人、管絃、文章、卜筮、占相、舟師、絵師、験者、持経者等々の道に練達してい、音曲などの諸藝にかけても肩を並べる人がなかったと云われる。左大臣家では此の浄蔵を懇請したので、浄蔵が行ってみると、既に時平の面上に死相が現れているので、もはや定業は免れ難く、たといいかような術を施しても萬死に一生を得ることはむずかしい旨を申したのであったが、病人も、附き添う家族の人々も、頻りに乞うて止まないのので、辞するに由なく、兎も角も加持祈祷に努めた。折柄浄蔵の父の清行も見舞いに行つて枕頭に坐していたが、浄蔵が一心に祈りつづけると、病人の左右の耳から青龍が出て口より火焰を吐き、清行に向つて云うのに、自分は生前尊閣の諷諫を用いながつたゝめに左遷の憂き目を見、筑紫の空に流寓して果敢ない最後を遂げたのであるが、今、梵天帝釈の許しを得、雷となつて自分に辛かつた人々に怨みを報じようとしているのに、尊閣の息浄蔵が法力を以て妨げをなし、自分を降伏させようとするのは心外である、尊閣願わくは浄蔵法師を制せられよ、と云うのであった。

清行はそれを聞いて恐れ畏み、浄蔵に命じて直ちに祈祷を中止せしめたが、浄蔵が病室を退去するや、須臾にして時平は事切れてしまった。

宇多上皇は、上皇の法の弟子である浄蔵が左大臣の邸に於いて最後まで加持祈祷の勤めをせず、中途で退出したことを聞召されて大いに御氣色を損ぜられたので、浄蔵は深く勅勘の身を慎み、三箇年の間横川の首楞嚴院に籠居して修練苦行の日を送つたと云うが、世間一般の人々は、時平がそう云う死に方をしたことを当然のように考へて、あまり同情する者はなかった。而も報いは時平一人に止まらず、長く子孫にまで及んだのであつて、彼の三人の子息のうち、長男の八条大将保忠は、承平六年七月十四日に四十七歳を以て歿し、三男の中納言敦忠、——あの新夫人在原氏が生んだ晩年の子は、天慶六年三月七日に三十八歳を以て歿した。尤も保忠の歿年は四十七歳と云うのであるから、その頃として若死とは云えないかも知れないが、事實は菅公のたゞりを氣に病む餘り病氣に取り憑かれ、枕許に験者を招いて薬師経を読み上げさせていたところ、経の中に宮毘羅大将と云う文句があつたのを、「汝を縊る」と聞き違えて悶絶し、それきりになつてしまつたと云うので、矢張尋常の死に方ではなかつた。そのほか、宇多天皇の女御によつて京極御息所と云われた女子があつたが、これも短命を以て終り、他の一人の女子仁善子と醍醐天皇の皇太子保明親王との間に生れた康頼王は、時平の外孫に当り、保明親王の薨去後に皇太子に立つたが、これも延長三年六月十八日に、僅か五歳を以て薨じた。たゞ二男の富小路右大臣顕忠が、康保二年四月廿四日を以て六十八歳で歿したのは例外であるが、此の人は心がけのよい人で、平生菅公の霊を畏れ敬い、毎夜庭に出て天神を拝した。又身を持するこ

と謹厳で、儉約を旨とし、大臣の位に六年の間いたけれども、家にあつても、外にあつても、大臣の作法を振舞わず、外出の時は前駆を具して行くことはめつたになく、車ぞいにも四人の供は召連れず、いつも車の尻の方に乗った。食事をするにも贅沢な器を用いず、土器に盛つて、台などもなしに、折敷に載せて直かに畳の上に置いた。手水を使うにも半挿盥を用うることはなく、寢殿の日隠の間に棚を作らせて、小桶に小さい柄杓をつけておき、毎朝仕丁がそれに湯を入れるだけで、手を洗う時は自ら水をかけに行くようにし、人手を煩わすことはなかった。そう云う人であつたから、右大臣にまで昇進し、後に正二位を贈られたのであるが、此の大臣の孫たちのうちで、三井寺の心譽、興福寺の扶公等、佛門に入つた者は恙なきことを得て、大僧都や権僧正の地位に至つた。僧になつた者は、此の外にも敦忠中納言の子右兵衛佐理、その子の岩倉の菩提房文慶等があり、これらは孰れも佛道に帰依したお蔭で禍を免れることが出来たのであるが、結局昭宣公の長男たる時平の後裔は栄えずにしまつて、四男の忠平が、後に従一位摂政関白太政大臣になつたのみならず、その一門は皆出世して頭要の職に就いた。それは菅公が左遷の時、右大弁であつた忠平は密かに菅公に同情して兄に与せず、その後も絶えず配所へ消息を通して、慰勲を結んでいたからであると云われる。

時平の三男の敦忠は、三十六歌仙の一人であつて、本院中納言とも、枇杷中納言とも、又土御門中納言とも云われ、百人一首の、「あひ見ての後の心にくらぶれば」の作者として知られているが、「此の権中納言は本院の大臣の在原の北の方の腹に生まれ給へる子也、年は四十ばかりにて形有様美麗になんありける、人柄もよかりければ世のおぼえも花やかにて」と今昔物語も書いてるように、時平と

は違つて、優しい、人好きのする人物であり、一面には母方の曾祖父業平の血を引いた、多感で情熱に富む詩人でもあつた。但し百人一首一話に、夫人在原氏は国経の館から時平に拉し去られる時に、既に敦忠を懷妊していた、されば敦忠はまことは国経の胤であるが、夫人が本院へ移つてから生れたゝめに、時平の子として育てられたのであると云う記事が見える。そうだとすれば、敦忠は少将滋幹の実弟になる訳であるが、一話の記事は何に基づいているものか、筆者はその出所を詳かにしないけれども、或は当時世上にそう云う風説もあつたのであろうか。此の敦忠が天慶六年に早世してからは、禁中で管絃の御遊がある時は博雅三位がなくてはならない人になり、三位に差支えがあるとその日の御遊を中止し給うようになつたが、故老たちはそれを聞いて、今は世が末で管絃の名手もいなくなつた、敦忠中納言が存生中は、博雅三位が左様に重んぜられることはなかつたのに、と云つて歎いたと云う。此の一事を以ても、敦忠の死が人々に惜しまれたこと、又敦忠が和歌ばかりでなく、管絃の道にも秀でゝいたことが偲ばれるのである。

参議藤原玄上の女子で、皇太子保明親王の御息所に上つた人があつたが、敦忠がまだ左近少将であつた時分に、お二人の間の後朝の使を勤めさせられたものであつた。そんな縁故から、そのうち親王がおかくれになると、御息所は敦忠と契るようになり、敦忠は限りもなく此のお方をいとしい人に思つたのであつたが、或る時、「わたくしの一族は皆短命でございますから、私もそう長いことはございますまい。わたくしが死にましたら、あなたはあの文範のものになられますでしょう」と云つたことがあつた。文範と云うのは民部卿播磨守で、敦忠の家の家司をしている男だったので、御息所が、「まあ、そんなことがあるのですか」と云われると、「いゝえ、

きつとそうなります、私は空から見ておりますよ」と敦忠は云ったが、果してその豫言の通りになった。時平の子たちや孫たちが天神の祟りと云うことを神経に痛んで、始終安き心地もなかったことは、保忠の例を見ても察しられるが、敦忠も亦、自分が到底長生きの出来な運命を担っていることを知り、ひそかに諦めていたのであつた。

前記の御息所の外に、敦忠にはなお数人の思い人があつた。今、敦忠集を見ると、その大部分は恋歌であつて、中にも斎宮雅子内親王との贈答が多く、此のおん方とは随分長く契り交していたことが想像されるが、後撰集卷十三恋五の部には、宮が斎宮にならせられて伊勢へお下りになった時の敦忠の歌が、次のような詞書と共に載っている。――

西四条の前斎宮まだみこにものし給ひし時心ざしありて思ふこと侍りける間に、斎宮に走り給ひにければ、その明くる朝に榊の枝につけてさしおかせ侍りける

伊勢の海の千尋の浜に拾ふとも

今は何てふかひかあるべき

又、小野宮左大臣実頼の女子で、彼が「みくしげ殿の別当」と呼んでいる人を、久しく恋いわたりながらなく逢うことが出来ないで、或る年の師走の晦日に、

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに

今年もけふに果てぬとか聞く

と書いて送ったが、父の左大臣が事情を嗅ぎつけていよく逢わせないようにしたので、又次のように書いて送った。

いかにしてかく思ふてふことをだに

人づてならで君に語らん

季繩の少将の女子の右近と云う人とも、此の女がまだ宮中に奉公をしていた頃に云い交したことがあつたが、後に宮仕えを止めて里へ歸つてからは、ふつつり訪ねても来ないようになったので、女の方から、

忘れじと頼めし人はありときく

いひしことの葉いづちにけん

と云つてやると、矢張何とも返事はしないで、雉子を贈つてよこしたので、女が重ねて云つてやった。――

栗駒の山に朝たつ雉子よりも

かりにあはじと思ひしものを

此の外に、長男の助信の母に当る人で、参議源等の女子もいるが、なお敦忠集に、「はじめの北の方」と呼ばれている女や、「すけまさの母君」と呼ばれている女が見えるのは、前記の女たちの中の人々か別の人々かよく分らない。「すけまさ」と云うのは二男の佐理のことであるが、これはあの行成や道風と並び称せられた能書家の佐理とは違ふ。敦忠集に依ると、佐理の母は佐理を生んで死去したので、子は小母のところに預けられて、「あづま」と云う幼名で呼ばれていたが、あづまが二つになった時に敦忠がその子を見に行つて、たいそう泣いて、下のような歌を詠んだ。――

むつこともまだいひ出で別れにし

人のかたみはあづまなりけり

此のあづまの佐理が後に出家をしたことは、前に記した通りである。

その八

平中、時平、及びその子孫たちの後日譚はあらまし以上の如くであるが、あの可哀そうな老大納言と、彼が夫人在原氏の腹に儲けた子の滋幹は、その後どうなったことであろうか。

国経には滋幹の外に三人の男子があつて、尊卑分脈所載の順序に従えば、長男が滋幹、次男が世光、三男が忠幹、四男が保命となつてゐる。此のうち、忠幹の母は在原氏ではなく、伊豫守未並と云う者の女子としてあつて、此の後裔は後まで長くつゞいたらしいが、世光と保命には後がなく、且その母は誰であるとも記してない。しかし滋幹は、あの事件の時に五歳ぐらいであつたとすれば、老大納言が七十二三歳頃の子でなければならぬが、それ以後国経は八十一歳で死ぬ迄の間に、更に三人もの子を生ませたり、他の婦人と契つたりしたのであるうか。それとも尊卑分脈所載の順序は出鱈目で、世光以下三人の男子は滋幹より前か、同時ぐらいに生れた庶子で、世もあるのだろうか。そう云えば国経は、五十歳も年の違う在原氏を妻にする前には、誰かを妻にしていたのであろうが、その人には子がなかつたのであろうか。それらのいづくも不審については、今は何事をも明かにする手がかりがない。なお、滋幹は、尊卑分脈に従五位上左近少将と肩書がしてあつて、亮明、正明、忠明と云う三人の男子を儲けたことになっているが、此の子供たちの母も誰であるか分らず、且三人ながら跡が絶えていて、子孫がない。それに滋幹の名は、公卿補任等には全く見えていないので、彼がいつ従

五位になり、いつ左近少将になったのかは明かでなく、生年月日や歿年等も知るよしがない。尊卑分脈以外のもので滋幹に關した記事拾えば、大和物語に、

しげもとの少将に、女、

恋しさに死ぬる命を思ひいで、

とふ人あらばなしとこたへよ

少将かへし

骸にだに我きたりてへ露の身の

消えばともに契りおきてき

と云うのが見え、後撰集卷十一恋三の部に、藤原滋幹として、

宵に女にあひて必ず後にあはんとちかごとをたてさせてあしたに遣しける

千早振神ひきかけて誓ひてし

こともゆゝしくあらがふなゆめ

と云うのが見えるのが、普通に知られてゐるのであるが、此のほかに、餘り世間に読まれていないものに、適古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記がある。これは残缺で、適古閣本以外にも写本が二三あるようだけれども、何処にも完本は伝わっておらず、大体に於いて天慶五年の春頃から以後七八年の間に亘つて、折々書き継がれたらしく思われるものが、部分的に残っているだけであるが、その内容、殆ど全部が母を恋慕う文字で埋まつてゐるのである。

ところで、滋幹の生母は即ち敦忠の生母であることは読者も御承知の通りであるが、此の母はいつ頃まで生きていたのであろうか。われは拾遺集卷五賀の部所載源公忠の、「萬代もなほこそあかね」の歌の詞書に依つて、権中納言敦忠が母のために賀筵を設けたことがあるのを知り、その賀は多分五十の賀であらうことを推定

するのであるが、滋幹の日記を見ると、敦忠の死んだ明くる年、天慶七年にもまだ此の母はながらえていたのであって、それは実に、彼女の第二の夫であった贈太政大臣時平の死後三十五年の星霜を経て、彼女は当時六十歳前後、滋幹は四十四五歳に達していたであらう。滋幹がそう云う齡になつてもなお、母のことが忘れられず、折にふれては面影を想い浮かべてなつかしがつていたと云うのは、尤もな理由が存するのであって、昔、あの事件のあつた当座、五つ六つの幼童の頃にこそ彼も本院の館へ出入りすることを許されていたものゝ、七八歳になつた頃からは早くもさまざまな浮世の掟に制せられてそうも行かなくなつたらしく、その後ずつと、母が健在であることは聞き及びながら、親しく会う機会に恵まれずにいたのであつた。いったい誰の場合でも、母の顔を全く知らないのなら格別、頑是ない時分におぼろげながら母を見た記憶があり、而も間もなくその母が餘所の男の所へ走つてしまつたと云うようなことに遭つと、その子の母を思慕する情は尋常一様でないのであるが、況んやその母が世にも稀なる美女であつた場合、又況んや、よく物心のついた年頃に、今は他人の妻になつてゐる母の許を訪れたり、その母の手で腕へ歌を書かれたりした、異常な思い出を持つ場合に於いてをや、そして又況んや、その母が現に存命中であることが分つてゐる場合に於いてをや、である。かく考えて来れば、滋幹の日記が母恋しさの餘りに綴られた文章のような観があるのも道理であつて、現存しているのは断片的な部分々に過ぎないけれども、その他の部分も必ずや母への憧憬で埋まつてゐたことであらう。いや、事に依ると、滋幹は、四十二三歳に及んでから、いよく母を思う念が切になつて、生れて始めてこう云うものを筆にする氣になつたのではなからうか。實際それは、日記と云えば

日記であるが、幼くして母に生き別れ、やがて父に死に別れた少年時代の悲しい回想から説き起して、それより四十年の後、天慶某年の春のゆうぐれに、西坂本に故敦忠の山荘の跡を訪ねて、図らずも昔の母にめぐり逢う迄のいきさつを書いた、一篇の物語であると云つてもよいのである。

日記に依つて想像するのに、滋幹の母の記憶は、彼が四つぐらいの時から少しづつ残つてゐるらしいのであるが、最初の頃は極めておぼろげな、霞のように淡いものであるに過ぎない。彼は自分の身に取つても、父の国経に取つても、一生涯の大事件であつたあの夜のこと、——母が本院の大臣に連れて行かれた夜のことについては、何もおぼえていないのであつて、たゞいつからか、母がもう自分の家にはいないようになったことを、誰かに聞かされて、急に大變悲しくなつて泣いたのであつた。彼にその話をしてくれたのは、多分老女の讃岐であつたか、乳人の衛門であつたか、孰方かであらう。その時分、彼は夜なく乳人に抱かれて眠つたのであつたが、乳人は彼がいつ迄も母の名を呼んで泣き止まないのに当惑して、「さあ／＼、おとなしくお眠み遊ばせ。お母さまはこゝにはいらつしやいませんか、でも、そう遠くない所にいらつしやるのですよ。おとなしくしていらつしやれば、きつとお母さまの所へ連れて行つて上げますよ」

と、そう云つたので、幼い滋幹はたとえようもなく嬉しくて、

「ではいつ？」

と、聞くと、

「そのうちに」

と、云うのであつた。

「きつとだね」

「きつとでございます」

「きつと、きつと?——うそではないね」

こんな問答を毎夜のように繰り返しつゝ寝かされながら、乳人はあゝ云っているけれども、気休めに云うのであろうと、子供心に疑いを挟んでいたのであったが、それでも乳人はそのことについて讃岐と話し合ったものらしく、或る日ほんとうに、讃岐が彼の手を引いて母の所へ連れて行ってくれたのであった。が、幼童の記憶と云うものは全くたわいのないものなので、どう云う訳か、そんな大事の日のことを、まるきり彼は思い出すが出来ないのである。彼の記憶は古い映画のフィルムのようにきれいで、前後につながりのない場面ต่างๆが、或るものはぼんやりと、或るものは怪しいほどくつきりと、映像をとづめているのであるが、それらの数々の映像のうちで、今もしばく浮かんて来るのは、本院の館の、とある渡殿わたのだのの勾欄こうらんのもとにうずくまって、所在なさそうに前栽せんざいのけしきを眺めている自分の童姿であった。

彼はその渡殿の向うにある寢殿に、母が住んでいることを知っており、自分はその母に会うためにそこで待たされていたのであったが、いつも、やゝ久しく待っていると讃岐が出て来て、此方へ入らっしゃいと云う合図をした。母はめったに端近はしぢかいあたりへ姿を現わすことはなく、母屋おもやの奥の方の一と間に垂れ籠こめていて、彼が行くと必ず膝の上に載せて頭を撫で、頬ずりをしてくれるので、

「お母さま」

と云うと、

「和子わこ」

と云って、ぎゅつと抱きしめてくれるのであった。だが、それだけで、一と言ふ言やさしい言葉はかけてくれたけれども、しみぐ

とした話などを聞かしてくれることがなかったのは、まだ何を話しても理解の行かない年頃だったからであらうか。彼はたまにしか会えない母の顔を、そう云う折にすっかり見覚えて置きたかったので、抱かれながら仰向あおむいて見たが、残念なことには部屋が暗いのと、額から垂れたゆたかな髪が輪郭を覆い隠しているので、厨子ずしの中にある御佛みほとけを拝むようで、心ゆくまで見きわめたことはなかった。母のようにみめかたちのすぐれた人は稀であると云うことは、女房たちが噂うわさするのを聞いて知っていたので、うつくしいと云うのはこう云う顔のことなのかと思っではいたが、ほんとうにそうと得心とくしんが行っていたのではなかった。たゞ母の衣には、何と云うものか特別に甘い匂のする香が薫たきしめてあったので、じつと無言で抱きしめられている間が好い気持であった。そして家に帰ってから、なお二三日はその移り香が頬や掌てのひらや袂たもとなどに沁しみ着いていたので、母が自分の身に付き添うているように思えた。

幼年の彼が母をほんとうに美しいと感じたのは、あの、平中に掴つかまえられて腕に歌を書かれた時のことであつた。あれは渡殿の軒に近く紅梅が綻ほころびていたことを思うと、或る春の日のことであつたのは間違いないが、彼が西の対屋たいのやの簀子すのこのところで、一三人の女童めのわらわを相手に遊んでいると、大人の男がニコくしながら傍へ寄つて来て、

「もし、……もうお母さまにお会いになったんですか」

と、そう云って彼の肩へ手を置いたので、滋幹は、

「まだ、……」

と云おうとしたけれども、そんなことを云ってよいかどうか分らないので、黙ってその大人の顔を見上げた。彼はその大人の平中であつたことを後に至って知ったのであるが、でもその時も全然見覚え

のない人ではなく、前からたびく見かけたことのある顔であった。
「まだなんですね」

と、男は滋幹が不安そうにもじくしている様子を見て、大凡そ察したらしく云った。それから、あたりに気をかねながら、中腰をかぎめて、耳の端へ口を寄せて、

「和子は賢いお子ですね、ほんとうに賢いく」

と、そう云ってから、

「お母さまにお会いになるのですしたら、憚りながら、私がお願いしたいことがあるんですよ。……ねえ、和子、聴いて下さいませでしょうね」

「どんなこと？」

と、滋幹が云うと、

「あの、ちょっと、……」

と、背中の方へ手を廻して、女童たちのいる所から二三間離れた方へ連れて行って、

「お母さまに歌を差上げたいんですが、届けて下さいますか知ら」

滋幹は、自分が母に会うことは内證なのであるから、決して人にしやべってはいけなさと、讃岐や乳人に云いつけられていたので、返事に窮したためらっていると、男はしきりに、そう云う心配には及ばないこと、自分は和子の母上をよく知っているので、和子が取次をしてくれたら母上もきつと喜ばれるであろうことを、さまざまに言葉をかえて繰り返して云い、和子はそう云っても聞き分けのよい賢いお子であると、二た言目にはそれを云い添えた。最初は幼い子供を不安がらすまいと、努めて愛想笑いを浮かべて、あやすように云っていたのであるが、しやべっているうちにいつか真剣さの溢れた表情になり、どうにかして納得させようと一生懸命になって

いるのが、滋幹にも分った。普通そう云う時の大人の顔は、子供には恐いものなので、滋幹もいくらか脅やかされて薄気味悪く感じたのであったが、その半面に、さも思い詰めた、子供にも同情心を起させないでは措かないような哀願的な態度が見えた。

男は子供が頷いたので、又「賢いく」を云いながら、注意深くあたりを見廻して、

「ちよつと、ちよつと、……」

と、滋幹の手を曳いて、とある一と間の屏風の蔭へ引つ張って行った。と、その机に置いてあった筆を取って硯にひたと、

「じつとして下さいよ」

と云いながら、滋幹の右の袂を肩の方までまくり上げて、二の腕から手頸の方へかけて、考えく歌の文句を二行に書いた。

書いてしまつても、墨の乾くのを待つ間手を握つたまゝ放さずにいるので、まだ何かされるのではないかと云う気がしたが、墨が乾くと、まくり上げた袂をていねいにおろして、

「さあ、これをお母さまにお見せして下さい、誰も外の人のいないところで。……ようございますね、お分りになりましたね」

滋幹は点頭したゞけであったが、

「お母さまにだけお見せになるんですよ、ほかの人には何卒お見せにならないで」

と、男は重ねて念を押した。

それから多分滋幹は、いつものように渡殿で讃岐が合図してくれるのを待つてから、母に会いに行つたのであろう。そのところは記憶がうすれているのであるが、几帳のかげに這入って行って、膝の上に抱かれた時、

「お母さま」

と云つて、袂をまくつて見せたのであった。母はひと眼で直ぐに事情を悟つたらしかつたが、部屋が暗いので、几帳を押し除けて、外の明りを入れた。そして我が子を膝からおろして、明るい方へ腕を向けさせて、何度もくく繰り返して読んだ。滋幹は、誰がこれを書いたかとも、誰に頼まれたのかとも、母が一切そう云うことを尋ねないで、何も彼も分っているらしいのが不思議であつたが、ふと、眼の前をきらりと落ちたものがあるので、訝しみながら振り仰ぐと、母が涙を一杯ためてあらぬ方角を視詰めていた。母の容貌を心から美しいと思つたのは、その一瞬のことであつたが、それはちょうどその時に、春の日ざしの照り返しが、ともに母の顔の上にたゞよつていて、いつも奥深い暗いところばかり見ていた輪郭が、くつきり浮き出していたせいであつた。母は子供に氣付かれたと思うと、慌てゝ顔を子供の顔にびつたりと擦りつけたので、却つて何も見えなくなつてしまつたが、その代り睫毛にたまつていた涙の玉が子供の頬に冷めたく触れた。滋幹は、後にも先にも母の顔をまぎく／＼と見たのはその一瞬間だけであつたが、而もその時の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼きつけられて、生涯消えずにいたのであつた。母がそうして顔を押しつけていたのは、どのくらいの間であつたか、その間母は泣いていたのか、考へごとをしていたのか、等々のことも滋幹には思い出せないのであるが、やがて母は女房に半挿を持って来させて、滋幹の腕にある文字を拭つた。女房が拭い取ろうとするのを制して、母が自分で拭つたのであつたが、拭い取る時にいかにも惜しうに、一字々々、頭へ刻みつけるように視すえつゝ消した。それから母は、さつき平中がしたように我が子の袂をまくり上げて、左の手で彼の手を握り、前の文字を消したあとへ、前と同じくらいの長さに文字を走らした。

初めに滋幹が腕をまくつて見せた時は、母のほかには誰もいなかったのであるが、知らぬ間にそこへ女房が三人来ていたので、滋幹は平中に云われたことが氣にかゝつたが、でもその人たちは母に信賴されていて、總べてのことを知らされていたらしいのであつた。彼は母が自分の腕に字を書いたことはよく覚えていなければならない、母にどんなことを云われたかは覚えがなく、事に依ると、母は黙つてそれらのことをしていたようにも思えるのであつた。

母が文字を書いてしまふと、

「若様」

と、いつからか傍に来ていた讃岐が云つた。

「あのお方にお母さまの此のお歌を見せてお上げなさいませ。いえ、まだきつとその辺においでになります。さっきの所へ早くいらしつて御覽遊ばせ」

彼がそう云われて、西の対屋へ戻つて来ると、果してあの男が簀子のところに待ち構えていて、

「おゝ、何か御返事があつたでしょうか。——おゝおゝ、賢い／＼」

と、跳び着くように寄つて来て、わく／＼した口調で云つた。

滋幹は後に、その時の自分が母と平中との間に恋の取次をしたのであること、自分は平中に利用されたのであつたこと、等を知つたのであるが、少くとも当時、母の側近に仕えていた女房たちと讃岐だけは、そのことを知つていたのであろうし、ひよつとしたら、讃岐こそ平中の同情者であつて、母との間の連絡に滋幹を利用することを平中に教えたのも、彼女であつたかも知れない。なぜなら、それとはつきりとは覚えていないのだけれども、滋幹が又あの屏風のあの部屋へ連れ込まれて、母の筆の跡を平中に示した時、たしかその

場に讃岐が居合わせたのみならず、これを消すのは勿体もったいのうございますねと云いながら、文字をきれいに拭ふいてくれたのも、どうやら彼女であつたような気がするのである。

腕へ文字を書かれたのはその時一遍だけであつたか、それからも二遍そんなことがあつたか、そのところはおぼろげであるが、その後も西の対へ行くと、平中がうろくしていて、彼を呼びとめて文を托たくしたことはあつた。滋幹がそれを持って行くと、母は返事を書いたこともあり、書かなかつたこともあつたが、だんく最初の時のような感動を示さないようになり、厭いとわしいと云う顔つきをすることもあつたので、しまいには彼は平中に使を頼まれるのを迷惑に感じた。そして平中も、いつか姿を見せなくなったのであるが、間もなく滋幹も母に会うことが出来ないようになった。それは乳人が母の館へ連れて行くことを控えるようになったからで、母に会いたいと滋幹が云うと、お母さまはもう直じき赤ちゃんがお生れになるので、今は引き籠こつていらつしやるのです、と云つたりした。その頃母はほんとうに妊娠したのであつたらしいが、滋幹の出入りすることが禁ぜられたのは、外にも故障が起つたらしいのであつた。こんな風にして滋幹は、それきり母の姿を見ることがなかつた。彼に取つて「母」と云うものは、五つの時にちらりとみかけた涙を湛たえた顔の記憶と、あのかぐわしい薫物たきものの匂の感覚とに過ぎなかつた。而もその記憶と感覚とは、四十年の間彼の頭の中で大切に育はぐまれつゝ、次第に理想的なものに美化され、浄化されて、実物とは遙かに違ったものになつて行つたのであつた。

滋幹の父に関する思い出は、母のそれに比べると晩おそく、いつから記憶が始まっているか確かでない。が、多分その時期は彼が母に会えなくなつた頃からであらう。それと云うのが、そうなる迄は父に接

触する折がめつたになく、それから後に父の存在が急にはつきりして来たからであつた。彼のおぼえている父は、徹頭徹尾、恋しい人に捨てられた、世にも気の毒な老人と云う印象に盡つくきるのであるが、そう云えば一体、我が子の腕にある平中の歌に一掬いっくの涙を惜しまなかつた母は、父と云うものをどう思つていたのであらうか、滋幹はついぞ母からそれを聞かされたことはなかつた。彼は几帳いさづかのかげで母の膝に抱かれた時、自分の方からも父のことを云い出したことはなかつたが、母も、お父さまはどうしていらつしやる、と云うようなことを、嘗かつて一度も問うたことはなかつた。それに、あの讃岐にしても、外の女房たちにしても、平中には妙に同情していたらしいのに、国経のことは誰もあまり口にした者はなかつたが、その中で乳人の衛門だけが例外であつた。

その九

乳人は滋幹に、若様がお母さまをお慕いになるのは御尤もですが、ほんとうにおいとおしいのはお父さまでございますよ、と云い、お父さまは淋しがっておいでずから、大切に、慰めてお上げにならなければいけませんよなど、も云った。彼女は別段母を悪くは云わなかったが、平中とのことを知っていて、彼と母との媒介をする讃岐に対しては反感を持っていたようであつた。そして、滋幹までがその媒介に利用されていることに気がついてからは、いよく讃岐を憎み出したようであつたが、滋幹が母の館へ行けないようになったのは、或はそんな関係から乳人が左様に取計らつたのでもあろうか。若様がお母さまに会いにいらつしやるのは致し方がございせんが、人に頼まれてお取次などをなさつてはいけませんよ、と、滋幹は乳人にそう云われて、恐い眼で睨まれたこともあつた。母が亡くなつてからの父は、出仕を怠っている日が多く、晝間から一と間に閉じ籠つて病人のようになっていることがしばしばであつたし、餘所目にもひどく憔悴して、鬱々としているように見えたので、そう云う父が子供にはひとしお薄気味悪く、近づきにくい感じがして、なかく慰めに行くどころではなかつたのであるが、お父さまはお優しい人なのですよ、若様が行つてお上げになればどんなにお喜びになりますことか、と、乳人は云つて、或る日滋幹の手を執つて、父の部屋の前まで引張つて行き、さあ、と、障子を開けて無理に中へ押し込んだことがあつた。もとから痩せていた父

は、一層痩せて眼が落ち窪み、銀色の鬚をぼうくと生やして、今まで臥ていたのが起きたところらしく、狼のような恰好をして枕もとにすわつていたが、その眼でジロリと見られた途端に、滋幹は体がすくんで、口もとに出かゝっていたお父さま、と云う声が、咽喉の奥に痞えた。

親子はしばらく、互に眼で探りを入れながら見合っていたが、でもそのうちに、滋幹の心を壓していた恐怖感が次第に和らいで、或る云い知れぬ甘いなつかしい感覚に代つた。それが何に原因するのか、滋幹にも最初は分らなかつたが、間もなく彼は、あの、母が常に薫きしめていた薫物の香が、此の部屋の中に満ちくゝていることに氣づいた。そして、よく見ると、父がすわっているあたりに、むかし母が身に着けていた桂や、単衣や、小袖や、さまざまの衣裳が取りちらかしてあるのであつた。と、突然父が、

「和子はこれを覚えてゐるかね」

と云いながら、鉄の棒のようにコチくした腕を伸ばして、花やかな一枚の衣の衿をつまんだ。

滋幹が傍へ寄ると、父はその衣を両手で捧げるようにして滋幹の前へ突き出したが、次にはそれに自分の顔を押しあて、長い間身動きもせずにした。それから漸く顔を上げると、

「和子もお母さんに会いたいだらうね」

と、しんみりした、同感を求めるような口調で云つた。滋幹は父の容貌を、それほど仔細に見たことはなかつたのであるが、眼のふちには眼やにが溜り、前歯があらかた脱け落ちていて、そのうえ声が皺喰れているので、何を云うのか、ちよつとは聞き取りにくかつた。それに、父はそんな風に云うのだけれども、その顔は笑つてもいなければ泣いてもいながかつた。たゞもう一途な、執心の強い

生真面目な表情で、じつと此方の眼の中を視すえているので、滋幹は又気味悪くなつて来て、

「うん」

と、頷いたきり立っていた。すると父はだん／＼深く眉根を寄せ

て、

「もうよい、彼方へおいで」

と、不機嫌そうに云い切った。そんなことがあつてから、又滋幹は当分父の傍へ寄り着いたことはなかつた。お父さまは今日もお内にいらつしやいますよ、と云われると、却つて父の部屋の方へは行かないようにしたくらいであつたが、父は一日閉じ籠つて、殆ど姿を見せないのであつた。たま／＼部屋の前を通り過ぎる時、耳をすまして中の様子を窺つても、生きてゐるのか死んでゐるのか、コトリとの音も聞えなかつたが、恐らく此の間のように、母の衣裳の数々を取り出して、そのなまめかしいかおりの中に埋まつてゐるのであらうと、滋幹は推した。

その／＼、その同じ年であつたか、明くる年であつたか、晴れた秋の日の爽やかな午過ぎに、父が珍しくも前裁に出て、萩がたわ／＼に咲いてゐる遣り水のほとりに、ぼんやりと石に腰かけていたことがあつた。滋幹はその時ほんとうに久振に父を見かけたのであつたが、そうして石に憩うてゐる父の恰好には、長い道中を歩いて来て、くたびれ切つて道ばたに休んでいる旅人のようなところがあった。衣服などもひどく垢づいて、よれ／＼になつていて、袂や裾が綻びたりちぎれたりしてゐたのは、もうその時分、身の周りの世話をする女房などがいなくなつてゐたのか、いてもそう云う女たちに手を触れさせることを厭つたのであらう。滋幹は、少しく傾きかけた日があかくと父の半身を照らして、痩せ衰えた頬がつや

／＼にかゞやいてゐるのを見ながら、それでも敢て近寄らうとはせず、五六歩離れてゐると、父が小声で何かぶつ／＼呟いてゐるのが聞えた。

その、呟いてゐるものが、普通の言葉ではなくて、何かの文句に節をつけて、口のうちに暗誦してゐるのであるらしいことは察しられたが、滋幹が傍で聞いているのには全く気が付かないかのように、何となく水の面へ眼を落して、同じ文句を二三遍も繰り返してゐたかと思うと、

「和子」

と云つて、やつと少年の方を向いた。

「わしは和子に此の詩を教えて上げる。此れは唐土の白楽天と云う人の作つたもので、子供にはむずかし過ぎて意味が分らないであらうが、そんなことはどうでもよい。わしが云う通りに覚えさせたらよいのだ。今に和子が大人になったら、自然に分る時が来る」

滋幹は、

「さ、こゝへおかけ」

と云われて、父と並んでその石の端へ腰をかけた。父は最初、子供に覚え易いように、一句ずつ句切つてゆつくりと云い、滋幹が一句を唱え終るのを待つて次に進むようにしたが、そうしてゐるうちにだん／＼教えてゐると云う心持を忘れ、己れの感情の赴くまゝに声を張り上げ、抑揚をつけて朗吟し出した。――

失うて庭の前の雪となり

飛んで海の上の風に因る

九霄応に侶を得たるなるべし

三夜籠に帰らず

声は碧の雲の外に断え

影は明けき月の中に沈む

郡齋これより後は

誰か白頭の翁に伴はん

滋幹は他日成長してから、此の詩が白氏文集にある「鶴を失ふ」と云う題の五言律詩であることを発見したので、当時は何のことが解し得なかったのであるが、しかし此の文句はそれから後も、父がたびく酒に酔っては口号んでいたことがあるので、耳に胼胝が出来るほど聞かされたものであった。今になって考えれば、父は逃げ去った母を鶴になぞらえ、悶々の情を此の詩に托していた訳であるが、父がこれを吟ずる時の悲痛な声の調子を聞けば、子供心にも父の胸にある断腸の思いが自分に伝わりて来るのを感じた。前にも云うように、父の声は皺喰れていて高い音が出せなかったし、息切れがするので声を長く引くことも出来なかった。その吟じ方は技巧的には拙劣であったが、「九霄応に侶を得たるなるべし」と云う句、「声は碧の雲の外に断え、影は明けき月の中に沈む」と云う句、「誰か白頭の翁に伴はん」と云う句などを誦する時は、技巧を超絶した凄愴な実感が籠って、そぞろに人を動かさないでは措かないものがあつた。

父は滋幹がその詩を暗誦し得るようになったのを見て、

「それが覚えられたら、もっと長いのを教えて上げよう」

と云つて、もう一つ、ほんとうに前のよりはずっと長いのを授けてくれたが、それは「我念ふ所の人あり」と云う「夜雨」の詩であつた。――

我念ふ所の人あり

隔たりて遠きく郷にあり

我感ずる所の事あり

結ばれて深きく腸にあり

郷は遠くして去くことを得ざれども

日として瞻望まざるることなし

腸は深くして解くことを得ざれども

夕として思ひ量らざるることなし

況んや此の残燈の夜に

独り宿りて空堂にあるをや

秋の天殊に未だ暁けず

風と雨と正に蒼々

頭陀の法を学ばざれば

前よりの心安んぞ忘る可けん

此の終りの句の、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘る可けん」と云う言葉を、父はやゝもすれば独語のように詠じていたが、それから間もなく佛道に心を傾けるようになったのは、恐らく此の句などに影響されたせいであろう。なお滋幹は、何と云う題の詩か不明であるが、「夜深うして方に独り臥したり、誰が為めにか塵の牀を払はん」「形羸れて朝食の減ずるを覚ゆ、睡り少うして偏へに夜漏の長きを知る」「二毛暁に落ちて頭を梳ること懶し、両眼春昏くして薬を点すること頻りなり」「須く酒を傾けて腸に入るべし、酔うて倒るゝも亦何ぞ妨げん」等々、いろいろとそれに似たような句があつたことを、きれぐに覚えていたのである。父はそれらの句を、悄然として庭の片隅にイミながらこつそり吟誦していることもあり、人を遠ざけて独りで酒杯を挙げながら、感極まった声を放つて泣いて謡っていることもあつたが、そんな折には父の両頬に涙が縷々と糸を引いていた。その時分、讃岐はいつからか館にいないようになっていたのであ

るが、思うに彼女は母が逃げ去ると間もなく、自分も父を見限って母の方へ身を寄せたものではあるまいか。滋幹の記憶する限りでは、乳人の衛門が滋幹のことも父のことも、何くれとなく面倒を見てくれていた。どうかすると彼女は、頑^{がんぜ}はない滋幹をたしなめるのと同じ口調で父をたしなめたりしたが、彼女が最もやかましく云ったのは父の飲酒のことであつた。

「お年を召して、外には何もお楽しみがあまりにならないのでございますから、少しはお宜^{よろ}しゅうございますけれども、……」
乳人がそんな風に云うと、父はしおくと、子供が母に叱^{しか}られたようにうなだれて、

「心配をかけて済まないな」

と云いながら、大人しく聴^{おとな}いているのであつた。全く、老年に及んでいとしい人に背^{そむ}かれた父が、前から好きであつた酒を一層嗜^{たしな}むようになり、それを唯一の伴侶とするに至つたのは是非もないことだけれども、その酔い方がだんく狂暴に、常軌^{じょうぎ}を逸するようになって行つたので、乳人が案じるのも無理はなかつた。父は乳人に諫^{いさ}められると、その時は素直に詫^{はな}びるのであるが、その日のうちに直ぐもう正体もなく酔いしれると云う有様で、詩を吟じたり、泣き喚^{なみ}いたりするくらいはまだしも、夜中にふらくと何処^{どこ}かへ出て行つて、二三日も帰つて来ないことがしばく^くだつたので、
「何処へおいでになつたのでしょうか」

と、乳人や女房たちが額^{あつ}を鳩めて相談しながら溜息をついたり、それとなく人を出して搜索させたりしていることも珍しくなかつた。滋幹もそんな時には、子供は子供なりに胸を痛めたものであつたが、二三日すると、夕方にひとりでひよっこり帰つて来たこともあり、誰も気が付かぬうちに、部屋に戻つて臥^ねていたこともあり、人に見

付けられて連れて来られたこともあつた。一度などは、都を離れた遠い野末^{のすえ}に行き倒れていたのを捜し出されたとやらで、戻つた時の姿を見ると、髪は乱れ、衣は破れ、手足は泥にまみれて、乞食坊主^{こじきぼうず}のようになっていた。乳人は呆^{あき}れて、

「まあ」

と云つたきり、涙をぼろく零^{こぼ}しているばかりであつたが、父も極まり悪そうに下を向いて何も云わず、こそくと部屋へ逃げ込んで、夜着^{よぎ}に顔を埋めてしまった。

「あんな風にしていらつしやったら、しまいにはほんとうに氣狂いにおなり遊ばすか、体をお損じ遊ばすか、……」

と、乳人は陰で云い暮らしていたが、そう云う父が、それほど溺愛^{できあい}していた酒を、或る時からふつり止めてしまつたのであつた。

滋幹は、父がどう云う動機から酒を断^たつに至つたのか、その間の事情^{つまひら}を詳かにしないのであるが、彼がそれに氣が付いたのは、
「お父さまは近頃殊勝^{しゆしやう}におなりなされて、一日しずつにお経を読んでいらつしやいます」

と、乳人が彼に語つたことがあるからであつた。思うに父は、母恋しさに堪えかねて、酒の力で紛^{まぎ}らそうとしたのであつたが、酒では到底紛^{まぎ}らしきれないことを感じて、佛の慈悲に縋^{すが}ろうとしたのであるか。つまり、「頭陀の法を学ばざれば、前よりの心安んぞ忘るべけん」と云う白詩^{はくし}の示唆^{しそ}に従つた訳なので、それは父の死ぬ一年ほど前、滋幹が七つぐらいの時のことであつた。その時分になると、父はもう狂暴性がないようになり、終日佛間^{ぶつま}にいて、冥想^{めいそう}に耽^{ふけ}るとか、看經^{かんきん}するとか、何処かの貴い大徳^{だいとく}を招いて佛法の講義を聴^{ちやうもん}聞^{もん}するとか、云うような日が多くなつたので、乳人や女房たちは愁眉^{しゅうみ}を開いて、どうやら殿も落ちついておいでになつた、あの

御様子なら安心ですと云って喜んでいたのであったが、しかし滋幹には、そうなるからでも矢張何となく近づきにくい、薄気味の悪い父であることに変りはなかった。

乳人はよく、佛間が餘りひっそりしていることがあると、

「若様、お父さまの所へいらして、何をなすっていらつしやいますか、そうつと覗いて御覽遊ばせ」

と、そう云ったので、滋幹が恐るゝ佛間の前へ行つて、^{しきいざわ} 鬨に^{ひやます} 跪いて、音を立てぬように障子に手をかけて、一寸ばかりするゝと開けて見ると、正面に普賢菩薩の^{えぞう} 絵像を懸け、父はそれに向い合つて寂然と端坐していた。滋幹の方には後姿しか見えないのだけれども、暫くじつと窺^{うかが}つていても、父は経を読むのでも、書を繙^{ひもと}く^{ひもと}のでも、香を薫^たく^たのでもなく、たゞ默然と坐っているだけなので、

「お父さまはあゝして何を^{して}いらつしやるの？」

と、或る時乳人に尋ねると、

「あれは、不浄観^{ふじようかん}と云うことをなすっていらつしやるのです」と、乳人が云った。

その不浄観と云うのは大変むずかしい^{りくつ} 理窟のあることなので、乳人にも委^{くわ}しい説明は出来ないものであったが、要するに、それをする^と、人間のいろゝな官能的快樂が、一時の迷いに過ぎないことを悟るようになる、そして、今まで恋しいゝと思つていた人も恋しくなくなり、見て美しいとか、食べておいしいとか、嗅^かいで^{かんば} 芳^{かんば}しいとか感じた物が、実は美しくも、おいしくも、芳しくもない、汚^{けがら}わしい物であることが分つて来る。お父さまは何とかしてお母さまのことをお諦^{あきら}めにならうとして、その修^{しゆぎやう}行^{ぎやう}をなすっていらつしやるのですよ、と云うのであった。

そう云えば滋幹は、父について生涯忘れることの出来ない或る恐ろしい思い出を持つていたのであるが、それはちょうどその前後のことであつた。その頃父は幾日間も、晝夜の別なく静坐と沈思をつづけていて、いつ食事をし、いつ眠るのであるうかと、滋幹は不審に堪えかね、夜中乳人に気付かれぬように寢間を忍び出て、佛間のところへ行つて見ると、障子の中にはかすかに燈火がもつてい、父は晝間と同じ姿勢で坐っていた。例の如く隙間から覗^{のぞ}いていた滋幹は、いつ迄たつても父の姿が彫像のように動かないので、再びそつと障子を締めて、部屋へ戻つて寝てしまつたが、その明くる晩も氣になつて覗きに行くと、依然として父は昨夜の通りにしていた。が、たしか三日目の夜中のこと、又しても好奇心に駆られて、足音をさせないように爪^{つま}先^{さき}立^だてゝ歩いて行つて、障子をいつも程に細目に開け、じーっと息を凝^こらしていると、燈台の灯^ほ先^{さき}が風の無いのにゆら／＼としたと思つた途端に、父が俄^{にわ}かに両肩を揺がして、身じろぎをした。父の動作は甚しく緩慢なので、どう云う目的で動き出したのか最初は察しが付かなかつたが、やがて、片手を床につき、非常に重い物を引き扛^あげるような息づかいをして、自分の身をそろ／＼と真つすぐ起して、立ち上るのであつた。老年の結果、それでなくても立ち居がのろくなっているのに、長い間端坐の形を崩さずにいたので、そう云う風にしなければ急には立てなかつたのであろうが、さて立ち上ると、よろけるように歩きながら部屋の外へ出るのであつた。

滋幹が訝^{あや}しみながら跡をつけると、父は脇目もふらずに前方を視つめ、^{きざはし} 階^{きざはし}を下りて、金剛草履^{こんかうぞうり}を穿^はいて、地上に立つた。月が皎々^{こうこう}と冴^さえていたのと、そこらに虫の音が聞えていたのとで、季節が秋であつたことは確かであるが、つゞいて庭に下りた滋幹は、自分も

あり合う大人の草履を突っつけたけれども、足のうらが冷えくとして、水の中を涉わたっているような感じがし、月の光で地面が霜を置いたように真つ白だったので、冬ではなかったかと云う氣もするのである。父が歩くにつれて、地上にくっきり映っている父の影が揺れて行つたが、滋幹はそれを踏ふまないように可かなり離れて附いて行つた。父がうしろを振り返つたら見付けられたかも知れなかったが、父の様子は、歩きつゝなお冥想に沈んでいるような工合で、いつの間にか館やかたの門を出て、何かはつきり目指すところがあるらしく、すうつと歩いて行くのであった。

八十歳の老翁と七八歳の幼童の足であるから、そう遠くまで行つたのではないであろうが、それでも相当の道のりを来たように滋幹は感じた。彼は父からはずっとおくれて見え隠れに跡をつけたが、深夜の路上には親子の外に全く人影が絶えていたし、父の姿が遙かに白く月光を反射していたので、見失う恐れはなかった。路は、初めはいかめしい築地つじの邸がづいていたのが、だんくみすばらしい網代あじろの塀へいや、屋根に石ころを置いた佗わびしい低い板葺いたぶきの家などになつたが、それも次第に疎まばらに、ところぐに水たまりだの空地だのが多くなり、芒すすきやその他の秋草が丈高く伸びていたりした。そしてそれらの叢くさむらにすだく虫の音が、二人が近づくとふっと止み、遠のくと又鳴き出しながら、町はずれへ行けば行くほど雨のようにしげく喧かまひすしくなつて行つた。そのうちに、家が一軒もなくなつて、見渡す限りぼうくと草の生えた中に、細い野道がひとすじうねっている所へ出た。一本道であるけれども彼方あちらへ曲り此方こちらへ曲りしている上に、草が人間の背よりも高く、父の姿がときぐそれに没してしまうので、今度は滋幹は一二間の距離まで近寄つて行つたが、両側から路の方へ蔽おほいかぶさっている草を掻き分けなが

ら行くので、袂たもとも裾すそもしたゝか露に濡れて、つめたい雪しずくが襟もとまで沁み入るのであった。

父は、小川に橋のかゝつた所へ来ると、それを渡つて、なお真つ直ぐにつづいている路の方へは行かないで、川のふちへ降りて、少しばかり河原のようになつている砂地を、川下の方へ歩き出した。と、橋から一丁ばかり下のちよつと小高く盛り上つた平地に、土饅頭どまんじゅうが三つ四つ築いてあつて、それらはいずれも土が柔かで新しく、頂上に立て、ある卒塔婆そとばも真つ白な色をしており、折柄の月に文字まではつきり分るのであった。卒塔婆を立てないで、代りに小さな松杉などを植えたのもあり、土饅頭でなく、柵さくで囲つて、石を積み上げて、五輪の塔を据えたのもあり、簡単なのは、屍体を一枚の莛むしろで蔽うて、しるしの花を供えたゞけのものもあつたが、中には又、此の間の野分のわきで卒塔婆が倒れ、土饅頭の土が洗われて、屍体の一部が下から露出しているのもあつた。

何かを捜し求めるように土饅頭の間をうろくしている父の跡から、滋幹は殆ど踵かかを接するくらいに附いて行つたが、父は附けられていゝことを意識しているのかいないのか、さつきから一度も振り返つたことがなかった。屍骸しがいの肉を食むさつていたらしい犬が一匹、不意に叢くさむらの間から跳び出して慌てゝ何処かへ逃げ去つたが、父はそんなものにも眼もくれなかった。彼が何かしら異常に緊張し、それに精神を打ち込んでゐるらしい様子は、後姿からでも判断が出来た。そして、程なく滋幹は、父の足が止まつたので、自分もピタリと歩みをとゞめた瞬間に、体じゅうが総毛そうけだ立つものを眼前に見た。

月の光と云うものは雪が積つたと同じに、いろくりんのものを燐りんのような色で一様に塗り潰つぶしてしまうので、滋幹も最初の一刹那せつなは、

その地上に横わっている妙な形をしたものゝ正体が掴めなかったのであるが、瞳を凝らしているうちに、それが若い女の屍骸の腐りたぐれたものであることが領けて来た。若い女のものであることは、部分的に面影を残している四肢の肉つきや肌の色合で分ったが、長い髪の毛は皮膚ぐるみ鬘のように頭蓋から脱落し、顔は押し潰されたとも膨れ上ったとも見える一塊の肉のかたまりになり、腹部からは内臓が流れ出して、一面に蛆がうごめいていた。晝を欺く光の下でそう云うものを見た凄じさは、凡そ想像に難くないが、滋幹は恐さに顔を背けることも、身動きすることも、まして声を発することも出来ず、その光景に縛りつけられたようになって立っていた。が、父はと見ると、しずかにその屍骸に近寄って、まず恭しく礼拝してから、傍に置いてある筵の上にすわるのであった。そして、さつき佛間でしていたように凝然と端坐して、ときぐ屍骸の方を見ては又半眼に眼を閉じて沈思し出したのであった。

その時月はひとしお研ぎすまされたように冴え、四辺の寂寞は前より一層深まっていた。風がおりくかすかに渡って、すゝきがざわ／＼する外には、虫の音が際立ってひびくばかりであった。そう云う中でひとり影の如く孤坐している父を見ることは、何か奇怪な夢の世界に引き入れられた感じであったが、でもあたりには鼻を衝く屍臭が瀰漫していたので、そのために滋幹は否応なしに現実の世界へ呼び戻された。

此の、滋幹の父が女の屍骸を見た場所と云うのは、何処のことか明かでないが、蓋しその頃の京都の街には、こう云う風な屍骸の捨て場が方々にあったのであろう。当時は痘瘡とか麻疹とか云う疫癘が流行って死人が多く出たりすると、一つには伝染を恐れるのと、

一つには処置に困るのとで、何処と云うことなく、空地があれば病人の屍骸を運んで行って、しるしばかりに土をかけたり、筵で蔽うたりして葬ったものらしいので、これもそう云う場所であったかと察しられる。

その十

父がその屍体と相對して冥想に耽つていた間、滋幹はとある塚のうしろに蹲踞^{つづくま}つて息を詰めていたのであつたが、中天にあつた月がやゝ西に傾き、彼が身を隠していた一と束の卒塔婆^{そとば}の影が地上に長く横^{よこた}わるようになった頃に、父は漸く立ち上つて歸路に着いた。滋幹は又、来た時と同じ路を、跡を追つて行つたのであるが、彼が思いがけなく父から声をかけられたのは、さっきの小川の橋を渡つて、すゞき原へさしかゝつた時であつた。

「和子^{わこ}、……和子は今夜、わしが彼処で何をしていたと思う？」父はひとすじ路^{みち}の途中で、今歩いて来た方へ向き直つて立ち止まり、滋幹が後から来るのを待ち構えていたのであつた。

「わしは和子が跡を附けていたのを知っていたのだよ。わしは少し考があつて、わざと和子のするようにさせていたのだ。……」そう云つても滋幹が黙っているの、父は一段と声を和^{やわ}げ、優しみのある調子でつづけた。

「ねえ、和子、わしは和子を叱る訳ではないのだから、正直に云つて御覧。和子は今夜のわしのした事を初めから見ていたのだろうね」滋幹は、

「うん」

と頷^{うなず}いて見せてから、

「お父さまのなさることが心配だったものですから、………」と、言訳^{いいわけ}のつもりで附け加えた。

「和子はわしが気が狂つたとも思つたのだね」

父は可笑^{おか}しがるような口元をして、はつ、はつ、と力なく笑つたようではあつたが、その声はあまり微^{かす}かなので聞き取れなかつた。

「和子ばかりではない、皆がそう云う風に思っているようだね。……しかしわしは氣狂いではないのだよ。わしのしていることには訳があるのだ。和子が安心するように、その訳を聞かして上げてもよいのだが、……どうだな、聞いてくれるかな。………」

そう云つて、父はそれから館^{やかた}へ歸る途々、滋幹と並んで歩きながら次のようなことを語つて聞かしたのであつた。当時の滋幹には勿論それの要^{えとく}だけでも会得出来よう筈はなかつたので、彼が日記に書き留めているのは、父の語つた言葉そのまゝではなくて、後年、大人になつてからの彼の解釈が加わつているものなのであつて、それは要するに、佛家が云うところの不浄觀のことであるが、筆者も佛教の教理には暗いので、誤りを冒^{おか}すことなく伝え得るかどうかわ^{おぼつか}覚束ない。筆者は此のことで、日頃眷顧^{けんこ}を蒙^{こうむ}っている天台宗の某碩^{せき}学^{がく}などにも尋ね、参考書なども貸して戴いたのであるが、調べ出すといよゝ深奥^{しんおう}で分りにくくなるばかりである。尤^{もつと}もこゝではそんなに深く説き及ぶ迄もないのであるから、たゞ順序として、物語の進行に必要な面にだけ触れて置こう。

不浄觀のことが分り易い仮名交り文で書いてある書物は、他にもあるかも知れないが、筆者が知っているのでは、世に慈鎮和尚の著とも云い、又勝月房慶政^{しょうげつぼうけいせい}上人^{しやうじん}の著とも云う「閑居の友」がある。

此の書は往生伝^{わうじょうでん}や発心集^{はつしんしゅう}に洩れている往生發心者の伝記、名僧智識の逸話等を集録したもので、その巻の上の、「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄觀をこらす事」、「あやしのをとこ野はらにてかばねを見て心をおこす事」、「からはしかはらの女のかばねの事」、

その巻の下、「宮ばらの女房の不浄のすがたを見る事」等を読めば、不浄観と云うのがどう云うことか大凡その見当はつくのである。

今、同書に拠つて一例を挙げると、こゝにこんな話がある。――

昔、比叡山ひえいざんの或る上人のもとに召使ちゆうげんわれている中間僧ちゆうげんがあつた。

僧とは云うが寺男のような者で、上人に仕えていろいろな雑用を勤めるのであつたが、平素主人を大切に、云いつけたことは一事をも違えず、まことに忠実な性質だったので、上人も少からず信頼していた。かくて月日を送るうちに、此の男が毎日々刻になると何処かへ行って見えなくなり、明くる朝早く帰つて来るようになった。それを知つた上人は、多分夜なく坂本へでも通うのであらうと思つて、内心その男を甚しく憎んだ。彼が朝帰つて来る時の様子を見ると、何となく打ち沈んでいて、人と顔を合あわすのを厭いとう風があり、いつも涙ぐんでいるので、大方通う所の女が心のまゝにならないのであらう、きつとそうに違ちがひないと、上人を始め皆がそれにきめていた。然しかるに、或る時上人が使を遣やつてその男の跡をつけさせると、男は西坂本（江州の坂本ではなく、比叡山の西側の山麓、即ち現在の京都市左京区一乗寺いちじょうじ辺）を下つて蓮台野れんだいのへ行くのであつた。使は合点が行かないで、何をするかと窺うかがつてみると、彼方かなた此方こなたを踏み分けて行つて、云いようもなく腐りたゞれた死人の傍に寄つて、或は眼を閉じ、或は眼を開いて祈念を凝らし、たびくそれを繰り返して、暁の鐘の音が聞える頃に、漸く涙を押し拭ぬぐうて帰るのであつた。使者は自分も感激して涙を流しながら戻つて来たので、どうであつたと上人が尋ねると、さあ、その事でございます、あの男がいづも打ち沈んでしおくとしていましたのも道理でございます、実

はこれくしかくの次第で、夕暮になると見えなくなりますのも、そのためだったのでございます、あゝ云う貴い聖ひじりの行いをしていた人を、妄みだりに疑つた罪の程も恐ろしゅう存ぜられまして、と云うので、主の上人も驚いて、その後はその中間僧を敬うて、常人のように扱あつかひなかつた。すると或る朝、食事に粥かゆをこしらえて持つて来たので、あたりに人がいないのを見すまして、お前は不浄観を凝らすことがあると云う噂だが、ほんとうかね、と尋ねると、どう致しまして、左様なことは学問のある偉いお方がなさることです、私がそのようなことの出来る人間かどうか、様子でもお分りでございますしやう、と云うのであつた。上人が重ねて、いや、お前のことは今では皆知つてゐる、愚僧もかねぐ心のうちではお前を貴くも有難くも思つてゐたのであるから、隠さず云つてくれるがよい、と云うと、左様ならば申しますが、と云つて、実は何事も深くは存じませぬけれども、少しばかり心得ていることがございます、と云う。定めし験げんがあるであらうな、試ためしに此の粥を観じて見せよ、と云うと、男は折敷おしきを取つて粥の上に蓋ふたをして、暫時眼を閉じて観念を凝らしていたが、やがて蓋を開けると、粥が悉ことごとく白い虫に化していた。それを見た上人はさめぐと泣いて、必ず我を導き給たまへと、男に向つて掌たなごころを合あわせた。

――以上が、「あやしの僧の宮づかひのひまに不浄観をこらす事」の説話であつて、「閑居の友」の著者は此のあとに、「いとありがたく侍りける事にこそ」と云つて、説明を加えて云うのに、愚かな者でも、塚のほとりに行つて乱れ腐つた死人のむくろを見れば観念くわんねんが成就じやうじゆし易やすいと云うことは、天台大師も次第しだい禪門ぜんもんと云う文に説いておられるくらいであるから、此の中間僧もそれを学んだのであらう。摩訶止観まかしくわんの中には、観のことを説いて、「山河も皆不浄也、く

ひものきもの又不浄也、飯は白き虫の如し、衣は臭き物の皮の如し」と云つてあるが、かの中間僧の観念のいみじきは、自然と聖教の文に合致しているのである。又天竺の佛教比丘も、器物は髑髏の如し、飯は虫の如し、衣は蛇の皮の如しと説き、唐土の道宣律師も、器はこれ人の骨也、飯はこれ人の肉也と説いておられるのであるが、かような人々の説き給うことなどを知る筈のない無学の僧が、その教を実行していたと云うのは、何とも頼もしい限りである。人はたとひ此の中間僧のような境地には至り得ない迄も、そう云う道理が分り出して来たら、五慾の思いがだん／＼に薄らいで、心の持ち方が改まるであらう。――「此のことわりを知らぬもの、

こまやかなる味はひには貪慾の心も深く起り、おろそかなる味はひ落ちぶれたる衣には瞋恚の思ひ浅からず、よしあしは変れども、輪廻の種となることはこれ同じかるべし。(中略) それにつけてもあはれ無益に侍るべきかな、夢のうちのかりそめのこと故に、永き世に眠らんこと、辛くぞ侍るべきなど思ふべきにや」と云つてゐる。

「あやしの男野原にてかばねを見て心をおこす事」と云うのも、大体同じ趣意の教訓を含んだ説話であつて、或る男が野原で浅ましい女の屍骸を見て帰つてから、その形相が頭にこびりついて離れず、妻と相抱いて寝ながら、妻の顔をさぐり合はすと、額のありどころ、鼻のありどころ、唇のありどころ等々が、悉くその死人の相にそっくりであるように思われて、結局無常を悟るに至ると云う筋で、「止観のなかに、人の死にて身のみだるゝより、遂にその骨を拾ひて煙となす迄の事を説きて侍るは、見る眼も悲しう侍るぞかし、斯やうの文も暗き男のおのづからその心おこりけん事」は、猶々有難い事であると云つてゐる。

そこで、その修行とはどう云うことをするかと云うのに、かの禅僧

が坐禅する時のように独りしずかに座を組んで瞑目沈思し、一事に向つて想念を集注するのである。その一事とは、たとえば自分の身は父母の姪樂の結果の産物であつて、本来は不浄不潔な液体から生れたものであると云うこと、大智度論の言葉を引用すれば、「身内の欲虫、人の和合する時男虫は白精、涙の如くにして出で、女虫は赤精、吐の如くにして出づ、骨髓の膏流れて此の二虫をして吐涙の如くに出でしむ」るのであつて、此の赤白の二涕の混合したものが自分の肉体であると云うことを考える。次にいよく生れ出る時は、むさく臭い通路から出るのであること、生れてから後も大小便をたれ流し、鼻の孔から涕汁をたらし、口から臭い息を吐き、腋の下からぬる／＼した汗を出すこと、体内には糞や尿や膿や血や膏が溜つてい、臓腑の中には汚物が充滿し、いろ／＼の虫が集つてゐること、死んでからはその屍骸を獣が噉い、鳥が啄み、四肢が分離して流れ出し、腥い悪臭が三里五里の先まで匂つて人の鼻を衝き、皮膚は赤黒となつて犬の屍骸よりも醜くなること、要するに此の身は生れ出る前から死んだ後までも不浄であると云うことを考える。

摩訶止観と云う書には、これらの思索の順序が述べられていて、人体の不浄なる所以が種子不浄とか五種不浄とか云う風に、細かく分けて説明されているのであるが、同書は又、人が死んでからその屍骸の変化して行く過程を描くのに委曲を盡し、第一の過程を壊相とか、第二の過程を血塗相とか、第三を膿爛相、第四を青瘀相、第五を噉相とか云う風に説いていて、まだこれらの相を諦観しないうちは、妄りに人に恋慕したり、愛着したりするけれども、もしこれらを諦観し終れば、慾心がすべて止んで、たつた今まで美しいと感じたものが、とても鼻持ちならないように思えて来る。それは

恰も、糞を見ないうちは飯が喰えるけれども、一旦あの臭気を嗅いたら、胸がムカ／＼して食えなくなるのと同様である、と云っている。

しかし、ひとり静坐してこう云う道理を考えたり変化の過程を想像したりするだけでは、なお十分に体得出来ない場合もあるので、時には人の屍骸の放置してある所へ出かけて行き、止観に書いてあるような現象の起るのを眼のあたりに見たりすることも、矢張一方法とされているのであって、前掲の中間僧はそれを実践していたのである。かの僧が夜なく山を抜け出して蓮台野へ行ったように、一度や二度でなく、何度も繰り返して屍骸の変貌するさまを観察し、壞相や、血塗相や、膿爛相を眼に馴染ませると、しまいは一室のうちにあって端坐瞑目したげで、それがまざ／＼と見えるようになる。いや、それどころでなく、たとい衆人の眼には絶世の美人と映ずる婦人を拉し来つても、行者の眼には一箇の忌まわしい腐肉や血膿のかたまりとして映ずるようになさるので、修行の功を試すためには左様な美人を実際に連れて来て眼の前に据えつゝ、観念を凝らすことなどもあると云う。で、そう云う功を積んだ行者がひとたび不浄観を行ずると、生きた美人がひとり行者自身の主観に醜惡に映ずるばかりでなく、第三者の眼にまでそう見えるようになる。かの中間僧が、主の上人に粥を観じて見せよと云われて観念を凝らした時、粥が化して白い虫の集団になったと云うのはその意味であつて、真に不浄観を成就すればそう云う奇蹟を行うことさえ出来るのである。

さて、少将滋幹の日記に依れば、彼の父翁の老大納言も亦、不浄観を行じようとしたのであって、而も老大納言の場合は、かの失われた鶴——声を碧雲の外に断ち、影を明月の中に沈めた佳人の艶

姿が、いつ迄も眼底を去りやらず、断腸の思いに堪えられないまゝに、その幻に打ち克とうとして一念發起するに至ったことは明かであつて、その夜の父は滋幹を相手に、まず不浄観の説明から始めて、自分は何とかして自分に背いた人への恨みと、恋慕の情を忘れてしまいたい、心の奥に映っているかの人の美貌を払拭して、煩惱を断ち切つてしまいたい、自分の行為は狂的に見えるかも知れないけれども、自分は今、その修行をしているのである、と、そう語つたのであつた。

「そんならお父さまは、あゝ云うものを見にいらつしやるのは今夜が始めてではないんですね」

父の長話が一段落へ来た時に滋幹が尋ねると、父はいかにもそうだと云うように頷いて見せた。父はもう数箇月も前から、折々月の明かな夜を選んで、家の者たちの寢静まった時刻をうかがひ、何処と限ったことはなく、野末の墓場などへ忍んで行つてひとしきり観念を凝らしてから、明け方にこっそり戻つていたのであつた。

「そうしてお父さまは、もう迷いがお晴れになったんでしょか」
滋幹がそう云うと、

「いゝや」

と云つて、父は立ち止まって、遠い山の端の方へ眼をやりながらほつと息をした。

「なか／＼晴れるところではない。不浄観を成就すると云うことは、口で云うような容易いものではないんだよ」

それきり父は、滋幹の方から話しかけても相手にならず、何かしら考に囚われている様子で、家に着くまで殆ど一語を発しなかった。父のあとについて滋幹がそう云う夜歩きの供をしたのは、その一夜だけであつた。父は前から人目を忍んで時々そんなことをしてい

たと云うのであるから、恐らくその以後に於いても、なお幾度かさまよい出たことがあるに違ひなく、たとえばその翌日なども、夜更けて父がしめやかに戸を開けて出るけはいを、滋幹はそれと気づいていたけれども、父も滋幹を連れて行こうとはしなかったし、滋幹

も、再び父の跡を附けようとは思わなかった。それにしても、父がああの時まだ頑是ない幼童を捉えてあんな風に自分の心境を語ったのは、どう云うつもりだったのか、滋幹は後になってもいぶかしく思う折があったが、彼は実に生涯にたゞ一度、父と二人きりでそんなにも長い時間を話し合った訳であった。尤も「話し合う」と云つても大部分は父がしゃべり、滋幹は聞かされていたのであつて、父の言葉の調子は、最初は何となく重々しく、少年の心を壓するやうな沈鬱味を帯びていたけれども、語り進むに従つて、訴えてゐるやうな云い方になり、しまいには滋幹の思いなしに、泣きごえを出しているやうにも聞えた。そして滋幹は子供心に、相手が幼童であることを忘れて取り乱しているやうな父が、とても観念を成就することなどは出来ないであらう、恐らくいくら修行をしても徒勞に終るのではあるまいか、と云うやうな危懼を抱いたのであつた。彼は、恋しい人の面影を追うて日夜懊惱している父が、苦しみの餘り救いを佛の道に求めた経路には同情が出来たし、そう云う父を傷ましいとも気の毒とも思わないではいられなかったが、でもありていに云うと、父が折角美しい母の印象をそのまゝ大切に保存しようとするので、それをことさらに忌まわしい路上の屍骸に擬したりして、腐りたゞれた醜惡なものと思ひ込もうとするのには、何か、憤りに似た反抗心の湧き上るのを禁じ得なかつたのであつた。実際、彼はもう少しで、

「お父さま、お願いです、私の大好きなお母さまを汚さないで下さ

い」

と、話の途中で幾度か叫びたくなつたのを、辛うじて抑えたのであつた。

そう云うことがあつてから十箇月ばかりを経、明くる年の夏の終りに父は此の世を去つたのであるが、最期の折には果して色慾の世から解脱しきれていたのであらうか。嘗てあんなにも恋ひ焦れていたその人を、一顧の価値もない腐肉の塊であると観じて、清く、貴く、豁然と死んで行つたであらうか。それとも少年の滋幹が豫想したやうに、結局佛にも救われなくて、再びいいし人の幻に苛まれながら、八十翁の胸の中になお情熱の火を燃やしつゝ息を引き取つたのであらうか。――滋幹は、父の内部の闘争がどう云う結果を告げたかについて確證は挙げ得ないのであるが、しかし父の死に方が決して人の羨むやうな安らかな往生ではなかつたことから推量して、多分あの時の自分の豫想が誤まつてはいなかつたように思うのであつた。

いったい、普通の人情からすれば、逃げ去つた妻を諦めきれない夫として、その妻が彼に生んでくれた一人の男の子を、今少し可愛がつてもよい筈であり、妻への愛情をその子に移すことに依つて、いくらかでも切ない思いを和げようとすべきであるが、滋幹の父はそうでなかつた。彼の場合は、彼を捨てゝ行つた妻そのものを取り戻すのでなければ、他の何者をも、たといその人の血を分けた現在の我が子を持つて来ようとも、決してそんなものに胡麻化されたり紛らされたりするのではなかつた。それほど父の母を恋うる心は純粹で、生一本であつた。滋幹は、父が彼にやさしく話しかけてくれた記憶を一度も持たない訳ではないが、それは必ず母のことが話題になつてゐた時に限り、そうでない時の父と云うものは、凡そ子

その十一

に対して冷淡な人でしかなかった。だが又滋幹は、子を顧みる暇のないほど、母のことで頭が一杯になっていた父であると思うと、その冷淡を少しも恨む気になれず、寧ろそうであつてくれたことを嬉しくさえ感じるのであるが、何にしても、あの夜のことがあつてからの父は、いよく子に対して冷淡になり、滋幹のことなど全く念頭になくように見えた。云つて見れば、いつでもじつと眼の前にある虚空の一点を視詰めたきりの人のようであつた。そんな訳なので滋幹は、最後の一年間ばかりの父の精神生活について、父自身からは何も聞き得なかつたのであるが、でも、父が一時止めていた酒を再び嗜むようになったこと、依然として佛間に閉じ籠つてはいたけれども、もうその壁には普賢菩薩の像が見えなくなつてしたこと、そして経文を読む代りに、いつか又白詩を吟ずるようになっていたこと、等々には心づいていたのであつた。

筆者は、老大納言がどう云う精神状態に於いて死んだかについて、せめてもう少し委しい資料を得たいのであるが、何分にも滋幹の記録にはこれ以上のことを見出だせないのです、たゞ、前後の事情から判断を下し、最後には遂に救われなかつた人として、——いとしい人の美しい幻影に打ち敗かされ、永劫の迷いを抱きつゝ死んで行つたのであらうと、考えるより外はない。蓋し此のことは、老大納言その人に取つては傷ましい結末であつたけれども、滋幹に取つては、父が母の美しさを冒瀆せずに死んでくれたことになるので、何物にもまさる喜びであつたかと推量される。

かくて、老大納言卒去の翌年に左大臣時平が死に、それから約四十年の間に時平の一族が次々に滅んだことは既に記した通りであるが、天子は醍醐、朱雀を経て村上となり、世の中は藤原氏や菅原氏の栄枯盛衰の外にも、いろ／＼な有為転変があつた。その間滋幹は、何処でどう云う風にして人となり、少将の位にまで昇進したのであるか、日記は母のことを語るに忙しくて、自分のことは閑却されているのであるが、記事の様子から想像すると、父の死の直後何年間かは、乳人の許に引き取られて養育されていたのであらう。かの讃岐と云う老女は、後に北の方の許へ走つて本院の女房になつたことまでは分つているが、それきり日記に現れて来ない。又滋幹の腹ちがいの兄弟たちや、彼等の母に当る人々のことは、何の交渉もなかつたのであらうか、此の日記の全篇を通じて何処にも消息

は伝えられていない。しかし滋幹は、自分の胤^{たね}ちがいの弟に当る中納言^{あつたず}敦忠^{あつたず}に対しては、餘所^{よそ}ながら深い親愛の情を寄せていた。彼と敦忠とは門地^{もんち}や官位が違^{ちが}う上に、父同士の間に夫人のことでいきさつがあつたことが妨^{さまた}げになつて、何となく双方に遠慮^{えんりょ}があり、互に餘り接近することを避^さけていたらしいのであるが、にも拘^からず滋幹は、ひそかに敦忠の人柄に好感を抱き、蔭ながらその人の幸福を祈^{いの}りつゝ、常にその行動を見守^{みも}つていたのであつた。それと云うのも、畢竟^{ひつぎやう}敦忠が母親似であつたからで、中納言を見ると、遠い昔に會つた母の風貌^{ふうぼう}を想^{おも}ひ起してなつかしさに堪^たえないと、滋幹は幾度か記しているのである。そして、自分の容貌が不幸にして母に似ず、父に似ていることを歎^{なげ}き、母が逃げ去つてからの父が、母を恋^こしがるばかりで自分を可愛^{あい}がつてくれなかつたのは、自分の顔^{かほ}が母親似でなかつたからであらう、と云い、敦忠が時平の死後も母と一緒に暮^くらしているのを羨^{うらや}み、母はあのめでたい男ぶりの敦忠をさぞいつくしんでいるであらうが、自分のような醜^{みにく}い顔をした子息は、たとい一緒に暮^くらすことが出来たところで可愛^{あい}がつては貰^{もら}えないであらう、母は父を嫌^{きら}つたように、必ず自分をも嫌^{きら}つたであらう、なども云つているのである。

ところで一方、滋幹の激しい思慕の対象であつた母なる人、その後の夫人在原氏は、どんな風にして餘生を送つていたことであらうか。——彼女は時平に先立たれた時が二十五六歳だつたであらうが、それから若く美しい未亡人として静かな生涯をきたたのであつたか、或は又も第三第四の男を作つたのであつたか。嘗^{かつ}て老納言の妻として、平中^{へいしゅう}と云う情人を持っていた女性であつてみれば、少くとも人目を忍んで誰かと甘いさゝやきを交^{かわ}すぐらいなことがあつても不思議はないが、そう云うことも今はすべて知られていない。

父よりも母を偏愛した滋幹は、たとい母のことについて悪い風聞^{ふうぶん}があつたとしても、そんなことを記す訳はないが、こゝでは暫く彼の日記を信用して、母は左大臣の遺^{わす}れ形見の敦忠の成長を楽しみに、佗^わびしくつゝ、ましく後家^{ごけ}を通して行つたのであるとしておこ^こう。それにしても、前の夫の老納言が彼女に焦^これつゝ、苦しみ悶^{もだ}えて死んだことや、平中が彼女に背^{そむ}かれた悔^{くや}し紛^{まぎ}れに侍従の君を追^おひ廻して、とう／＼そのために命を落す羽目になつたことなどを聞^きいては、どんな感想を持つたことであらうか。左大臣が權勢^{けんせい}を恣^{ほしいまま}にしていた間こそ、彼女も本院の北の方として多くの人の崇敬を集め、羨望^{せんぼう}の的となつていたであらうが、左大臣の死後は、恐らく昔日^{せきじつ}の榮華^{えいが}も一朝の夢と化して、萬事に不如意^{ふにようい}を啣^{かじ}つ身の上となつたであらう。彼女に凄^{すさま}じい熱情を注いだ男たちが次々に死に、左大臣の一家一門が菅丞相^{すが}の祟^たりに依つて一人々々斃^たれ、最後にいとし子の敦忠までが取られて行つたのを見ては、彼女もさうに無常の風が身に沁^{しみ}みたであらう。

だが、滋幹は、そんなに母と云うものに懂^{わか}れつゝけながら、どうして彼女に近寄ろうとしなかつたのであらうか。左大臣の存生中^とは兎^うも角^{かく}も、大臣が卒去してからは、逢^あうのに格別の支障^{ししょう}もないように思^{おも}えるけれども、敦忠をさえ避けるようにしていたとすれば、まして母を訪^{おもと}ふことなどは、彼の地位として差控^{さこう}えなければならなかつたのであらうか。それについて滋幹の日記は云う、——自分は十一二歳の頃、幾度か母に逢^あひたいと云う望みを洩^{もら}したことがあつたが、世間のことはそう簡単に行くものではないませぬ、お母さまはもう餘所^{よそ}のお家の人なですと、そのつど乳人^{めのと}に戒められた。お母さまはもうあなた様のお母さまではなくて、われ／＼よりは身分の高いお方のお母さまなのですと、乳人はさうも云つて聞かした。

——と。滋幹は又云う、——やがて自分は成人し、乳人の膝下を離れて一人立ちするようになり、何事も自分で判断して処理する年齢に達したが、そうなるてからはいよく乳人の云った言葉が本当であつたことが分つて、なか／＼母に逢う機会などは得られなかつた。自分は年が行けば行くほど、母と自分との距離が遠くなるのを感じた。たとい夫の左大臣は亡くなられても、矢張母は自分などの手の届かない雲の上の人、高貴の家の後室として多くの人に冊かれた。そう考えると、まことに乳人の云つた通り、もうその人は自分などが「母」と呼ぶべき人ではなかつた。悲しいことだが、自分の「母」は既に此の世にいないものと思わなければいけないのであつた。——と。蓋し、それでなくても、自分は父の老大納言と共に母に見限られたのであると思つていた滋幹は、母に対して一種の僻み^{ひが}を抱いていたらしいので、そんなことが一層母との間を心理的に遠ざける因となつたのもあろう。

そうこうするうち、天慶六年三月に敦忠が死に、それから程なく母は出家したのであつたが、その噂は滋幹の耳にも這入らない筈はなかつた。今迄滋幹と母との仲を隔てゝいた障壁の一つは、敦忠と云うものゝ存在であつたと察しられるが、今やその人が逝去したとすれば、図らずもこゝに機会は廻つて来た訳で、もし滋幹が欲するならば、母に逢う道は容易に見出されたであらう。嘗てその道を阻んでゐた浮世の義理や掟などは、今となつては全く除かれていたであらうし、まして尼となつた母は、西坂本の敦忠の山莊のほとりに庵^{いおり}を結んで暮らしてゐたので、そう云う消息も滋幹は、風のたよりに聞いてゐたに違ひなかつた。もはや母の身の周りには監視の眼もなく、草の庵の柴の戸はそは近づく者を拒まないで、誰に向つ

ても開放されている筈であつた。とすれば、定めて滋幹も心が動いたことであらうが、それでも猶しばらくは決心しかねて、ためらつてゐたらしい様子が見える。それは前に云つたような僻み^{ひが}だの含羞^{はにか}みだの、せいもあるが、その外にも、滋幹には別に何か、現実の母に会うことを恐れる気持があつたのではなからうか。

思うに、昔父の老大納言が不浄觀を行じた時に、母の幻影の冒瀉^{ぼうじやく}されることを歎いて父を恨んだ滋幹、——四十年来その人と隔絶しながら、おぼろげな記憶の中にある面影を理想的なものに作り上げて、それを胸奥に秘めて来た滋幹は、いつ迄も母を幼い折に見た姿のまゝで、思慕してゐたかつたであらう。然るに、それから四十年の星霜^{せいそう}を経、さまざまな移り変りの末に世捨て人となつて佛に仕えてゐる現在の母は、どんな風になつてゐるであらうか。滋幹の記憶する母は、二十一二歳の髪^{かみ}の長い頬^ほの豊かな貴婦人であるのに、西坂本の庵室^{あんしつ}に隠栖^{いんせい}する尼僧^{にそう}の母は、すでに六十歳を越した老嫗^{らうお}であることを思う時、滋幹の心は自然冷めた。現実の前に出ることを尻込みしなかつたであらうか。彼にして見れば、永久に昔の面影を抱きしめて、あの時に聞いたやさしい声音^{こゑ}や、甘い薫物^{たきもの}の香や、腕の上を撫でゝ行つた筆の穂先の感触や、そう云うさまざまの回想をなつかしみつゝ生きて行く方が、なまじ幻滅の苦杯^{くはい}を嘗めさせられるより、遙かに望ましいことのように思えたであらうか。滋幹自身は格別そう云う告白をしてゐる訳ではないが、母が尼となつてから後、なお数年の歲月^{むな}が空しく過ぎたのには、多分以上のような事情があつたのではなからうかと、筆者は推測するのである。

出家した滋幹の母が住んでゐた西坂本、即ち今の京都市左京区一乗寺のあたりに敦忠の山莊^{さんさう}があつたことは、拾遺集^{しゅういしゅう}卷八^{くわんぱち}雜上^{ざうじやう}の部伊勢の歌に、「権中納言敦忠が西坂本の山莊の滝の岩にかきつけ侍り

音羽川せき入れて落す滝つせに

人のこゝろの見えもするかな

滋幹が坂路へかゝつたのは、日がよう／＼西に傾きかけた頃で、水呑峠の地藏堂のあたりを過ぎ、音羽の滝のひゞきを耳にしながら麓

おちたぎつ滝の水上年つもり

老いにけらしな黒きすぢなし

此のあたりは山に近い上に木立こだちが深いので日が遠く、まして黄昏時たそがれどきなので、冷えくとした空氣が身に沁むのであったが、去年の落葉の積たまりっているのを搔かき分けながら、母屋おもやと覺しい建物の所まで行いつて見ると、そこも今は廃屋はいおくになつてゐるらしく、格子こうしが固く鎖とざしてあつて、夕ぐれであるのに一点の灯ひも洩れてはいない。階きざはしに腰をおろして疲れを休めていた滋幹は、妻戸の蝶ちょうつがい番が損のそじて扉ふたが一枚外はずれかゝつてゐるのに氣が付き、床に上つて中を覗のぞいて見たけれども、内部は眞つ暗で、黴臭かびい湿氣の匂がするばかりである。滋幹は、以前は誰の住まいであつたのかしらんと思ひ、或はこゝが亡き中納言の山莊ではなかつたらうか、と云ふことに心づいた。

いかさま、中納言が逝去してからは誰も住む人がなくて、朽ちるにまかせてあるのであろうか。そうだとすれば、嘗て中納言と共に此の山荘に起き臥し、中納言の死後も何処か此の近くに庵を結んでいたと云う母も、今は恐らく此の地に住んでいないのではあるまいか。いかに世を捨てたからと云って、女の身で此のような淋しい所に暮らしていらはしないであらう。……滋幹はそんなことを考えながら、耳の奥がじんとするような静かさの中になお暫く憩うていた。その間にも四辺の暗さと寂寥さとはひしくと加わって来るのであったが、一度は母が住んでいた跡かと思えば、矢張直ぐには立ち去りかねるのであった。

と、その時、梟の啼く声に交って、微かにせゝらぎの音が聞えるようなので、その音をたよりに、彼は漸く身を起して遣り水の流れに沿いながら、池を廻り、築山を越え、植込みの間をくゞって行くと、果して崖に一条の滝が懸っていた。崖の高さは七八尺もあるであらうか、急な断崖ではなくて、なだらかな勾配のところゝに形の面白い石を配置し、落ちて来る水がそれらの間を屈曲しつゝ、白泡立って流れるように作られてい、崖の上からは楓と松が参差と枝をさしかわしながら滝の面へ蔽いかぶさっているのであるが、蓋し此の滝は、さっきの音羽川の水を導いて来て、こゝへ堰き入れたのであろう。滋幹はそう心づく、あの、「音羽川せき入れておとす」と云う伊勢の歌が胸に浮かんだ。なるほど、此の歌にある「滝つせ」は、此の流れを詠んだものであることは明かで、此の山荘が亡き中納言の別業の跡であることは、今は疑いを入れないのであった。

滋幹は、黄昏の色が又一段と濃さを増して、水の面さえ見分けにくゝなつて来たので、こゝらあたりで引き返そうかと思ひながら、な

お何となく心残りが感じられるまゝに、川瀬の石を跳び越えく、いつか滝の落ち口より上の方へ登って行つた。もうその辺は構えの外であるらしく、泉石のたゞずまいも人為的な庭園の風情はなく、次第に殺風景な山路になつていたのであったが、ふと向うを見ると、溪川の岸の崖の上に、一本の大きな桜が、周囲にたゞよう夕闇を弾き返すようにして、爛漫と咲いているのであった。「見る人もなくてちりぬる奥山の」と云う貫之の歌は紅葉を詠じたものだけれども、かゝる時、かゝる合あい、人知れず春を誇っている花も亦、「夜の錦」であることに変りはない。恰もそれは、路より少し高い所に生えているので、その一本だけが、ひとり離れて聳えつゝ、傘のように枝をひろげ、その立っている周辺を艶麗なほの明るさで照らしているのであった。誰でも経験することであるが、人通りのない暗い夜路などを行く時、たまゝ美しい妙齡の女の一人歩きをしているのに出遇うと、男の人に出遇つたよりも却って無気味な恐怖に襲われる。それと同じに、こう云う無人の境にあって静かに咲き満ちている此の夕桜には、何か魔物めいた妖麗さが付き纏っているように思えて、彼は我が眼を疑いながら、左右なく近寄ろうともせず、遠くから眺め渡していた。桜のある崖は、それが殆どひとかたまりの大きな岩の苔蒸したもので、川のおもてから一丈程抽んでいたのであるが、ひとすじの細い清水が、何処からか出て来て、その崖の下をめぐって、下の溪川へ流れ落ちてい、崖の途中から一と叢の山吹の花が、清水の方へしなだれかゝっているのである。でも、そう云えばさっきから餘程の時が過ぎているのに、滋幹のインでいる所から、向うのこまぐとした景色がこんなに鮮かに見えるのは、——花が雪あかりのような作用をして、あたりの物象を暗まざれから浮き上らせているのであろうか、

——と、ちよつと滋幹はそんな気がしたが、それは花のあかりではなくて、花の上の空にかゝった月が、今しも光を増して来たのであった。土の上はしつとりと湿しめっていて、空氣の肌ざわりはつめたいのだけれども、空は弥生やよひのものらしくうつすらと曇くもつて、朧々ろうろうと霞んだ月が花の雲を透して照っているのです、その夕桜のほの匂う谷あいの一郭が、幻まぼろしじみた光線の中にあるのであった。

嘗て滋幹は幼少の折に、父の跡をつけて野路を行き、青白い月光の下で凄惨せいさんな場面を目撃したことがあつたが、あれは秋の真夜中の鋭く冴さえた月であつて、今日のようなどんよりした、綿のように柔かく生暖かい月ではなかつた。あの時の月は地上にある微細な極小物までも照らし出して、屍骸の腸はらわたにうごめいている蛆うじの一匹々々をも分明に識別させたのであつたが、今宵の月はそこらにあるものを、たとえば糸のような清水の流れ、風もないのに散りかゝる桜の一片二片、山吹の花の黄色などを、あるがまゝに見せていながら、それらのすべてを幻燈の絵のようにぼうつとした線で縁取っていて、何か現実ばなれのした、蜃気楼しんきろうのようにほんの一時空中に描き出された、眼をしばだゝくと消え失せてしまふ世界のように感じさせる。……

そんな不思議な、特殊な明るさの中のことであるから、いつからそこにそう云うものがあつたのか判然しないのであるが、やがて滋幹は全く思いがけない或るもの、——何か白いふわくしたものが、その桜の木の下でゆらめいているのに眼が留まつた。一杯に花をつけた枝の一つが、ついその上あたりまで垂れ下っているのです、最初はそのそれに見紛まじうて分りにくかつたのであるが、花にしては餘りに大きく白いふわくしたものは、或は彼が心つく前からそこにひらめいていたのかも知れなかつた。実を云うと滋幹は、それに眼を留め

てから間もなく、それが非常に小柄な僧侶、——その背の低さと肩の細さから判断して恐らくは尼僧、——と推定される人物の、桜の幹に寄り添たすうてゐるのであること、そしてその尼——かも知れない人は、年老いた僧がしばく防寒用に用いるあの白い絹の帽子を、頭からすっぽり被かぶつていたので、それがあゝ云う風にゆらめいているのであることに、大体気がついていたのであつたが、それでもそうと気づいた途端に、いやく、これは夢なのだ、こんな所にどうして尼などがいるものか、自分は夢を見ているのか、そうでなければあの魔物じみた夕桜の妖精が現れたのだ、……と、そんな風に、内心自分の視覚の世界を否定しようとするものがあつて、確かに我が眼で見つゝあるものを故意に信じまいとしていたのであつた。

でも、彼がしきりに否定しようとするにも拘からず、月の面を蔽おほうていた雲の羅うすものが少しずつ剥はがれて行くに従い、だんくんとその人影は刻明になつて来て、半信半疑であつたものが、今は尼であることに紛れもなかつた。彼女が被おほっている帽子は、ちょうど後世のお高祖頭巾こたすきんのように首の全部を覆おほひ隠して、肩の上まで垂たれているので、顔はこゝからは分らないけれども、しよんぼりたすいんで空の方を仰いでいるのは、花に見惚みとれているのであろうか、花の上にある月にあこがれているのであろうか。……と、尼はしずかに花の下を去つて、その崖を下り始めた。そして清水のほとりに来て身をかゞめながら、手をさしのべて山吹の枝を折ろうとするのであつた。

尼がそうしている間に、滋幹も亦我また知らず歩みを運んでいた。彼が出来るだけ足音を忍しのばせながら、そうつとうしろに近寄つて行くと、尼は手折たおつた山吹を持つて立ち上り、又崖の方へ引き返そうとす

るところであつた。いかさま、こゝへ来て見ると、その崖の上の苔の間に微かなひとすじの坂路があつて、そこを登り詰めたあたりに傾きかゝつた小さな門が建っているのは、多分その奥が庵室になつてゐるのであらう。

「もし、……」

身近に人のけはいがするのに驚いた尼の、はつと此方を振り返つた時に、滋幹は何かの力で背後から突かれたように尼の方へのめり出ていた。

「もし、……ひよつとしたらあなた様は、故中納言殿の母君ではいらつしやいませんか」

と、滋幹は吃りながら云つた。

「世にある時は仰おほつしやる通りの者でございましたが、……あなた様は」

「わたくしは、……わたくしは、……故大納言の遺わすれ形がたみ身、滋幹でございます」

そして彼は、一度に堰せきが切れたように、

「お母さま！」

と、突然云つた。尼は大きな体の男がいきなり馳はせ寄つてしがみ着いたのに、よろくとしながら辛かろうじて路ばたの岩に腰をおろした。

「お母さま」

と、滋幹はもう一度云つた。彼は地上に跪ひざまずいて、下から母を見上げ、彼女の膝ひざに靠もたれかゝるような姿勢を取つた。白い帽子の奥にある母の顔は、花を透かして来る月あかりに暈ぼかされて、可愛く、小さく、圓光を背負つてゐるように見えた。四十年前の春の日に、几帳きちようのかげで抱かれた時の記憶が、今歴々と蘇よみがえ生つて来、一瞬に

して彼は自分が六七歳の幼童になつた気がした。彼は夢中で母の手にある山吹の枝を払い除けながら、もつとく自分の顔を母の顔に近寄せた。そして、その墨染の袖に沁みている香の匂においに、遠い昔の移り香を再び想い起しながら、まるで甘えてゐるように、母の袂たもとで涙をあまたゝび押し拭ぬぐつた。